

324

507

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



36.1225

7986



真宗教典綱要

佛教大學長 蘭田宗惠師序文
輔教 足利宣正 著

京都興教書院

大正
5. 8. 8
内交

眞宗教典綱要序

足利宣正君の好學の士たることは、能く人の知るところなり。君本學考究院を出で、己來、星霜を経ること既に四回、常に自坊に在て、銳意布教傳道に就事し、餘暇あれば必ず典籍を手にし、未だ曾て一日として學を廢せしこと無し、今や其間に得たる所感を録して「眞宗教典綱要」と題し、之を世に公にし、以て山立中學附屬專修學院卒業者の内典に關する學力の不足を補充せんとす、其志や好みすべし、此書素より著者の研究の本領を發表せる者に非れば、之を以て君に對して直ちに鼎の輕重を問はんとするは、是れ君を知らざるの甚しき者なり、予今其記するところを見るに、秩序井然、簡易明了、初學者をして眞

宗教典の梗概及び其教義の要領を了得せしむるの點に於て
毫も遺憾無きを覺ふ此書や、實に、世の眞宗の何たるを理解せ
んとする者の爲めの好指針たり、其功豈に獨り專修學院卒業
者の學力を補充するに止まらんや、予は大に此種の通俗的説
明の書を歡迎し、併せて君の小成に安んずる無からんことを
希望するものなり。

大正五年五月一日

佛教大學長 藺田宗惠

自序

予嚮きに眞宗學座の業を卒ふるや。爾來一院を主宰するもの三年有半。窃かに
地方教界の現狀を觀察するに、缺陷の固より多々あるべきも、特に寺院住侶の概
して専門知識を缺如せるものあるは、偶以つて地方教界の不振と關與するものあ
るを知れり。即ち地方教界刷新の一策として、少くとも寺院住侶に眞宗教徒とし
ての常識教育を施すの急務なるを主張せしむらば、一寺住職たるの
資格は、最低限度に於いて、中學佛教科を卒ふるの規定なるも、場合に依つては該佛
教科の三年終了若くは臨時の試補住職試験を通過すれば可能なるが如き現制に
在り。斯種の人は、概して智識慾に乏しく、一時的の學習を終つて自坊に歸れば、地
方は又刺撃なく、要求もなければ、鍛鍊向上は思ひも寄らず。年々寺務家事に追は
るゝだけ意氣又消沈し、終に無學の人と化し去り、自ら不知不識教界不振の禍根を
作す。予の寺院教育を絶叫する又故なしとせんや。即ち自ら揣らす心竊かに書

策せるもの久し焉。

偶茲歲五月愛兒を喪ひ痛悔措く能はず。中陰壇下精進潔齋靜かに報恩の至心に住し祖典を拜誦するもの數旬日。無懺無愧の身ながら又多少感激に堪へざるものなしとせず。惟へらく此の好因縁を徒然ならしめず。日夕拜誦せる祖典を解説し是れを系統的に案配して依つて以て年來願望の常識教育を満足せんには又以て報恩の經營に擬し得べきかと。即ち勿々筆を呵して本書の作製を急けり然るに予の身邊は頗る多忙にして悠々筆硯に親しんで是れに専らなるを許さず殊に當時不慣なる本堂の修繕工事を宰して心身を勞するもの多し。即ち小閑を盗み一節又一節一章又一章辛らく稿を進めしも尙ほ且つ座右參考書に乏しき嫌ありしとは終に本書をして豫期の計畫に伴ひ能はざらしめしを憾む。

由來眞宗教典の名は餘りに數然として範圍の定れるなし。範圍を限らんには取捨に迷ふの憾みあり。限らざれば片々たる小冊子をも數ふべく繁を恐れんよりは寧ろ時に必要を見ざるものもあるべく又眞偽未決のものもあつて詮索考證

等に違あらず。蓋し眞宗の教典には叢書本と目錄本との二様あり。叢書としては『淨土三部經』『七祖聖教』『眞宗法要』を初め範圍の狭少なるものとして『藏外法要』『眞宗法要拾遺』『淨土眞宗龜鑑』『眞宗遺文纂要』『大谷遺法纂要』『小部集要』『眞宗法彙』等あり。又目錄としては『淨土眞宗聖教目錄』『淨土眞宗聖教目錄』『眞宗教典志』『假名聖教目錄』『淨土眞宗書目』等あり。

予の本編纂に當り若し叢書本の一部若くは全部を執らんか緊要なる『本典』を初め漢文聖教の全部並に『三帖和讃』『御文章』等を遺すの憾みあり。さればとて目錄本に依り重複せるものを除く全部を執らんか餘りに廣汎に失し眞偽未決もあり殆んど意義をなさざるの嫌あり。近時『眞宗聖典』の名の下に續出するものもあるも又それ々々長短得失あり。獨り比較的選擇その當を得たるは本派本願寺が東京文會堂をして發行せしめたる『眞宗聖典全書』なりとせん歟。戴するところ和漢を兼ね宗祖以下緊要なる聖典を網羅す。先づ以て眞宗聖典を代表せるものとして内外に紹介し普及せしむるに足る。予は即ち主として該書に依憑せり。されば

十全なるものゝ出版を見ざる限り、予は該書の本願寺の名に依つて益々普及し、權威を以て内外に領解せられんことを希望して已まざるなり。
聊か本書作製の由來を告白す。若し夫れ本書にして、僅少にても著作の意義を實現するを得ん歟。予に取つては、亡兒に對する積極的精進の記念を兼ねたれば、願みて幾分慰めらるゝものあるを覺ゆるなり。

大正四年十月十三日

足利宣正 識

凡例

- 一 本書は序文に於いて見るが如く、真宗教徒に對する常識教育の一端として編纂せる、真宗教典の歴史的關係、及び内容の概説なり。
- 一 大無量壽經を時に依り單に大經と稱し、觀無量壽經、阿彌陀經を又次第の如く觀經、小經と略稱せし場合あり。
- 一 祖師先達を呼ぶに、一々敬稱を以てせざるも素より別義なし。著者の敬意は敬稱の有無に關せず。
- 一 諸教典の解説に當り、當該書に於ける歴史上、及び教理上の問題は、細大是れを末尾に附記し、解説と併せて讀者の參考に資し、又歎異鈔、口傳鈔、改邪鈔、御文章等を解説せし行掛り上、結論の一章として宗意安心問題の史實を附記する豫定なりしも、紙數の膨張甚だし。即ち他日の業に委して且らく是れを措けり。讀者諒せよ。

一 恩師、蘭田宗惠先生は、特に著者の請を容れて序文を寄せられ、又西谷順誓兄は本書の編纂出版に關し、援助せらるゝところ多し。特に記して謝意を表す。

眞宗教典綱要目次

序 説

- 第一節 佛典の結集……………一
- 第二節 大乘佛教の成立……………八
- 第三節 南傳と北傳……………一一
- 第四節 支那譯……………一三
- 第五節 譯場の制規……………一五
- 第六節 大藏經……………一八

第一編 淨土三部經の概説

- 第一章 淨土三部經の成立……………二二
- 第二章 説處及び説時……………二四
- 第三章 翻譯の年代……………二八
- 第四章 異譯の比較……………二九

第五章 正依と異譯との關係……………四二

第六章 講學註疏の歴史……………四四

第七章 無量壽經の要旨……………五一

第八章 觀無量壽經の要旨……………五五

第九章 阿彌陀經の要旨……………六九

第十章 差別點と一致點……………七一

第二編 七祖聖教の概説

第一章 淨土教史の概要……………七七

第二章 七祖選取の標準……………九二

第三章 十住毘婆娑論と十二禮偈……………九五

第四章 淨土論……………一〇一

第五章 往生論註と讚彌陀偈……………一〇七

第六章 安樂集……………一一〇

第七章 五部九卷……………一二七

第八章 往生要集……………一二四

第九章 選擇集……………一二九

第十章 差別點と一致點……………一三四

第三編 宗典章鈔の概説

第一章 眞宗史の概要……………一三九

第二章 宗祖撰述概観……………一五三

書目——一教行信證——二淨土和讃——三高僧和讃——四唯信鈔文意——五淨土
文類聚鈔——六愚弄鈔——七尊號眞像銘文——八三經往生文類——九入出二
門偈——十往還回向文類——十一一念多念證文——十二正像末和讃、自然法
爾章——十三末燈鈔——十四御消息集——眞偽未決書

第三章 歎異鈔……………一七四

第四章 覺如上人撰述概観……………一七六

書目——一報恩講式——二御傳鈔——三捨遺古德傳——四敬白文——五執持
鈔——六教行信證大意——七口傳鈔——八木願鈔——九改邪鈔——十願々鈔——
十一——最要鈔——十二出世元意——餘他の著作

第五章 安心決定鈔……………一九一

第六章 存覺上人撰述概観……………一九三
 書目——一教行信證六要鈔——二持名鈔——三女人往生聞書——四淨土真要鈔——五諸神本懷集——六破邪顯正鈔——七決智鈔——八步船鈔——九報恩記——十法華問答——十一顯名鈔——十二存覺法語——十三淨土見聞集——餘他の著作

第七章 蓮如上人撰述概観……………二〇三
 書目——一正信偈大意——二御一代聞書——三蓮如上人遺徳記——四實悟記——五御文章——六領解文——眞偽未決書

第八章 反古裏書……………二二三

第九章 慕歸繪詞と最須敬重繪詞……………二二四

第十章 後世物語……………二二四

眞宗教典綱要

足利宣正著

序 説

第一節 佛典の結集

我が釋迦牟尼如來は、迦毘羅衛城主淨飯王の皇子として生れ、二十九歲出家、三十歲成道、八十歲涅槃と稱するの常なれば、其の轉法輪は正しく四十五年に亙れり然り而して四十五年間の説教の如何なるものなりしかは、今日容易に知り得べくもあらず。さり乍ら釋尊の入滅間もなく、三藏の形式を以つて後世に傳へられしに依り、辛らく這を想見し得るのみ。

佛典は如何にして編纂せられしや、又如何なる必要あつて現出せしやを稽ふるに要は、教權を統一し、異義邪執を防がむがために外ならず。由來印度人族は社會



事項を記して後世に傳ふるが如きは得意とせざりし處。殊に宗教上の事實は口誦口傳を尊びしを以つて經典として結集する必要を認めざりし。然るに果なく茲に其の必要を餘義なくせられし事情の生じ來れり。即ち釋尊の涅槃に入らるるや長老の大迦葉は耆闍崛山地方に旅行して在らず。遺弟は迦葉の來着を俟ちて茶毘に附し畢り多くは吠舍離地方に傳道すべく出立せり。時に跋難陀なるものあり。途上大衆に語るらく、「爾今世尊も世に在さざれば戒律に就いて從來の如く嚴制を加ふるものもあるまじ。大衆等少しく意を安んじて可なるべし」と。迦葉是れを聞き心痛措かず。「佛滅早々にして斯くの如くんば遺教の前途圖り知るべからず。或は教團の和合も破れ教法の惑亂を見んも保し難し。今にして遺教の結集をなさずんばならず」と。即ち大衆に提議して滿場の同意を得たり。抑も結集 Sanghiti とは合唱若くは會誦を意味し世に謂ゆる編纂撰集とは其の意を異にす。嚮きに云へるが如く口誦口傳を尊びし當時なれば誦出者の言説を直ちに筆録せしにあらず。誦出者の阿難若くは優婆離が釋尊より聞持せるまゝを

發言せるを、上首更らに是れを會衆一同に傳へ其の確實なるやを諮問したる後會衆一同是れを合唱し口より口に傳持せしにあり。口誦口傳は印度人種の慣習にして、特留斯經の法も未來流通の法も是れを措いて他なし。若し其れ是れを樹皮貝葉に書寫傳持せられし如きは遙かに後世に屬し佛典成立史の問題として別種の研究に坐すものと謂つべし。

蓋し佛世尊の説教を開始せらるゝ場合には、六箇の要件を有す。即ち六成就として、結集又は經典解釋上證信序てふ重要事項に屬するものは是れなり。且らく『觀無量壽經』に就いて云へば、如是と云ふ「信成就」、我聞と云ふ「聞成就」、一時と云ふ「時成就」、佛と云ふ「主成就」、王舍城耆闍崛山と云ふ「處成就」、大比丘衆千二百五十人と云ふ「衆成就」、即ち是れ。語を碎いて云へば阿難が結集の際に當り某は是くの如くに聞けりと、自信を表白し、或る時佛世尊が王舍城に近き耆闍崛山に弟子千二百五十人と俱に在せし時王舍城に斯く々々の騷動ありしと云ふ事實より説教の顛末を復演せしなり。上首大迦葉是れを大衆の承認に俟ち茲に

初めて『觀無量壽經』の成立を見しなり。此間又些の曖昧を許さず。而して後口誦傳持に上る。是れ即ち佛典の神聖視せらるゝ所以なり。

因みに附記すべきは、多數の佛典に掲げらるゝ千二百五十人の事なり。『觀無量壽經』にも『阿彌陀經』にも載せらる。『無量壽經』には萬二千とあり。『觀無量壽經』には又別に菩薩三萬二千の數目出づれども、這は必ずしも執着すべき文字にあらず。或は一種の詩的誇張と見るも不可なし。併し千二百五十人に就ては相當の典據あり。そは事火外道より佛弟子に加はり來れる優爲迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉の兄弟三人が有せし弟子の總數千人と、六師外道より佛弟子に加はり來れる目犍連・舍利弗の弟子合して二百人と、外に佛成道間もなく富樓那・耶舍の出家に依つて附隨し來れる師弟合して五十人と、總數千二百五十人となる。蓋し實は最初佛弟子阿若・憍陳如等もあり。且つ阿難等釋迦族の一輩もあり。限つて千二百五十人と見るべからざるも、今は其の大數を擧げしものと見て可なり。結集の事業は前後四回に互りしものゝ如し。第一回は佛滅間もなく摩訶陀國

王舍城に近く蘇迷蘆山の麓に當れる七葉窟に於いて行はれ、時の阿闍世王は佛敎信者たりし關係上その業を援け特に講堂を建て、會所に充てらるゝ等歡待到らざるなし。迦葉自ら上首となりて是れに當りしが、多數の來會も却つて如何あるべきを憂ひ即ち迦葉は三明六通を備へ佛世尊の說法を聞いて謬らず、辯舌爽快なるもの五百を選び、阿難は經を誦出し、優婆離は律を誦出し、前後六ヶ月を費して其業を畢へり。來集者の數に因んで五百集法と云へるもの是れなり。その結果經藏五門一萬九千六百三十部と、律門二十五門四百二十九部とを大成せしと傳へらる。因みに一言すべし。當時迦葉は阿難に對して、三明中未だ無漏の果位に達せざる等六罪を并べて問責せし如く傳へらるゝも事實疑はし。常隨近の阿難にして果して右に云へる罪過のありしや。史は阿難が懺悔得脱せし如く傳ふるも這は婆羅門出身の迦葉と刹帝利出身の阿難との間に起りし一種の種族的感情なりしならんと思はる。佛道の修行は縦し進境を見たらんも、矢張り人間としての現實生活を脱せざる以上かゝる事實も存せしや疑なし。麗はしくも又悲惨なる

は蓋し人性の自然にてあるなり。

更に傳ふるが如くんば當時迦葉選抜の五百人に漏れたる一部不平の徒は七葉窟外にあつて別に婆師婆を上首とし五藏を結集せりと云ふ。然り而して或は窟内なるを小乗とし窟外なるを大乘とし或は前者を上座部系統とし後者を大衆部系統とせる如きも又疑はし。釋尊涅槃に隠れて幾許もならず人格の光輝燦然として遺弟憧憬の激越なる際公然かゝる教團の分裂を見るべき筈なし。殊に三藏中論藏の存在すら疑ふべきに五藏の結集は更に怪しむべきに似たり。

第二回の結集は佛滅一百年憍薩羅國の比丘に耶舍陀なるものあり。曾て巡錫の途次吠舍離國の比丘が十事の非法を犯しつゝあるを目撃し痛く遺教の將來を思ひ各地の大徳長老に激を飛ばし●來會を請へり。時に參集するもの七百人に及べり。世に又た第二結集を七百集法と稱する所以なり。當時佛教の大勢は東西に分散し東部の進取的なるに反して西部の保守的なる傾向を有せしものゝ如し。されば雙方より四人宛の委員を選定し西部の離婆多なるもの上首となり十

事の非法に就き逐條審議を凝らし會衆一致全部非法と認め前後七ヶ月を費して畢る。無論新戒律を誦出し規定せしにあらす。舊律の奧義を繰り返して十事の非法を認めしに過ぎず。然るに是れに服従せざる東部進取派の人々は別に王舍城結集地の西北に集合し更に會議を開き大衆一千人吠舍離比丘の行事を是認せる決議をなす。是れ即ち教團分裂の先驅なりと傳へらる。

第三回の結集は佛滅二百年の後摩訶陀國阿育王の世に到り教團著しく分裂し上座大衆部合して二十部にも上り動もすれば一代佛教の眞髓歸趣に迷ふの嫌なからす。且つ教權統一の必要ありしを以て阿育王は目犍連子帝須の勸めを容れ首府華氏城に結集の業を行ふ。即ち目犍連子帝須自ら上首となり。主として上座部の徒に依り結集せらる。目犍連子帝須は謂ゆる遺法の付囑として知らるゝ異世の五師の一人即ち大迦葉・阿難陀・商那和須・優婆鞠多に繼ぐ人なり。華氏城の結集は九ヶ月を費し上首自ら一論を著はして外道を破斥す。是れを迦陀跋倫即ち論集と云ふ。結集に論藏の加はりしは此に始まりしものゝ如し。

第四回の結集は佛滅五六世紀の交健陀羅國の迦膩色迦王厚く佛教を信じ、當時の長老大徳に就いて、教法上の質疑を試むるに、其の答ふる處種々區々に互れるあり。王不審に堪へず。即ち教權の統一を圖り、遺教を一味にすべく重ねて結集の業を企つ。協尊者是れが上首となり、世友・法救尊者以下五百人を迦濕彌羅に會し、前後十二年を費して『阿毘達磨婆娑論』を編纂す。以上記するところは、これを結集の顛末となす。

第二節 大乘佛教の成立

右四回の結集に於いて、如何なる經典の成立を見しや、現存大小乗の三藏委くが這裡に出來しものと云ふの常なるも多少疑はしきものあるが如し。蓋し第二結集は恐らく十事の非法認定のみに止まりしなるべく、第四結集も恐らく『大毘婆娑論』のみの編纂なりしと思はる。尤も第四結集の際、外に『鄒婆第錄論』十萬頌の經藏及び『毘奈耶毘婆娑論』十萬頌の律藏を誦出せりとも傳へらるゝが、

事實明かならず。されば第一回と第三回の結集に於いても、大小乗全部結集せられしかと云ふに小乗は兎に角大乘結集の事實の徴すべきものなし。然らば大乘の結集は何時何處で行はれしか、古來の懸案なり。或は第一結集の時迦葉の選拔に洩れし不平徒が別に結集せりとも傳へられ、或は第二第三結集の時その成案に服せざりし進取主義の面々に依つて結集せられしとも傳へらる。又或は金剛鐵圍山に於いて、文殊菩薩上首の下に結集せられしとも云ひ、或は何處と云はず、處處不定の間に結集せられしとも傳へらるが如き、何れも疑問に互らざるなし。是れ雖て大乘非佛說論の由來する所以なりとす。案するに結集は必ずしも、四回に限らざりしものに似たり。現に結集に不平を懷ひて他處に往き、別に結集せしと云ふ傳説もあり。又世に傳へられぬ結集もありしや論なく、且つ又阿闍世王以下王者の信仰に迎合し、或は權門擁護の下神聖なる遺教を結集するを快しとせず、隱忍自重以て我が大乘甚深微妙の法は即ち鐵圍山にて結集すべして、高遠なる見識を有せしものもありしや明けし。由來大乘佛教は理想を尊ぶを以て、幾分の詩

的記述を免れず。併も是れを以て直ちに大乘佛教を批議せんは未だし。然れば即ち大乘佛教結集の史跡尙は容易に抹殺すべからざるものあり。

又或る論者は大乘佛教を以て後世發達せしものとなし其の萌芽を原始佛教の中に求めんとするに似たり。この説方今比較的有力なるものとして一般に領解せられつゝあり。この論法よりすれば大乘經典の成立は佛滅五世紀以前ならざるべからず。何となれば同時代前後の人とも見るべき馬鳴・龍樹の著作に幾多の大乘經典を引用せるもの是れ當時大乘經典の流行せるを證すればなり。殊に又該著作に淨土教典も引證せらるゝを見れば淨土經典の成立年時も想定せらるべく即ち此處を基點として逆觀すれば上來の所説と反對の結果を生じ結集の史實以上更に大乘經典成立史に一光明を與ふるものに似たり。されば佛滅五世紀前何處に於てか結集せられしものとすべく必ずしも右四回の範圍と云はず別立して行はれし私設の結集もありしや疑なし。然れば即ち大乘經典結集の史跡も又甚だ有望なりと云はざるべからず。後學宜しく這裡の疑團を解決すべきなり。

第三節 南傳と北傳

經典の成立即ち口傳口誦の經典が筆寫せられて貝葉若くは書冊に上りしは何時頃なりしか是れも頗る古く或は結集に附隨せしにあらすやと思はるゝ節もあり。兎に角原本としては巴利佛典と散克利圖佛典とあり。巴利の三藏は印度・錫崙・暹羅・緬甸等の南方に傳はり散克利圖の三藏は西藏・蒙古・支那・朝鮮・日本等の北方に傳はれり。前者を南方佛教或は南傳と云ひ後者を北方佛教或は北傳と云ふ然り而して南方佛教は小乗教にして北方佛教は大小二乘に互れり。時に或は南北共通の三藏も尠からず。今兩者を比較するに南方佛教は歴史上の價値に富み北方佛教は哲學上の價値に富み。這是流傳の地方人文上の關係より延ひて遺教に對する觀念に異狀を來せしがためなるべしと思はる。小乗は現實教なれば實際的なり是れに反して大乘は理想教なれば哲學的傾向を有す。然り而して傳播の地域を見るに是れを迎合するに適應せる民俗なれば若干佛典の内容に影響

せしものありしや論なし。輒近に至り巴利・散克利圖語は勿論錫蘭・縮句・西藏・支那譯より漸次歐譯研究せらるゝに至れり。即ち西曆千八百三十三年英國のホチン Brian Houghton Hodgson 駐劄公使として尼波羅に在るや。當時印度研究に趣味をもち千八百三十七年以來その發見にかゝる梵語佛典を歐洲各地の圖書館に寄贈す。此に於いて翕然として佛典研究の業勃興し佛國のビュルヌフ Eugene Burnouf 卒先して梵語佛典の研究に従事するや其門より英國のマクス・ミュラー Max Muller 佛國のセナール Emilie Senart 和蘭のケルン Heinrich Kern 露國のヴツシリエツフ Wasiljew 等輩出し又是れと同時に獨逸のオルデンヘルヒ Hermann Oldenberg 英國のリス・デ・ビイツ Rhys Davids 等は巴利佛典より英國のハーデー E. H. Rhys 錫崙佛典より英國のビガンデッド P. Bigandet は縮句佛典より露國のロツクカール Hook-hill 獨逸のシーフチン Anton Schiefner 匈牙利のチヨール Onoma 等は西藏佛典より英國のエドキンス Joseph Edkins ユール Samuel Deal 等は支那佛典より各佛典研究の業を開き廣く世界に向つて紹介するところあり。その成業として見る

べきもの尠からず。特に科學的研究に秀づる一事は最も學ぶべし。若し其れ梵語佛典の支那譯及び其の研究に至つては即ち支那日本の佛教史學として吾曹の現に心を潜めつゝあるものは是れなり。

第四節 支那譯

支那に佛教の傳はりしは後漢の明帝永平七年摩騰・法蘭の洛陽白馬寺に來つて『四十二章經』等を譯出せしに始まる。是れより譯經沙門陸續として來り、翻譯の業大に振へり。その著聞せるものには後漢の世支婁迦讖・安世高・竺佛朔・安玄・支曜・康孟詳等あり。曹魏の世に康僧鎧・曇無讖・白延・安法賢等あり。吳に支謙・康僧會等あり。西晋の世に竺法護・安法欽等あり。東晋の世に竺法力・佛陀跋陀羅等あり。東晋の隆安五年西域龜茲國の僧鳩摩羅什長安に來り、翻譯と同時に經論解釋の緒を開きしまで約三百年を支那佛教史上の經論翻譯時代と稱す。羅什以後印度佛教の移植と共に宗派の開立を見しと雖經論翻譯の業尙ほ大に盛況を極む。

その代表的譯經僧としては秦の羅什陳の眞諦唐の玄奘・不空三藏を推すべく、然り而して翻譯界を通じて玄奘以前を舊譯と云ひ玄奘以後を新譯と稱す。舊譯時代約六百年は譯場の主權外來僧にあり。支那僧あるも僅かに譯場に仕へて筆受し或は文辭の修飾に従事せしに過ぎず。彼の入竺僧法顯のみは十有二年の留學を経て歸來譯場を主宰せし如きも實は外來僧覺賢との協同事業にして玄奘三藏に至り初めて外來僧の手を離れ獨立するに至る。舊譯の代表者羅什は『法華經』般若經『仁王經』維摩經『首楞嚴經』阿彌陀經等の譯出者にして又三論の鼻祖龍樹菩薩の移植者なり。即ち『中論』『十二門論』『智度論』を紹介し經律論七十四部三百八十四卷を譯出す。眞諦は馬鳴及び世親の祖述者にして『起信論』『攝大乘論』を初め『金光明經』『金七十論』『俱舍論』『部執異論』等六十四部二百七十卷を譯出す又眞諦は『攝大乘論』を譯出すると共に攝論宗を開立せし人なり。玄奘は又世親の祖述者にして一千三百三十五卷の經論を譯出す。慈恩寺窺基・雲潤・文備・神泰等専ら其業を援く。而して窺基は唯識を傳へ神泰は俱舍を傳へり。不空は眞

言密教の移植者にして百十部百四十三卷を譯出す。概して舊譯は意義文辭の點に於いて優り新譯は文法因明の點に特徴を存するものゝ如し。

第五節 譯場の制規

佛典の翻譯は神聖なるだけ譯場には種々の制規あり。羅什の逍遙園にせよ眞諦の翻經院にせよ玄奘の玉華宮にせよ多くは官設なれば譯經には夫々職務掌程あり。贊寧の『宋高僧傳』に依るに譯場の制規として八備・九位・十條の法あつて崇高嚴肅を極めり。左に是れを表記すべし。

- 一 一至誠にして自利々他心を有す。
- 二 譯場に臨むに齋戒沐浴す。
- 三 三藏五乘の義に通曉す。
- 四 文法典詞に精通す。
- 五 襟度器局大にして執着心を有せず。

八 備

- 六に道心深く名利に淡泊なり。
- 七に梵語に造詣を有す。
- 八に文字用語に通ず。

- 一 譯主……………翻譯の主任者
- 二 筆受……………譯主翻譯の筆記者
- 三 譯語……………梵語の通譯者
- 四 梵證義……………梵漢對照して誤謬を検する者。
- 五 潤文……………譯文を潤飾する者。
- 六 證義……………梵語の義理を検究する者。
- 七 梵唄……………音律作法を吟味する者。
- 八 校勘……………全體成文の後校訂檢閲をなす者。
- 九 監護大使……………譯場の事務官。
- 一 句韻……………文々句々の音韻。

九位

十條

- 二 問答……………質疑と應答との區別。
- 三 名義……………能詮所詮文義名辭の區別。
- 四 經論……………經と菩薩の論部との區別。
- 五 歌頌……………偈頌と長行との區別。
- 六 呪功……………呪文の吟味。
- 七 品題……………經文の段落。
- 八 專業……………專心譯經に従事し副業を許さず。
- 九 字部……………文字用語の精撰。
- 十 字聲……………字句上平上去入の四聲を吟味す。

蓋し八備は譯經沙門の資格九位は譯場の組織分業十條は譯經上の注意なり。依て以て譯經の神聖を語り經論の莊嚴を證して餘蘊なきを見る。今且らく九位に就いて其一例を擧ぐべし。彼の『華嚴經』の如き即ち覺賢佛陀跋陀羅譯の八十華嚴と實叉難陀譯の六十華嚴と般若譯の四十華嚴と都合三譯あり。八十華嚴

は譯主覺賢筆受法業潤文慧觀に依つて大成せられ、又四十華嚴は譯主般若筆受圓照譯語廣齊證梵義智柔潤文道弘證義大通校勘澄觀に依つて完成せらる。概して後代になるに徒ひ譯場も整頓し綿密丁寧にありしものゝ如し。譯經の神聖なる是れを結集と併せて讚仰すべきなり。

第六節 大藏經

譯經沙門即ち羅什・眞諦・玄奘等に三藏の名稱を附して呼ぶは經律論の三藏に通曉せるに依る。その三藏は今日一切經若くは大藏經と稱し寺寶として、或は學佛者の座右に備へられつゝあり。無論大藏經は佛世尊の經律及び菩薩の論部のみならず漸次支那日本の選述も尠からず編入せらる。まづ現時保存流行せるものに就いて、翻刻刊行と併せて數量を一瞥すべし。

巴利原本より來りし暹羅・緬甸の三藏あり。暹羅三藏は西曆千八百八十八年莊嚴王の登極二十五年の記念大典と母后追善とを兼ね該國宮内省より大藏經を出

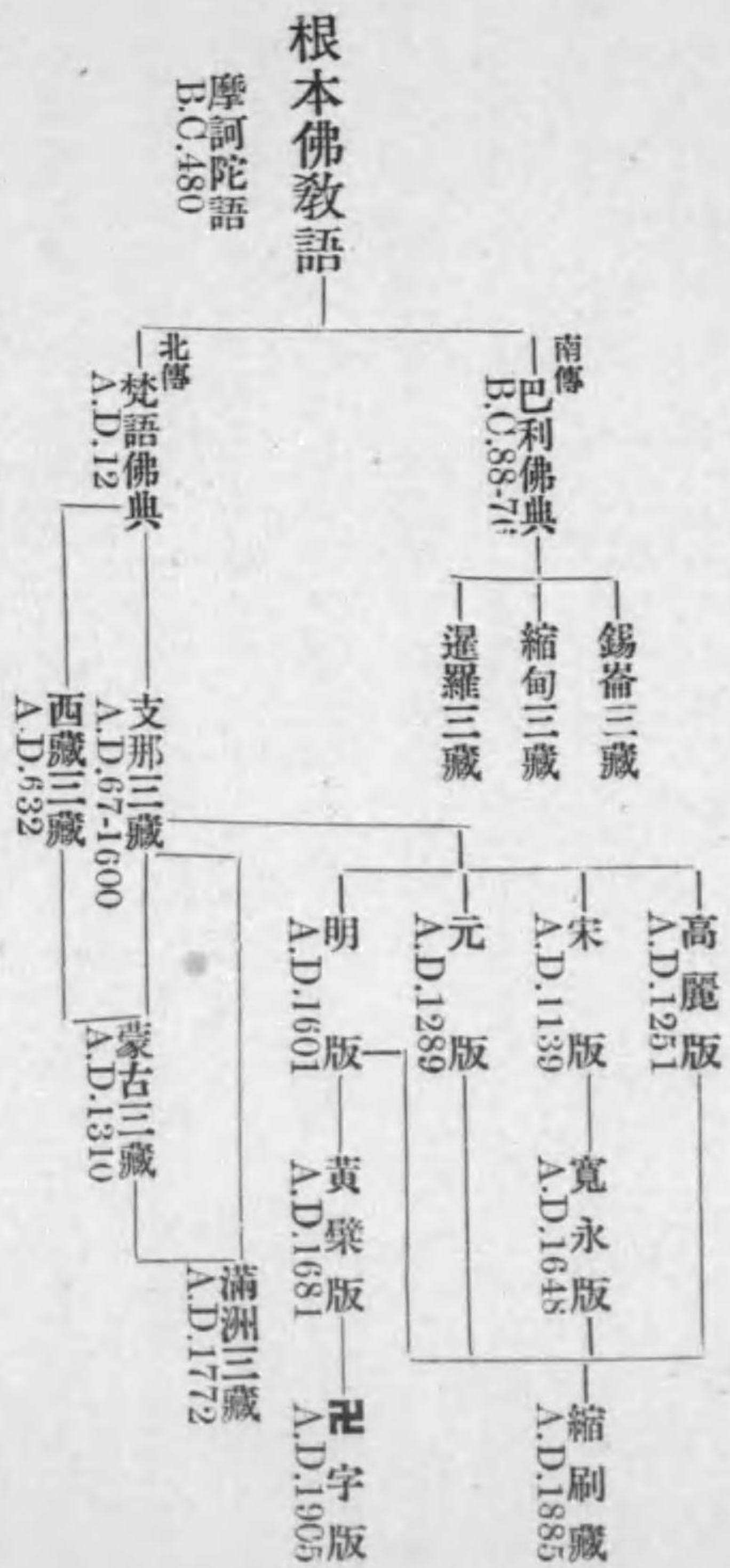
版す。該宮内省は出版の趣意を體して是れを世界各國の大學に寄贈せり。又梵語原本より來りし西藏・蒙古・滿洲・支那の三藏あり。西藏三藏は梵語佛典と漢譯とより譯出せられ蒙古三藏は該西藏三藏に漢譯を參照して成り、又滿洲三藏は蒙古三藏に更に漢譯を參照して出來せるものなり。是れ等は何れも本邦に傳來して學佛者佛知見の研鑽讚仰に供せられつゝあり。即ち西藏三藏は帝國大學及び眞宗大谷大學に現存す。滿洲の三藏は日露戰爭の際奉天の陥落と共に日本の有に歸し現に帝國大學に存す。支那の三藏は前後約十回の印刻上梓あり。その主なるものを擧ぐるに朝鮮の至道元年高麗王の發願に依り出版せし高麗版あり。又支那南宗の理宗嘉熙三年の出版にかゝる宋版あり。元の世宗十七年の出版にかゝる元版あり。明の明曆年間の出版にかゝる明版あり。又日本にあつては寛永年間天台僧正の刊行せし寛永版あり。同じく寛永年間黃檗の鐵眼禪師に依つて刊行せられし黃檗版あり。降つて明治十三年東京弘教書院に於て出版せられし縮刷藏經あり。這是藏經として最も完全なる高麗本を底本とし、宋・元・明版を參

考して上梓せしものなれば現存藏經中最も完備せるものに屬す。又近く京都の藏經書院に於いて出版せられし卍版あり。又東京の博文閣支那上海の頻伽羅書院に於いて刊行せられつゝある大藏經あり。今右支那・朝鮮・日本に於ける各版の卷數を列擧すること左の如し。

高麗版	六千四百六十七卷
宋版	五千七百十四卷
元版	五千三百九十七卷
明版	六千七百七十一卷
寬永版	六千三百二十三卷
黃檗版	六千七百七十一卷
縮刷版	八千五百三十七卷
卍版	六千九百九十二卷

右各版の中には前に云へる如く菩薩の釋論と高僧祖師の撰述とを含有すれば

各總卷數より是等を除くれば經典の實數を算出し得べし。且らく縮刷藏經にて云へば三千〇六十九卷となるものゝ如く併も又經典の重譯別行も尠からざれば經典の整理を行はゞ更に減少すべきなり。以上佛典の文字及び印刷の系統を圖示するに左の如し。



第壹編 淨土三部經の概説

第一章 三部經の成立

佛教に於て各宗所依の聖典を定むるに三部となすもの其の例不尠。天台宗には『無量義經』『法華經』『普賢觀經』を所依の三部經と立て眞言宗には『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』を一宗の三部經となす。奈良朝祈禱佛教の隆盛を極むるや『金光明經』『法華經』『仁王經』を以て鎮護國家の三部經となし、又地藏菩薩の信仰には『占察善惡業報經』『地藏尊本願經』『大乘十輪經』を選んで自家の三部經となし、又兜率上生教にあつては『彌勒上生經』『彌勒下生經』『彌勒成佛經』を以つて彌勒の三部經となす如きは是れなり。然り而して我が淨土門に於ては『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』を選んで三部經を立つる由來頗る遠し。印度にあつて世親菩薩既に淨土三部通申の『淨土論』を著はすあり。爾來三朝淨土の大師等は是れを繼承して往生淨土の法門を宣傳す。正しく其名目を見るは善導大師

の『觀經四帖疏』に始まる。我朝黒谷の法然上人に至つて淨土の三部經及び右の『淨土論』を以つて正明往生淨土教とし、餘他淨土教に論及せるものを傍明往生淨土教として劃然區分を立つ。前者は一部始終に互り主義主張として淨土教を宣布せしものにかゝり、後者は傍ら淨土の教法に論及せしもの、即ち『法華經』『法華經』『隨求尊勝陀羅尼經』『大乘同性經』『觀音授記經』『起信論』『寶性論』『十住毘婆娑論』『攝大乘論』等の如きを指す。然れば即ち三經一論以外又淨土教を宣布する經論のあるや明けし。是れを以て或は兩者の區劃得て明瞭ならざるあり。隋の迦才法師は右淨土三部經以外、『鼓音聲王經』『般舟三昧經』『十方往生隨願經』『稱揚諸佛功德經』『大集經』『藥師本願經』『發覺淨心經』及び『無量壽經』の異譯なる『大阿彌陀經』『無量清淨平等覺經』を選んで十二部經を立つ。又唐の慈恩法師は淨土三部經に『鼓音聲王經』を加へて淨土四部經を立つるも、一經の實質に於いて純の純なるもの淨土三部經に加くなし。

第二章 說處及び說時年代

淨土三部經の說處は經の序文に見る如く『無量壽經』と『阿彌陀經』とは舍衛城に於ける說教にして『觀無量壽經』は王舍城の說教なり。舍衛城は憍薩羅國の首府なるが、經文に舍衛國と云へるは往昔首府を重視せし餘り、國名に代へしに由る。亞弗利加に於けるカーセジの如く然り。而して王舍城は摩訶陀國の首府なり。當時印度恒河流域にあつて、憍薩羅國は其河北に位し一方の霸を稱し、摩訶陀國は河南の地に在り、四隣の小邦を併せ北方の憍薩羅國と相對して、恒河流域の二強として聞へり。然り而して憍薩羅國の波斯匿王と、摩訶陀國の頻婆娑羅王とは、常に強國の元首たるのみならず。又釋尊の大檀越として五天竺中最も法雨の潤ひし處に屬す。舍衛城には祇園精舍あり。王舍城には竹林精舍あり。釋尊は此兩處を中心として法輪を轉せられしなり。されば淨土三部經も亦釋尊轉法輪の中心地にて說かれしものにかゝる。

三部經は何處を見ても説時年代の記述なし。然るに此に一の手掛りとなるべきは『觀無量壽經』の記事なり。この經は摩訶陀國の阿闍世太子が父の頻婆娑羅王を幽閉して王位を奪略し皇后韋提希の煩悶より興りし教なり。而して其即位年代は粗ぼ推察し得らるゝを以て直ちに觀經の説時年代を知るべく他の二經は其れを基礎として教理文證より推定せざるべからず。

阿闍世太子の逆害は『善見律毘婆沙』に依るに佛の涅槃前八年なり。佛の入滅年代を且らく『衆聖點記』に従ひ紀元前四百八十五年とすれば其八年前即ち四百九十三年なり。此年即ち『觀經』の説時年代となる。又南方佛傳として歴史上比較的信用せらるゝ『錫崙大史』の説も又是れと一致せるものゝ如し。釋尊の入滅は八十歳なれば『觀經』の説時は即ち七十二歳の時に當る。然るに『大涅槃經』には阿闍世太子の逆害を佛の入滅前三ヶ月となすものに似たり。又一説として取るべきも事實疑はし。阿闍世王が釋尊の大檀越としての生涯を僅々三ヶ月に限るのみにても殆んど無價値なりと謂つべし。さて前説を基礎として

『無量壽經』、『觀無量壽經』とに就き經文の義理より説時前後を推考するに際興の『無量壽經連義述文贊』には『觀經』を前とし、『大經』を後とせり。その理由の一に『觀經』の華座觀は法藏願力に依つて出來し事を云へり。されど未だ極樂の依正二報が法藏願力に依つて成就せし事を説かず。是れ『觀經』後『大經』の説教なかるべからざる所以なり。二に『觀經』の一切衆生が煩惱のために害せらるゝ事を説くも。未だ苦惱の相を説かず。随つて又厭欣心の發るに由なし。是れ又『觀經』後『大經』の説教を要する所以なりと云々。是れに反して迦才法師は『淨土論』に於いて『大經』は前にして『觀經』は後なりと云へり。法然上人是れを承けて『觀經釋』に文證三項と理證一項とを擧ぐ。文證の一に『觀經』の華座觀に『法藏比丘願力所成』とあるもの、是れ『大經』を承けしものなるべく。二に『觀經』の中輩下生の文に『亦說法藏比丘四十八願』とあるもの、是れ又『大經』を承けしものならざるべからず。若し然からずんば『觀經』に始めて斯る抽象的の文字を見るべき理なし。『大經』に既に詳説すればこそ經文

の意味初めて通するなり。三に『大經』に「阿難白佛法藏比丘爲已成佛而取滅度爲未成佛已今現在佛告阿難今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰極樂」とあり。『觀經』に來つて其の淨土の依正二報を詳説せり。若し『觀經』か『大經』前なれば『觀經』に於いて淨土の由來方位を云はず卒爾に淨土の莊嚴を説くの理なしと云ふにあり。又理證としては『大經』に阿彌陀佛の發心修行及び果上の依正二報を説けるが『觀經』は其依正を承けて十三觀を開説せしと云ふにあり。蓋し後説理證に於いて最も穩當なるを見る。

又『觀無量壽經』と『阿彌陀經』との説時前後を稽ふるに『觀經』は前にして『小經』は後なりと思はる。『觀經』は初めに定散諸行を説いて諸機を誘引し、僅かに流通分に至つて念佛を説き廢立の意を寓す。『小經』は正宗分中既に諸行を廢し念佛を勸む。是れ『小經』が未だ『觀經』の能く説破し得ざる流通廢立の意味を擴充せしものなり。若し『觀經』を『小經』後の説教とすれば『小經』が直截に諸行を廢して念佛の一行を往生の業因とし六方恒沙の諸佛が證誠護念

し居るにも拘はらず其後へ『觀經』が諸行を立て、往生の業因となす理なし。されば淨土三部經の説教年時は是れを讀誦する順序の如く大觀・小と次第するを以て穩當とすべきなり。

第三章 翻譯の年代

『淨土三部經』の傳譯は由來最も遠く殊に『無量壽經』の如きは支那佛教の起源と殆んど年時を同ふす。蓋し支那佛教の初めは後漢の明帝永平七年に在りしものゝ如く『無量壽經』又後漢の世安世高に依つて譯出せらる。爾來譯出又譯出三國を経て唐・宋に至る八百有餘年間に互り前後十有二回の異譯を重ねるに至れり。盛況思ふべきなり。譯經史上異譯は珍らしからざるも多くは三四を出でず。然るに獨り『無量壽經』に限り十二譯を見るが如きは全く稀有に屬す。是れ『無量壽經』の外來西域僧に依つて重視せられしに依ると共に又信仰界に於ける消息を語るものならずんばあらず。『觀無量壽經』及び『阿彌陀經』又兩

三譯を出す。『二部經』を通じて譯本の散逸せるものあるは研學上惜むべきなしとせず。今便宜上左に是れを表示すべし。

『無量壽經』異譯表

經	題	卷數	譯出年代	生國	譯者	存缺
一	無量壽經	二	後漢建和二年—建寧三年	安息	安世高	缺
二	無量清淨平等覺經	二	同 建和元年—中平三年	月支	支婁迦識	存
三	大阿彌陀經	二	吳 黃武二年—建興二年	同	支謙	存
四	無量壽經	二	曹魏嘉平四年	康居	康僧鑑	存
五	無量清淨平等覺經	二	同 甘露三年	西域	帛僧延	缺
六	無量壽經	二	西晉永嘉二年	月支	竺法護	缺
七	無量壽經眞等正覺經	一	東晉元熙元年	西域	竺法護	缺
八	新無量壽經	二	劉宋永初二年	中天竺	覺賢	缺
九	新無量壽經	二	同 同	涼州	寶雲	缺
十	新無量壽經	二	同 元嘉元年—同十八年	罽賓	曇摩密多	缺
十一	大寶積經無量壽如來會	二	大唐神龍二年—先天二年	北印度	菩提流支	存
十二	大乘無量壽莊嚴經	三	大宋大中年中	西天竺	法賢	存

『觀無量壽經』異譯表

經	題	卷數	譯出年代	生國	譯者	存缺
一	觀無量壽經	一	劉宋元嘉年中	天竺	曇良耶舍	存
二	觀無量壽經	一	同 同	罽賓	曇摩密多	缺

『阿彌陀經』異譯表

經	題	卷數	譯出年代	生國	譯者	存缺
一	阿彌陀經	一	姚秦弘始四年二月八日	龜茲	鳩摩羅什	存
二	四紙經	一	劉宋元嘉年中	天竺	求那跋陀羅	缺
三	稱贊淨土佛攝受經	一	大唐永徽六年	支那	玄奘	存

右の如く『無量壽經』に十二譯あるも、唐の開元時既に支婁迦識・支謙・康僧鑑菩提流志譯を除く、他は散逸せしものと見へ、唐の玄宗開元十八年智昇の編纂せる『開元釋教錄』に是れを載せず。但し法賢譯は開元以後の譯出なれば、『開元釋教錄』に載せざること勿論なり。是れ此經に五存七缺の名ある所以なり。又『觀

『無量壽經』に就ては三譯ありしと云ふ説あるも疑はし。隋の文帝開皇十七年費長房の選になる『歷代三寶記』には曇良耶舎の譯のみを擧げて曇摩密多の譯を擧げず。却つて後漢失譯録の中に『觀無量壽經』の失譯一本を數へり。這是費長房が曇摩密多の譯なるを知らず。誤つて失譯と見做し、後漢の譯出に加へしもの如し。淨土宗の記主禪師良忠が其著『觀經疏傳通記』に三譯ありし如く傳ふるは右の誤謬を詮議せず併用せしものに似たり。されば一存一缺、一存二缺の名あるも暫らく後者を取らず。又『阿彌陀經』に就ては三譯ありしも第二譯『四紙經』は疾く散逸して傳はらず。さり乍ら其の一部分は大藏經中に『抜一切業障根本得生淨土神呪』の名に依つて記載せらる。古來二存一缺の名ある所以なり。

『淨土三部經』は獨り支那譯のみならず。『觀無量壽經』を除き他二經にあつては梵本の傳來發見あり。尋いで英譯及び和譯せらるゝあつて後學佛知見の開拓に便益尠からず。『無量壽經』の梵本は西曆千八百二十八年英國のホジソン氏なるもの辨理公使として印度尼波羅に駐在せし砌り、印度古文學の研究に興味をもち潛心努力するごころあり。偶々西藏の喇嘛教に屬する一佛教寺院より該梵本を發見せり。氏は是れを書寫して倫敦の亞細亞協會、牛津大學圖書館及び巴里亞細亞協會に寄贈せり。尋いで牛津大學教授故マクスミューラ博士なるもの千八百八十三年即ち我が明治十六年に該梵文『無量壽經』を出版し、同時に又英譯して翌年是れを『東方聖書』Sacred Books of the East 第四十九卷に收む。又該梵本に依り文學博士南條文雄氏は和譯し、明治四十一年四月『佛說無量壽經梵文和譯並支那五譯對照』なる書名の下に出版せらる。該梵本は又醫學博士ライト氏に依つて尼波羅より發見せられ、英國の劍橋大學に寄贈せられしもの一本あり。近く河口慧海氏も又尼波羅より一本を發見せりと聞く。因みにマ博士の英譯は往年和譯せられて雑誌『高輪學報』に連載せられしを見る。

『阿彌陀經』の梵本は疾く我國に傳はり、平安朝の初め慈覺大師圓仁是れを將來し安永二年根來の常明僧正に依つて刊行せらる。この刊本展轉歐洲に傳はり西

曆千八百八十年即ち明治十三年マ博士是れを校訂し尋いて千八百八十三年その英譯を出版す。後又『東方聖書』第四十九卷に收めらる。而して又『無量壽經』及び『阿彌陀經』には西藏譯あり。往年寺本婉雅氏印度より將來して眞宗大谷大學に寄贈し明治四十三年頃同氏和譯して雜誌『無盡燈』に連載せり。

『三部經』各異譯に互つて譯者を傳へんは餘りに煩はし。今は正依『三部經』の譯者を傳記する事に止むべし。先づ『無量壽經』の譯者康僧鎧は康居國の人梵に僧伽跋摩 Saṅgha-brahman 云ふ。蓋し名字に康の字を冠せるは生國康居なるを表す。支婁迦讖支謙の月支國なる安世高の安息國なる竺法護の天竺出なる推知すべきなり。康居國は西域の一舊國にして葱嶺の西安息月支諸國の北に在り。現今のトルキスタン地方に當たる。僧鎧廣く群經に通じ魏の嘉平四年洛陽白馬寺に來り『無量壽經』二卷及び『耶伽長者所問經』『四分雜羯磨』各一卷を譯す『觀無量壽經』の譯者盪良耶舍 Kalayanas は支那に時稱と譯す。西域の人剛毅寡欲群經通せざるなく殊に阿毘曇律部に通じ又禪觀を能くす。宋の元嘉年初支那に

來り文帝の歸向を得て錫を鐘山の道林寺に留む。僧舍なるもの『藥王藥上經』及び『觀無量壽經』を譯せんことを請ひ自ら是れを筆受す。那舍は此二經を以て轉障の祕術淨土の洪因となし宋國に弘通す。後江陵に移り元嘉十九年岷蜀に赴き程なく江陵に還つて寂す。世壽六十。又『阿彌陀經』の譯者鳩摩羅什 Kāśyapa 略して羅什と云ひ支那に童壽と譯す。龜茲國の人なり。龜茲國は現今の支那新疆省にして即ち東トルキスタンの庫車に當たる。七歳出家し九歳母に従つて信度河を渡り罽賓に入り阿舍を學び更に沙勒國に入り阿舍を學ぶ。尋いで沙勒國に入り『阿毘曇』及び『六足』を究め須利耶跋陀須利耶蘇摩の兄弟に師事して大乘に轉ず。是れより深く三論を極めて通せざるなし。暫く龜茲國に留り學徒を提擧す。二十歳その母大乘教を東土に傳布すべきを委して天竺に赴く。幾もなく符堅兵を擧げて龜茲國を伐ち興法の英傑羅什を得たり。羅什即ち姚興の弘始三年十二月長安に入る。興待つに國師の禮を以つて優遇至らざるなし。西明閣及び逍遙園に請じて譯經を愆應す。沙門僧叡・道恒・僧叡・僧肇等八百餘

人譯場に參じて其業を援く。後秦弘始十五年四月十三日七十歳にして寂す。門下三千と稱するも特に著聞せるもの四聖あり。僧肇・道融・道生・僧叡是なり。僧肇道融の二人は關中即ち支那西北部にあつて傳道に従事し道生僧叡の二人は建業即ち吳の地方にあつて弘法に努力す。是れより支那佛教初めて江南江北に分れ教學進展の基礎をなす。

さて三部經の翻譯は前に云へる如く管に異譯を有するのみならず。原本あり、又近く英和及び西藏譯等の續出するあり。即ち便宜のため是れを一括し左に表示すべし。

- 無量壽經 後漢安世高
- 無量清淨平等覺經 後漢支婁迦讖
- 大阿彌陀經 吳支謙
- 無量壽經 曹魏康僧鎧
- 無量清淨平等覺經 曹魏帛延
- 無量壽經 西晉法護
- 無量壽經眞等正覺經 東晉法力

〔無量壽經〕

- 新無量壽經 東晉覺賢
- 新無量壽經 宋法雲
- 新無量壽經 宋曇摩密多
- 寶積經無量壽如來會 唐菩提流支
- 大乘無量壽莊嚴經 宋法賢

- 英譯 The Description of The Land of Bliss—マクスミユラー—和譯
- 和譯 南條文雄
- 西藏譯—ルイー、チャル、ツァン—和譯 寺本婉雅

〔觀無量壽經〕

- 支那譯—英譯—Amitayur-Dhyanastra 高楠順次郎
- 阿彌陀經 秦鳩摩羅什

〔阿彌陀經〕

- 支那譯 四紙經 宋求那跋陀羅
- 稱讚淨土佛攝受經 唐玄奘
- 英譯 The Smaller sutkharaviyuhā マクスミユラー
- 和譯 南條文雄
- 西藏譯—ルイー、チャル、ツァン—和譯 寺本婉雅

第四章 異譯の比較

『淨土三部經』各異譯の比較を一言すべし。まづ注意すべきは『無量壽經』について各經目の異なること是れなり、現存譯に於いて漢譯『無量清淨平等覺經』魏譯『無量壽經』唐譯『無量壽如來會』は佛名を以て經題とし、吳譯『大阿彌陀經』の内題『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』は佛名と法名を以て經題とし、宋譯『大乘無量壽莊嚴經』は法名と佛名と土名とを以て經題となし、梵本并びに是れを英譯せる『樂有莊嚴經』Sukhavatīyānīyaは土名を以て經題となす。本文に入つて正依即ち魏譯を基礎として概観するに、先づ注意すべきは支婁迦讖譯即ち漢譯は主處・衆の三成就に止まり、支謙譯即ち吳譯は主處・時・衆の四成就にして他は委く六成就なり。特に徒衆の一事は各譯異同あつて漢譯は千二百五十人、吳・魏譯及び菩提流志譯即ち唐譯は萬二千に作り、法賢譯即ち宋譯と梵本は三萬二千に作り。又法藏菩薩發願段に出づる過去出佛に至ては更に異同あり。魏譯

は錠光如來以下五十三佛なるも漢譯は三十六佛、吳譯は三十三佛、唐譯は四十一佛、宋譯は三十七佛、英譯、西藏譯は共に八十佛なり。而して法藏菩薩の大願又一概ならず。以下一經に互る大體の異同に就き本願寺派の碩學石泉僧寂師の『大經義疏』の一節を紹介すべし。云はく「漢、吳兩譯の如きは二文大に等し、今譯魏譯に望むるに其始めに菩薩の名字を列ねず、佛願を説くに、願數半減して二十四を出だす。往生を明かす三輩のみを説いて、本願成就と認むべき文なし。又三輩中には唯諸行のみを説いて、念佛を云はず。又宋譯の如きは、同聞衆の中唯聲聞のみを擧げて菩薩を標せず。佛願を説くもの三十五。又成就の文は是れを説けども三輩章に當る文は諸行を説いて念佛を云はず。彌勒諸天人等に對して懈怠を策勵し、廣く五善五惡を明かすの點に至つては、缺けてある事なく、胎化問答は即ち之あり。雖魏譯の説と相類せず。唐譯は諸段大概同じく、唯彌勒に對する一段の廣説を缺けるのみ」と、誠に簡にして要を得たり。若し其れ深く内容を檢すれば組織上の前後矛盾あり。重要文字の出沒具缺あるより稽ふるに、原本の一種ならざりし

を知る。現に尼波羅發見の梵本と現存支那譯と一致せざるもの其一證なり。這は梵本として流布せる間に異本の生ぜしものか若くは傳持者の間に口傳の相違ありしより起りしものと思はる。さり乍ら異本の原本が一々異なりしものとも思はれず。内容を比較大觀するに三四種の梵本ありしものゝ如し。即ち漢譯と吳譯と一致し、魏譯と唐譯と一致し梵本と西藏譯と一致すれば蓋し同一梵本なるべく、宋譯に至つては殆んど對照を認むべからず。又年代及び地理上より稽ふるも漢譯、吳譯は最も古く然も共に月支國より來りし支婁迦讖、支謙に依つて譯出せられ又魏譯、唐譯は是れに尋いで古く共に康居國、天竺方面より來りし康僧鎧、菩提流支に依つて譯出せられしを見れば又此の關係より梵本に異本を來せしにあらざるなき歟

『觀無量壽經』には文學博士高楠順次郎氏の英譯ある外異譯も現存せず。又梵本の傳來發見もなし。高楠氏の英譯は收めて『東方聖書』四十九卷にあり。又『阿彌陀經』に就ては一異本の存在あり。龍舒王日休の『淨土文』に云へる處

を見るに、支那の襄陽に隋の陳仁祓の書になる石刻の『阿彌陀經』あり。その經文中、一心不亂の次下に「專持名號以稱名故諸罪消滅即是多善根福德因緣」の二十一字を加へり。法然上人は『選擇集』に是れを引用して念佛を諸行に比するに多善根多福德なりと云ふ證據に徴せらる。されど是れは有らずもかなの文字なり。梵本に對照するに是れに相當すべき文字の認むべきなし。恐らく流布中の寫誤ならんと思はる。又菩提流支譯に「阿彌陀佛根本秘密神咒經」なるものあり。その内容『阿彌陀經』と多く異ならず。たゞ六方段の前少善根福徳の因緣にて彼國に生ずべからずと云へる次下に「阿彌陀佛有根本秘密陀羅尼神咒是名拔一功業障根本得生極樂淨土神咒」と云へる文字あり。且つ阿彌陀佛の名號には無上功徳を具すとて、約二百五十字を加へり。されど這は疑もなく古人の僞作なるべし、菩提流支の傳料に該記事なく、又經錄にも是れを記載せず。若し其れ『阿彌陀經』と唐譯即ち玄奘の『稱讚淨土佛攝受經』並に梵本、西藏譯を比較するに、唐譯以外は全體に於いて一致せり。獨り唐譯は聊か冗長に失し、文格等よ

り推すに、或は現存梵本と原本異なるべしと思はる。されど『無量壽經』に見るが如く通じて根本思想を動かす底の相違なく概して體裁意義共に一致せるもの如し。

因みに附記すべきは『無量壽經』及び『阿彌陀經』に於いて、異譯各出沒具缺あつて去就に迷ふの餘り、取捨校訂事業の起りし事是れなり。『無量壽經』に就ては支那の龍舒王日休なるもの異譯相違を見るは、原本の本意にあらざるべしとて五譯の内容を取捨案配し、別に『大阿彌陀經論』を編纂す。王日休は宋の高祖時代の人にして篤信の聞へあり。本書編纂に當り觀音に祈誓を凝らし、拮据三年を費せりと云ふ。されど校訂よろしきを得ず却つて黄金を變じて瓦礫となせし觀あり。當時一梵本の流布し居れば彼れも恐らく此舉に出でざるべしと思はる。又『阿彌陀經』に就ては羅什譯の餘りに冗長に失する嫌ありとて、本邦の儒者、太宰春臺なるもの羅什譯千八百五十七字を千四百七十三字に改め、『修刪阿彌陀經』を作る。その無謀なる非教權的態度は又此に是非するを須ひず。後學以て慎しむべきなり。

第五章 正依と異譯との關係

淨土の『三部經』中一經始終して眞實教を顯はせるものは正依の『大無量壽經』あるのみ。『觀無量壽經』及び『阿彌陀經』は隱彰顯密あつて注意を要す。されど又『無量壽經』に於いても、異譯に就いては古來一問題として論議せらるゝあり。『無量壽經』には一梵本と支那の五譯と、英譯及び西藏譯と都合七譯存する争既に云へるが如し。今支那譯の五本に就いて見るに、一經の結構並に意義の明瞭なるは、康僧鎧の譯『無量壽經』を以て最とす。加之又三部經の隨一として相互の關係譯名を初め文字意義の聯絡の如きも、該譯に於いて見るを得べし。宣なり、淨土宗の正依として三朝淨土の大師傳承講說せしを。淨土宗にては『異譯不同』として絶待に用いず。西山派にては諸譯の異同は結集者見聞の相違に依るものとして敬遠す。獨り我真宗にあつては極めて寛大なり。即ち正依は絶待

に神聖視するも、然も異譯に對しては正依を助顯する範圍に於いて高祖を初め先哲何れも依用せらる。殊に唐譯『如來會』は高祖も既に同一梵本の異譯なりと着眼せらるゝあり。梵語の意義を最も能く銓表し印度的色彩に富めるを以て緊要なる解釋には必ず「如來會」を引用せらるゝを見る。固より助顯なれば異譯を以て正依を左右するを許さず。本願寺光瑞前宗主の『大無量壽經義疏』に「此經の異譯多しと雖和漢の諸師多く康僧鎧に依つて講敷奉行を努めり。是れに次ぐを菩提流支譯とす。法賢譯帛延譯又之れに次ぐ。支謙譯を最下とす。譯本の優劣は主として文の完缺にあり。僧鎧譯又全備にあらず。然れども他譯に比するに全備とす。故に曩祖大師又諸譯中此經を選定し「夫顯眞實教者則大無量壽經是也」と釋せり。然れば則ち一宗の末學専ら此の雙卷『無量壽經』を準とし以て他譯を討ね、その缺漏を補ふべし。大師の常に諸譯を併用したまへる深旨亦此に存す。近時印度諸傳の梵本あり。依つて以て究むべきもの少からず。然れども其文康僧鎧譯に比するに缺漏更に多く菩提流支譯に比すれば下位法賢譯に

比すれば上位にありと云ふべし。又基準となす價值なし。唯梵本を直ちに討めれば譯家の漢字に顯出し能はざる深旨を探るの利あるのみ。是れを以て直ちに依用の經典を改むる如きは斷じて是れあるべからず。學者是れを思へ」と。文簡なりと雖能く譯本の成績を批判して餘蘊なしと謂ふべし。

第六章 講學註疏の歴史

『淨土三部經』の講學は由來最も遠く印度にあつて馬鳴菩薩既に『大乘起信論』に淨土教義を説き、修多羅に説くが如しと云へり。修多羅Sutraとは經を譯す。蓋し『無量壽經』又は『觀無量壽經』等を指せるものゝ如し。龍樹の『易行品』は正しく『無量壽經』の教義なること疑なく、世親の『淨土論』は正に是れ三經通申の論なれば三部經流布の形迹想見するに難からず。支那にあつては『無量壽經』並に『觀無量壽經』は隋唐の教學勃興せし際、釋家の間に講說せられ、『阿彌陀經』は宋以後に至つて講布せられしものゝ如し。即ち『大經』に就ては淨

影寺の慧遠嘉祥寺の吉藏に『無量壽經義疏』各二卷あり。唐の玄一に『無量壽經記』二卷ありしも傳らず、近年その下卷のみ宮内省の書庫に發見せられて『續大藏經』に收めらる。環興に『無量壽經連義述文贊』三卷あり。新羅の元曉に『無量壽經宗要』一卷あり。近世に至り清朝の彭際清に『無量壽經起信論』三卷耕心に『摩訶阿彌陀經衷論』一卷あり。『大經』支那にあつて學問的に研究せられしのみにて、直接信仰界を支配せし形迹なし。道綽・善導の教法も時勢とは云へ『觀經』を通せる『大經』の教權にして『大經』そのものにあらず。日本にあつては奈良朝既に『無量壽經』の宮講あり。即ち舒明天皇の十二年五月慧隱なるもの宮中に召されて大齋會の席上『無量壽經』を講ず。又孝徳天皇の白雉三年慧隱再び勅を拜して宮中に『無量壽經』を講ず。慧資問者となり大衆一千人に達せりと傳へらる。又著作を見るに興福寺の善珠に『無量壽經讚抄』一卷智憬に『四十八願釋』一卷あり。平安朝に入り延暦寺の良源に『四十八願釋』一卷あり。淨土宗興行以來の事は改めて云はず。親鸞聖人は「眞實教を顯

さば大無量壽經是れなり」と絶叫して淨土眞宗を開闢せられし事又贅せず。『觀無量壽經』の教學は極めて復雜なり。支那隋唐に於ける淨土門の教學としては『觀經』の外なし。晉に淨土門のみならず學場を通じ『觀經』は一般に歡迎せられて講學に或は求道行業に大なる價值と權威とを有せり。即ち著作の上にあつて慧遠・吉藏に『觀無量壽經義疏』各二卷あり。天台山の智顛に『觀無量壽佛經疏』二卷あり。尤も天台の『觀經疏』に就ては偽作となすものあり。主として日蓮宗の人に依つて主張せらるゝを見れば或は宗派的感情ならんかの疑あり。又道綽禪師の『安樂集』二卷あり。這是直接註釋と云ふにあらざるも、一種の達意的解釋と見て差悶なし。唐の善導大師に有名なる『觀經四帖疏』四卷あり。宋の元照律師に又『觀無量壽經疏』三卷あり。斯くの如く聖道淨土を通じて歡迎せられし結果、此處に淨影・天台對道綽・善導てふ對立を見るに至れり。殊に『觀經』を單に研究とせず。自己の宗義安心として解釋せしを智者大師及び道綽・善導大師なりとす。既に宗義安心なる以上は教權あり感化あつて此處に不

朽の生命あり。されば此の兩者の解行各一流の源頭をなして後世永く榮へしを見る。即ち一は經の「是心作佛是心是佛諸佛正遍智海從心想生」の文に依つて立ち一は經末付屬の念佛に依つて立てり。彼に僧銜・慧成・智暎・明瞻・元會の如き觀念行者あれば我れに隠れたる幾多念佛者のありし事僧傳に傳ふるが如し。右兩者の系統は大師の入滅と共に長安に華嚴禪・密教等新佛敎の興起するあり旁武宗會昌の法難等あつて一時消息を絶へしも一度生れし思想は永久に死せず『天台疏』は趙宋に於いて復活し『善導疏』は我朝平安末に至つて復興せり。前者の緒を開きしは山家の義通にして『觀經疏記』一卷を著はす。義通の門に四明尊者智禮あり。天嘉五年『觀經疏妙宗鈔』五卷を著はす。然るに山外天台と所見を異にし果なく論争を見る。源清の『觀經疏顯要記』孤山智圓の『觀經疏刊正記』の如き其代表的著作なるも憾むらくは傳はらず。又山家派の出身なる從義に『觀經疏往生記』如堪に『觀經疏淨業記』の著作ありしも共に又傳はらず。山家の學轍より出で、別に律宗を開きし元照律師に『觀無量壽經義疏』三

卷あり。偶々天台の道因なるもの『輔正解』を著して是れを取するや。元照の弟子戒度『觀經扶新論』並に『觀經疏正觀記』を作つて應酬す。近代に至り清の彭際清に『觀無量壽經約論』一卷あり。特に四明の『妙宗鈔』の影響は日本に傳はり終に妙立・靈空をして比叡山麓に安樂律院を開立せしむるに至れり。善導大師の『觀經疏』は我朝に來り法然上人の淨土宗興行を見るに至つて一層の盛觀を呈せり。上人の一代は創業者として對南都北嶺策に忙殺せられ自然内部の用意を缺きし觀あり。されば天台より歸參せし門弟輩にして宗義安心を誤解せしもの尠からず。即ち西山・鎮西・九品・長樂・等分裂割據するに至つて『四帖疏』の研究大に勃興せり。殊に西山・鎮西を以て最とす。嚮きに趙宋天台にあつては觀心觀佛論が敎學の中心たりしに反し法然門下にあつては諸行對念佛の問題が敎學の中樞たりき。鎮西派にては派祖聖光房辨長の弟子良忠に『觀經疏傳通記』二十卷の著あり。西山派にては派祖善慧房證空に敎相部に於て『自筆鈔』十卷『他筆鈔』十卷並に五部九卷全部を註釋せる『觀門義疏』四十八卷の大作

あり。事相部に於て『觀經秘決鈔』二十卷の著あり。證空の門流四派に分る。就中淨音の西谷流圓空の深草流最も盛なり。淨音に『觀經疏』の軌範を示せる『西山三十ヶ條口訣』一卷あり。孫弟子の行觀に『觀經疏私記』三十卷『觀經秘記』十四卷ありて西谷流一派の教權を成す。また圓空には『觀經疏鈔』十卷あり世に『深草鈔』又は『立信鈔』と云ふ。その弟子に顯意あり。『觀經疏楷定記』十九卷を作る。行觀の『私記』に對して深草流一派の教權をなす。又證空の門に遊觀なるものあり。その弟子に示導あつて別に一派を開く。世に三鉢寺義或は本山義と稱す。示導に『觀經希聞鈔』五卷あつて本山義一派の教義を記述せり。以上『觀無量壽經』の講學は頗る複雑を極む。要するに『觀無量壽經』は支那・日本を通じ淨土教史の中樞核子をなせるものにして若し觀經の講説註疏なくんば淨土教史の大部分は見るべからざりしなり。觀經の價值又大なりと謂ふべし。殊に法然上人の淨土宗は『無量壽經』主義なる事勿論なりと雖時勢との關係上『觀無量壽經』を表面に立て、成立せし宗旨なり。

『阿彌陀經』には天台智者大師の『阿彌陀經義記』一卷あるも恐らく偽作なるべし。唐の慧淨の『阿彌陀經義述』一卷慈恩寺窺基の『阿彌陀經通讚』三卷、阿彌陀經疏』一卷あり。又新羅の元曉に『阿彌陀經疏』一卷あり。宋以後に至つて特に盛觀を呈せしものゝ如く元照の『阿彌陀經義疏』一卷戒度の『阿彌陀經聞持記』三卷智圓の『阿彌陀經疏』一卷仁嶽の『阿彌陀經義疏』一卷あり。元以後に至つては講學のみならず實際的信仰として道俗を勸化せり。性澄の『阿彌陀經句解』一卷明の大祐の『阿彌陀經略解』一卷傳燈の『彌陀略解圓中鈔』一卷雲棲大師株宏の『阿彌陀經疏』四卷、阿彌陀經疏事義』一卷、『阿彌陀經疏問辨』一卷又藕益大師智旭の『阿彌陀經要解』一卷あり。清朝に至つて慈帆の『阿彌陀經須義』四卷彭際清の『阿彌陀經約論』一卷等あり。當時講學信仰界を通じて中心問題となりしは執持名號の四字に歸す。經の「一心不亂其人臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前是人終時心不轉倒即得往生」の文の如き信條として最も値せしものゝ如し。若しそれ行業事蹟に至つては擧げて數ふべからず。篤

學者は彭際清の『淨土聖賢錄』を參看すべし。

日本は古來珍らしくも異譯の『稱讚淨土經』の流行せし形迹あり。奈良朝光明皇后の寫經信仰及び源信僧都の宮講等是れなり。『阿彌陀經』の講學に上りしは淨土宗興行以來に多し。一遍上人智眞の時宗は三部經中別して『阿彌陀經』に依り開立せられしものなり。

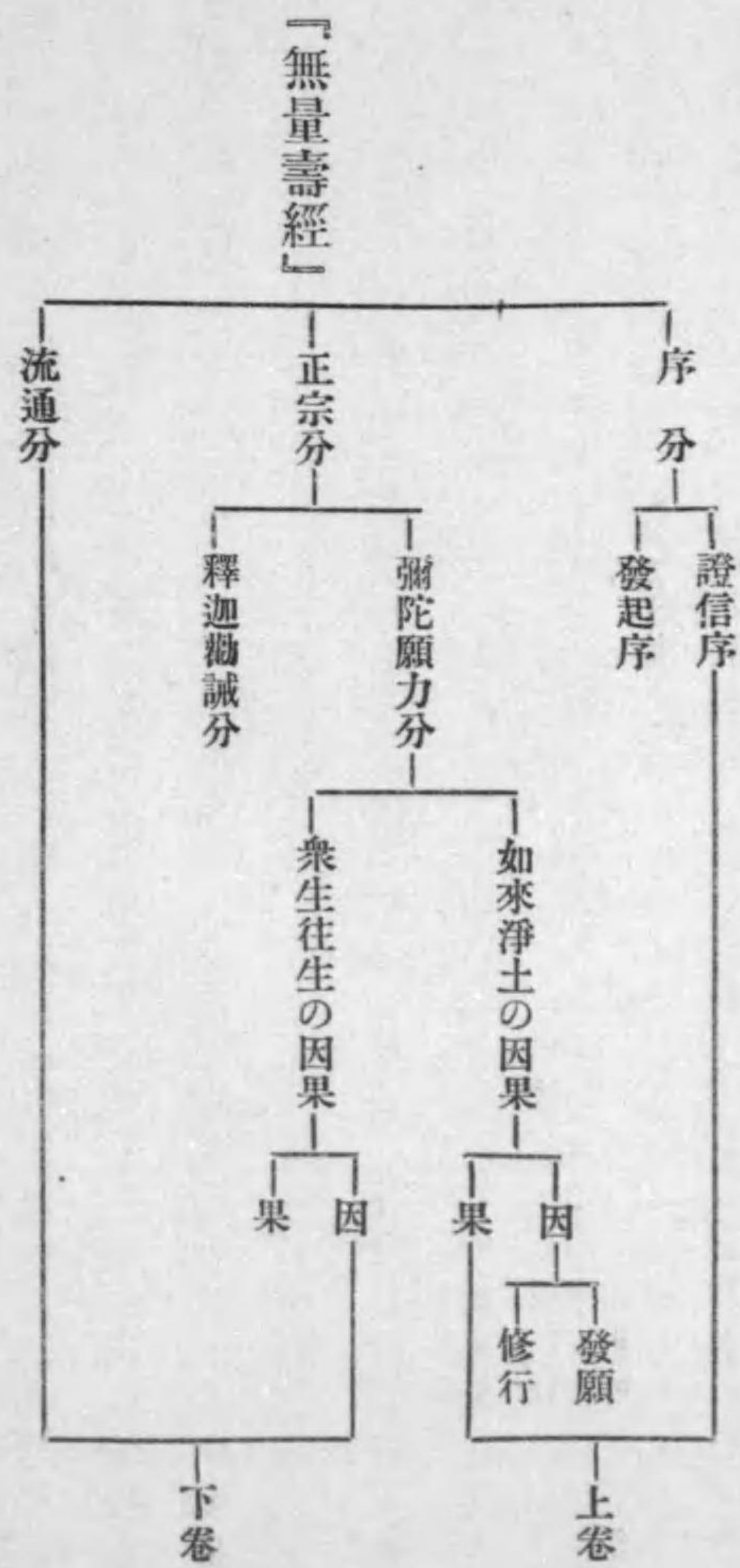
第七章 無量壽經の要旨

佛典を解釋するに序分・正宗分・流通分の三科を分つは古來釋家の依用する處なり。『淨土三部經』中『觀無量壽經』を除き他二經又然り。蓋し三分科の起源は彌天の道安法師に始まる。史に云はく「秦王僧を請して『楞伽經』を講述せしむ然るに講者の解説平且にして何等の科節なし。王云はく佛教は深旨幽玄なれば必ず何等かの科節分段あるべし」と。一座寂として又一人の應酬するものあるなし。時に道安襄陽に在つて是れを傳聞し深く是れを慨し初めて經典に三分科

を立つ。されど時人尙ほ其の私見に出づべきを疑へり。偶々親光菩薩の『佛地論』傳はるや。果して因故を發見す。即ち一に起教因緣分、二に聖教所說分、三に依教奉行分是れなり。その意義の道安の分科と符節を合するを以て、時人漸く道安の卓見に推服せりと云ふ。云ふ迄もなく起教因緣は序分聖教所說分は正宗分、依教奉行分は流通分なり。爾來六朝釋家の一として是れを踏襲せざるなし。

『無量壽經』一部二卷又序分・正宗分・流通分より成る。序分に證信序と發起序とあり。即ち阿難の結集の際に於ける自信告白と今經興起の由來是れなり。正宗分に彌陀願力分と釋迦勸誡分との二科あり。その彌陀願力分は正しく『無量壽經』一部の綱要にして又二分せらる。一は上卷に説ける如來淨土の因果にして一は下卷に説ける衆生往生の因果なり。如來淨土の因に又發願と修行との二あり。即ち發願段は上卷の「佛告阿難乃往過去」以下にして、修行段は同じく「阿難時彼比丘於其佛所」以下を指す。又如來淨土の果は「阿難白佛法藏菩薩爲已成佛」以下上卷の終に至る。衆生往生の因果の中因は下卷の劈頭「佛告阿難其

有衆生彼國者」以下にして、果は「佛告阿難彼國菩薩承佛威神」以下を指す。
 釋迦勸誠分は「佛告彌勒菩薩諸天人等」以下なり。最後に流通分は「佛告彌勒
 其有得聞彼佛名號」以下終りに至る。即ち是れを圖示するに左の如し



如來淨土の因果とは、阿彌陀佛會て法藏菩薩たりし時、世自在王佛の所に於いて

衆生々々死勤苦の本を抜くべく、他力攝取の本願を發起し、斯願満足のために、永劫の
 修行を積集せらる。本願とは總じて四十八願あれども、第十八願を以て最要とす。
 「設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗
 正法」と云へるものは是れなり。即ち換言すれば十方の衆生その機の善惡を問は
 す、若し能く佛願の生起本末を聞いて至心信樂せんものは必ず攝取して淨土に往
 生せしむべし。若し衆生往生せずば我も又佛とならじ。但し五逆罪を犯し、佛法
 を誹謗するものを除くと云ふにあり。この願行成就して法藏菩薩は阿彌陀佛
 となり、西方に淨土を建立し、南無阿彌陀佛てふ六字の名號を十方に流布し、衆生を
 して聞信せしむるものは是れなり。衆生往生の因果とは本願成就文として知らる
 るを得べし。即ち往生人は三十二相を備へ、智慧圓滿にして又神通自在なり。共
 に是れ法藏願力の然からしむる佛力他力なり。
 釋尊は此に於いて彌勒菩薩を對告衆となし、重ねて衆生の信心を勧め、三毒五惡

を誡めらる。即ち信心未熟不了佛智の輩は淨土に往生することを得ず。速かに明瞭佛智の人となつて、五惡を避け五善を勤めたまふ。是れ世間通途の道德を教ゆるものにして俗諦門の淵源なり。然るに釋迦勸誡分に至つて上來對告衆たりし、阿難を廢し、彌勒に代へられしを注意すべし。蓋し人間たる阿難の壽命長からざるを以て、後來佛となり、娑婆に出現すべき彌勒を呼び、未代衆生に傳持すべく付嘱せられしと、且つ阿彌陀佛の本願の下は底下の凡夫より上は等覺の菩薩に及ぶを以て、今最上の彌勒菩薩を呼ばれしものと解せらる。

第八章 觀無量壽經の要旨

『觀無量壽經』の名一樣ならず。僧祐の『出三藏記集』圓照の『貞元釋教目錄』及び天台の『觀經疏』等には、觀無量壽佛經と云ひ、智昇の『開元釋教錄』淨影の『觀經疏』及び道綽の『安樂集』等には、觀無量壽經と云ひ、宗曉の『樂邦文類』には、無量壽佛觀經と云ひ、我祖親鸞聖人は此の名目を依用せらる。又法經の『衆經目錄』及

び善導の『觀經疏』等には、無量壽觀經と云へり。四稱ありと雖、觀の字の前後と佛の字の有無を異にするのみにて、固と梵本には總べて標題を見すと云へば、後世人々に依つて隨意斯る異名を來せしもの、如し。『無量壽經』『阿彌陀經』も又此の例に洩れず。同一梵本より來りしものと思はるゝ經にも尙ほ且つ區々なるものあり。

『觀經』の教興は釋尊の晩年に當り、摩訶陀國王舍城の阿闍世太子なるもの提婆達多に教唆せられ、父の頻婆沙羅王を捕へて牢獄に投じ、王位を奪取す。王妃韋提希その窮狀を憐み、私に獄中に入して、飲食を供し、餓死を救ふ。この事偶々阿闍世王の知る處となり、大に瞋怒し、直に劍を抜いて母を殺害せんとせり。時に忠臣耆婆なるものあり。懇々その無道を説き、苦諫して云はく、『毘陀論經』を見るに、古來子にして王位を得んがために、其父を殺害せしもの一萬八千人あり。然れども未だ曾て無道にも母を殺害せしものあるを聞かず。王強いて是れを敢へてせば、旃陀羅の所業と云ふべく、臣等聞くさへ忍びず」と。阿闍世深く種姓の名に

羞じ母を拉して、七重の牢獄に幽閉し、僅かに怒を釋く事を得たり。韋提希獄裡にあつて憂愁に堪へず。遙かに耆闍崛山を拜し、哭泣して云はく、「世尊は威重くして致請するに由なし。希くば阿難・目連を遣はして、我がために説法せしめたまへ」と。時に世尊韋提希の所念を知り、阿難・目連の二人を従へて王宮に來臨し、眉間より光明を放ちて、十方國土を觀見せしむ。此に於いて、韋提希極樂世界の阿彌陀佛の所に往生せん事を請へり。世尊乃ち韋提希の機縁正に純熟せるを見て、廣く十六觀を説き、暗々裡に弘願他力の妙法を憧憬渴仰せしめらる。

『觀無量壽經』の概要を述ぶるに當り、便宜上又該記述を補足する意味に於いて、其特徴を一言すべし。經典には各々特徴を存するも、未だ『觀經』の如く多岐に互り、且つ意味の深遠なるものあるを聞かず。『觀經』の特徴に就ては、淨土宗西山派の祖善慧房證空の著『觀經疏他筆鈔』に十項を擧ぐるも、今且らく眞宗先輩の指南に依り、七項を解説すべし。

第一は化前方便なり。化前とは釋尊一代四十五年間の教法を以つて『觀經』

の前方便となす意なり。『觀經』は固より王舍城獄裡の韋提希に對する説教なり。然るに「王舍城耆闍崛山大比丘衆千二百五十人」と云ふは是れ『觀經』の機にあらずして、一代經所對の機なり。是れ一代經を以て『觀經』の化前方便とする所以なり。されば一代諸教の攝化に漏れたる、五障の女質五逆の惡機を所對とし耆闍崛山より、王舍城に出現して出世の本懷たる彌陀の本願を説かれしものなれば、一代經を前方便とする所以なり。當時釋尊は耆闍崛山にあつて『法華經』を説かれつゝありしが、其會座を中止して王舍城に趣かれしは、是れ『觀經』の價值を語るものなり。釋尊の本懷は唯だ彌陀の本願を説かんがためなり。されば彌陀法を宣説せる『觀經』より見れば、『法華經』の如きは方便教に過ぎず。況んや餘他の一代諸教をや。是れは彌陀の本願を本位として、一代佛教を看破せる歴史以上論理以上の價值批判なり。第二に分科なり。『大經』『小經』その他の經典は三分科なるも、『觀經』のみ善導大師に依つて五分科を立てらる。五分科とは序分・正宗分・得益分・流通分・著闍分是れなり。就中得益分は韋提希夫人が五百の侍

女と共に利益を得たる一段なるが、他の釋家即ち淨影・智顛・嘉祥大師は是れを十六觀の利益として正宗分の中に收めり。然るに今別に得益分を開きしは、全く弘願他力の益を顯さんがためなり。韋提希の利益は十六觀より來りしにあらすして、正宗分中暗々裡に説かれたる弘願他力に由來せり。若し淨影大師等の云へるが如くんば、得益の文字經末にあれば、定散の益となるの嫌あり。又耆闍分を開きしは、『觀經』の説教が王舍城の一會に止らず。耆闍崛山に歸錫せらるゝや、重ねて一會説かれしを以つてなり。是れ『觀經』をして末世に流通せしめんがため、個人説教を公衆説教に移されしなり。第三に逆縁教興なり。多くの經典は善事勝縁とて善縁あつて釋尊の説教あるを常とす。『維摩經』の維摩居士に於ける、『勝鬘經』の勝鬘夫人に於ける概ね然り。獨り『觀經』は阿闍世太子の逆害に始まり、母韋提希の逆縁より興れり。韋提希は人生の現實を暴露せるものにして、又人生の事實を代表せるもの即ち『觀經』は韋提希に依つて代表せらるゝ現實の人生を救濟する唯一の彌陀法を説かんがために興りしなり。第四に釋迦教と彌陀

教とを對立せる事なり。多くの經典は釋迦教にあらすんば彌陀教にして兩者その一を出でず。未だ『觀經』の如く二尊の教を併説せる者あるなし。蓋し『觀經』所説中定散二善は釋迦の異方便にして念佛は彌陀の弘願法なり。二尊の教説相依り相俟ちて隱顯の兩義を成するもの即ち『觀經』の妙義なり。善導大師は廢立の見地より、一經の始終を達觀して要門弘願の二教ありと説破し、「娑婆の教主その請に依るが故に廣く淨土の要門を説き安樂の能人別意の弘願を顯彰す」と釋せらるゝもの即ち是れ。換言すれば釋迦は専ら機情を調達するの任に當り、彌陀は其圓熟せし機を攝取するの責に當れり。釋迦の要門教と彌陀の弘願教と併説せられてあるだけ『觀經』の内容は頗る複雑なり。この兩者の關係を明瞭にするもの即ち『觀經』の中心問題なり。第五に觀佛三昧と念佛三昧の兩宗併存せる事なり。經典には必ず經宗なるものあり。この經宗が根底となつて宗旨の開立を見しもの即ち支那六朝教學の特長なり。然るに多くの經は一經一宗に限らるゝ『維摩經』の不思議解脱を宗とするが如き『大品經』の空慧を宗とす

るが如き其一例なり。然るに『觀經』は善導大師の云はるゝ如く觀佛三昧と念佛三昧との兩宗あり。這は釋迦彌陀の二尊教が併説せらるゝ以上當然の事に屬す。さり乍ら一國に二王なきが如く今も又絶待に兩宗の併立を許さず。結局は一宗に終歸す。即ち觀佛爲宗は要門教の當分にして念佛爲宗は弘願教の當分なり。然り而して要門の暫用還廢なる如く觀佛三昧も又所廢に終る。第六に『觀經』は定善致請散善自開の教なり。蓋し佛世尊の説教は必ず行人の請に應じて宣説せられしものなり。然るに『觀經』は定善のみ韋提希の致請に依りしと雖散善は佛の自開なり。初め釋尊は韋提希の請に應じて定善十三觀を説かれしも尙ほ衆機を漏らすの恐れあり。即ち特に散善九品を説かれし所以なり。這は全く衆機を調達して弘願他力に導く佛の善巧方便なり。然るに散機の中尙ほ三福無分の劣機あり。更に念佛を説いて此の劣惡の機を攝取せらる。されば一經の主眼たる念佛の奥旨も又散善の自開に依つて顯彰せられしものと謂つべし。第七に流通付嘱なり。經典は總て正宗分を付嘱勸持するの例なるに『觀經』獨り

正宗分を付嘱せず。却つて流通分の念佛を付嘱す。凡そ經典一部の要旨は正宗分に存するが例なり。『觀經』獨り然らず。流通分に至つて一經の眼目たる念佛を説き以つて是れを付嘱す。その正宗分を付嘱せざるは廢のためにして流通分を付嘱せるは立のためなり。依て以て佛意自ら廢立にあるを知るべきなり。善導大師云はく「上來定散兩門の益を説くと雖佛の本願に望むるに意は衆生一向に専ら彌陀佛名を稱するにあり」と。又法然上人云はく「隨他の前には暫く定散門を開くと雖隨自の後には還つて定散門を閉づ」と祖意焔然たり。第八は一經二會なり。總ての經典は一經一會に限らる。然るに觀經は佛の委嘱に依り阿難その王舍城にて聞きし處を更に耆闍崛山の大衆に向つて復演せり。是れ『觀經』の未來世一切衆生の德音として付嘱せられしに由る。『觀經』獨得の妙意深く感佩せざるべからず。

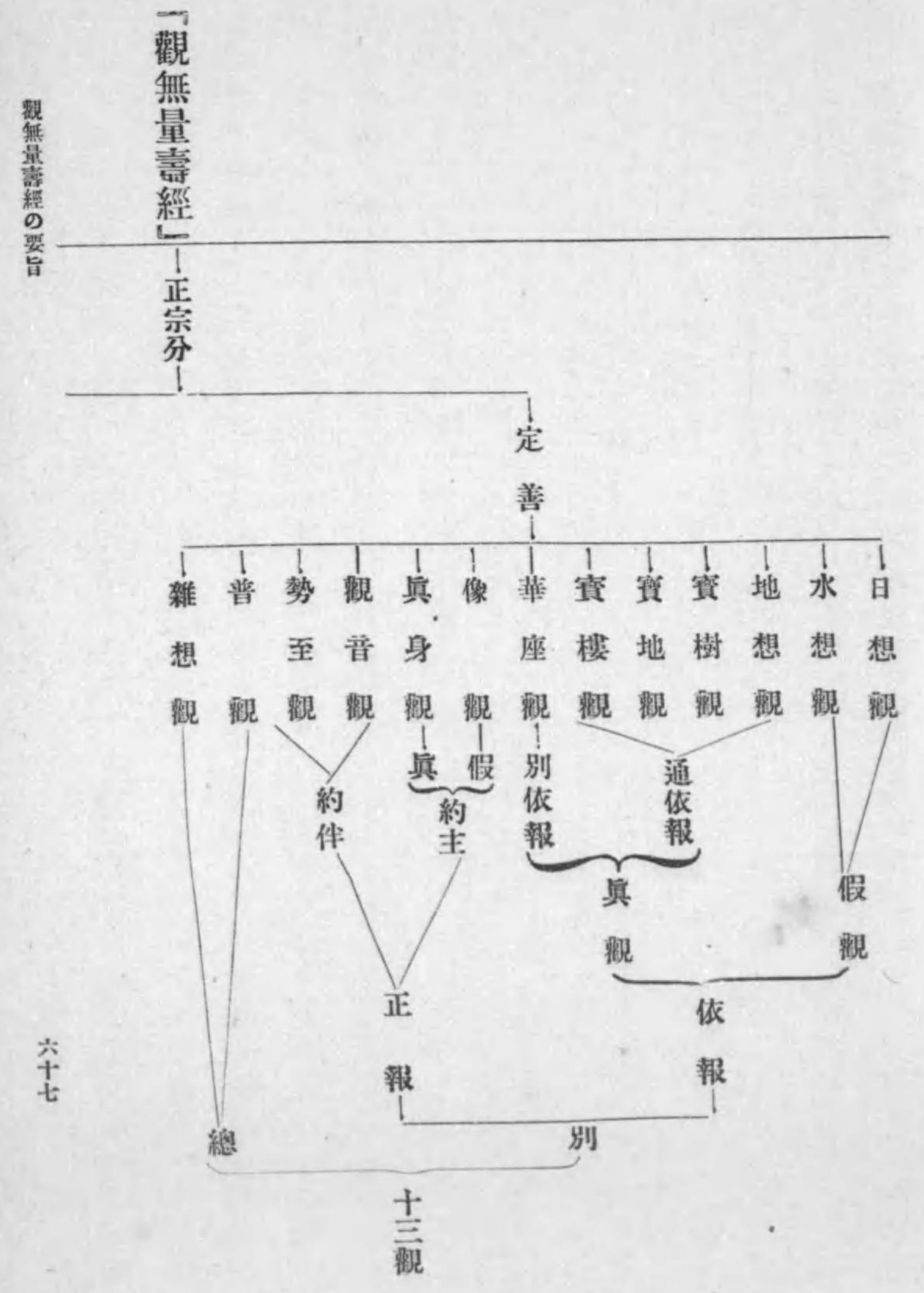
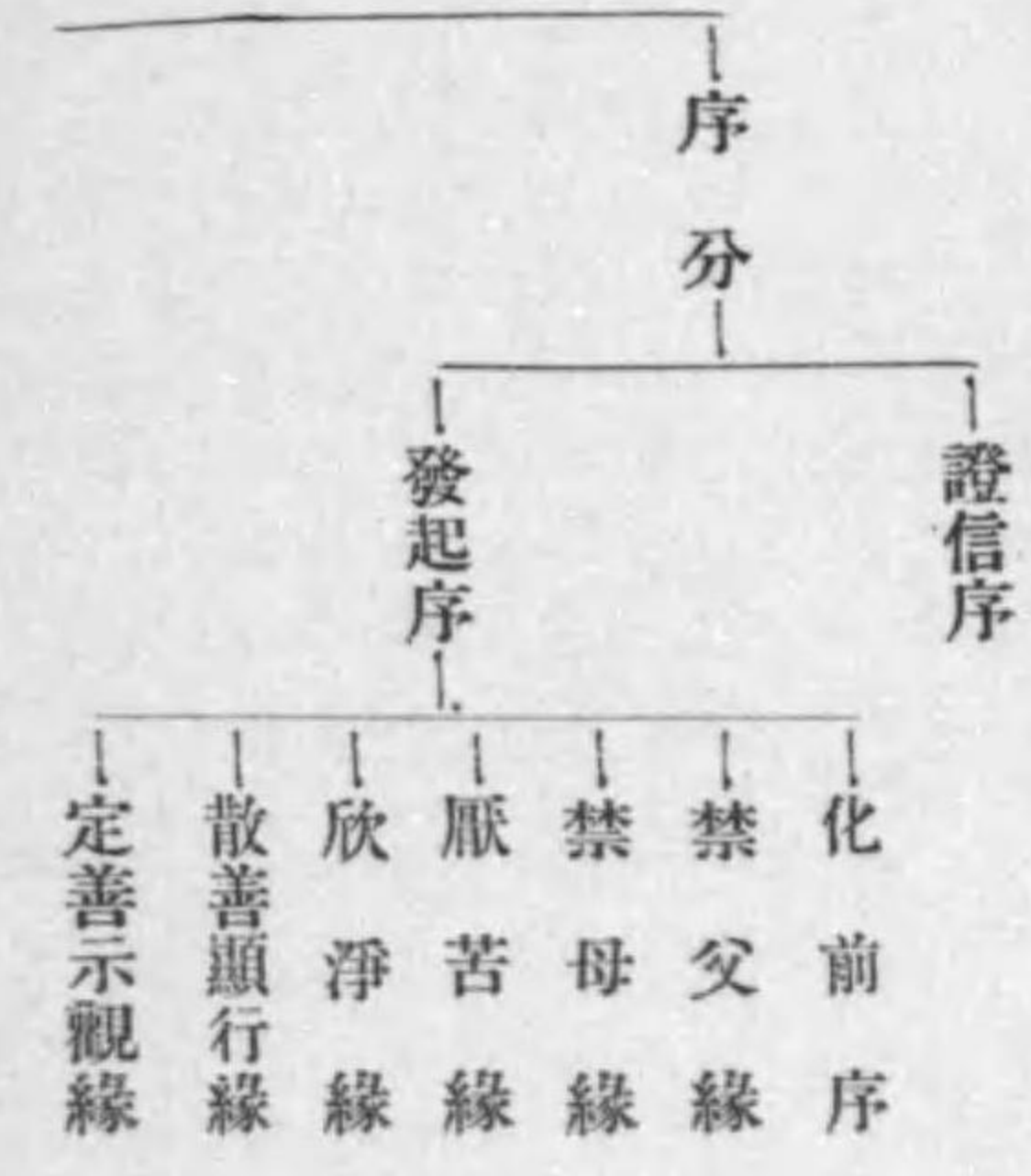
『觀經』の解釋法に五分科ある事既に是れを云へり。その中序分に三序六縁の分別あり。即ち證信序發起序化前序禁父禁母厭苦欣淨散善顯行定善示觀是れな

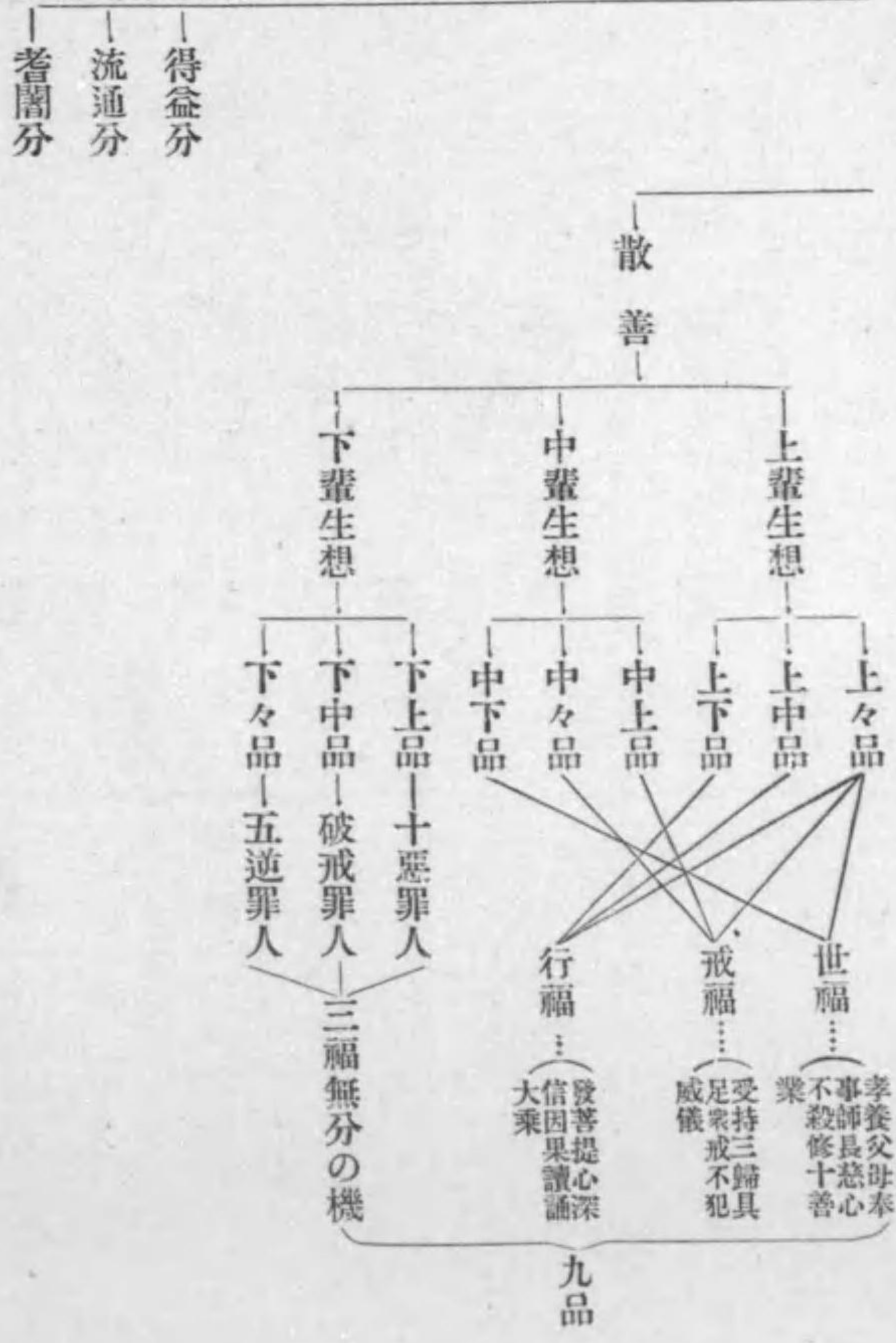
り。證信序は阿難の自信及び使命を表白し發起序より化前序を開き以下の六縁を併せて又二序七縁の稱あり。化前序は廣く一代諸教の機教を攝し淨土教の興起する所以を示す。就中禁父禁母の二縁に於いて貪瞋癡の煩惱に覆はれたる現實の人生を描き厭苦欣淨の二縁に於いて機縁調熟即ち世界人生の意義を自覺して彼岸の淨土を憧憬する次第を説破し散善顯行定善示觀の二縁に於いて精神生活の經驗を説き暗々裡に絶對安住の天地弘願の信樂にある所以を説けり。正宗分に十六觀即ち定善十三觀散善九品あり。正しく『觀經』の所明なり。定善とは息慮凝心の意散善とは廢惡修善の義なり。一に日想觀二に水想觀以上の二觀は此土の所觀なるを以て假觀と名く。三に地想觀四に寶樹觀五に寶地觀六に寶樹觀以上の四觀は極樂淨土の依報莊嚴なれば此土の假觀に對して眞觀と稱す。七に華座觀八に像觀九に眞身觀十に觀音觀十一に勢至觀十二に普觀十三に雜想觀善導大師は以上の十三觀を定善とし前七觀を依報觀第八觀より十一觀までを正報觀とす。然るに淨影寺慧遠等の釋家は多く前六觀を依報觀とし第七第八

觀を正報觀に數へり。散善は第十四觀以下にして三福九品あり。三福は序分に出づる三福行にして九品の端緒となる。三福九品は開合の異にして三福は行體九品は機の差別なり。謂ゆる九品の機とは上六品は善機下三品は惡機にして善機六品に分るゝは上輩は聖道大乘の機中輩は小乘世善の機なればなり。即ち第十四上輩觀に上々品・上中品・上下品の三品あり。上々品には至誠心深心回發願心の三心を明かし世・戒・行の三福を修するもの往生を得。上中品には行福を修するもの往生を得。上下品又是れに準ず。第十五中輩觀是れに又中上品・中々品・中下品の三品あり。中上中々の二品は戒福を修するもの往生を得。中下品は世福を修するもの往生を得。第十六下輩觀是れに又下上品・下中品・下々品の三品あり。共に三福無分の機なり。されど下々品には五逆の惡人も尙ほ且つ十念の稱名にて往生を得べき德音を説けり。善導は以上の三觀を散善と立て、佛の自開となし定善十三觀と區別して定善致請・散善自開と釋せらる。されど慧遠以下の諸師は多く十六觀を總じて韋提希の致請に依りしものとす。然り而して第十四觀

以下の九品段は定善の機が散善の機の往生する相を觀する他生觀なりとし所觀は散善に似たるも能觀は定善なりと云へり。されば他生觀を三福に對して福觀の雙修を勸めり。この三輩九品の機を解するに異説あり。善導は總べて凡夫の別とすれども諸師は悉く内外凡聖の別となす。得益分流通分者闡分の三は前に詳かなれば此に略す。

以上叙するところ一經の組織關係を示すに左の如し。





要するに『觀經』一部は是れを表面顯説より見れば定散二善を勸めしものゝ如く經末の念佛も尙ほ機執を脱せざる嫌あり。然るに是れを裏面即ち付嘱持名

より逆見するとき、弘願念佛經中に瀾漫し謂ゆる隱説として行く處として可ならざるなき弘願經となる。されば表面よりすると裏面よりすると其間大に異りあり。是れ善導大師に廢立の釋あり、親鸞聖人に隱顯の判ある所以なり。前に一經の特徴を叙せし下、是れを想見すべし。

第九章 阿彌陀經の要旨

『阿彌陀經』は對告衆の問對を待たず、佛の舍利弗に對して説教せられし自問自説經なり。一經又序分正宗分流通分の三科あり。正宗分大別して二となる。初めに極樂の依正莊嚴を讚嘆し、後に其の極樂國土に生せんには、小善根福德の因縁にては未だし。偏へに多善根多福德の念佛の一行に依らざるべからずと、念佛往生の旨を勸めり。是れを經文の上にて云へば「再時佛告長老舍利弗、從是西方等より以下は、淨土の依正二報の莊嚴を説き、別して「彼土何故名爲極樂」等と説いて淨土の依報を讚し、又「舍利弗、於如意云何」等と説いて淨土の正報即ち壽命

無量光明無量の阿彌陀佛を嘆す。又「舍利弗衆生聞者應當發願」等と説いて淨土に往生すべく普く發願を勧め更に「不可以少善根福德因緣得生彼國」と説いて淨土に往生するには少善根福德即ち定散等の諸行にては不可能なる事を説破し更に「聞説阿彌陀佛執持名號」等と説きたゞ名號を執持して一心不亂なれば臨終佛及び聖衆の來迎に接して往生するを得べしと云へり。尋いて念佛の因に依つて往生すべきを釋尊自ら「我見是利故説此言」と佛知見を開示して念佛往生を勧むるのみならず十方の諸佛も又然りと諸佛の證誠を示し釋尊と諸佛と相俟つて淨土往生を勧むるもの一部の大旨なり。是れを圖示するに左の如し。



然るに經に多善根福德の念佛を執持すること一日乃至七日する時は臨終來迎に接し淨土に往生すと云へり。是れ二十願の眞門自力なれば以て一經の究竟義とすべからず。蓋し「小經」に又隱顯の義あり。衆生の機根に不同あれば念佛にも自ら差別を生ず。今「阿彌陀經」の要旨は表面顯説より見れば、上來所説の如くなるも是れ定散諸機を誘引せらるゝ説相にして裏面隱説より見れば稱名の遍數に依つて往生するにあらず。聞其名號信心歡喜の一念に往生治定する也。一見「觀經」と同じきも彼の如く全般的ならざるを特異とす。即ち處に依り隱顯の兩義を含み處に依り隱密の義あり。例へば莊嚴段の如き何等隱顯の別なきも勸念佛往生段の如き兩義に互れり。又最後の「如我今者稱讚諸佛不可思議功德」の一段隱説なく全く弘願他力なり。彼は弘願を隠して要門を説きしも是れは赤裸々に弘願法を説けり。要するに「小經」の弘願念佛は一に機情の上に存すと云ふべし。

第十章 差別點と一致點

差別點と一致點

『淨土三部經』は淨土門の根本聖典としてその間輕重淺深の別あるべき理なきも是れを對外的に標榜すると對内的に取扱ふに依つて自ら別異を生ず。即ち法然聖人と親鸞聖人の所見即ち是なり。蓋し法然上人は淨土立教者として聖道諸宗に對し淨土門の意義と價値とを對外的に顯揚すべき位置にあり。されば自ら三經一致門の側に坐すべきは固より其所なり。然るに親鸞聖人は淨土門の基礎既に成り又對外的工夫を要すべき時代にあらず。却つて時恰も黒谷の門流異義區々に分れて西山鎮西九品長樂等分裂割據し法然上人の正統を諍ひし際に在り。従つて親鸞聖人は茲に對内的に教義施設を工夫すべき位置に坐し給へり。是れ淨土の根本聖典たる『三部經』に差別的解釋を要せし所以なり。蓋し淨土教の由來する淵源は阿彌陀如來の本願に在り。而して願海無量なるも四十八願を出せる中正しく淨土往生の因行を誓ひしものは第十八第十九第二十の三願なり。親鸞聖人は即ち此三願に就いて眞假の別を立てらる。眞とは第十八願にして假とは要門の十九願と眞門の二十願となり。弘願とは『大經』の法門なり。

要門とは定散自力の諸行往生教にして弘願法に轉入する要路の門戸即ち『觀經』の法門なり。眞門とは自力念佛の教にして如來眞實の行即ち『小經』の法門なり。この三願を基礎として三願・三門・三機・三往生の別を生ず。三門は前の如く三機は正定聚邪定聚不定聚是れなり。三往生は難思議往生雙樹林下往生難思議往生是れなり。何れも第十八十九二十の次第に準ず。第十八弘願門は正定聚の機なるが故に難思議往生を得。第十九要門は邪定聚の機なるが故に雙樹林下往生を得。第二十眞門は不定聚の機なるが故に難思議往生を得べきなり。即ち左の如し

『大經』第十八願開說 弘願 正定聚の機 難思議往生
 『觀經』第十九願開說 要門 邪定聚の機 雙樹林下往生
 『小經』第二十願開說 眞門 不定聚の機 難思議往生

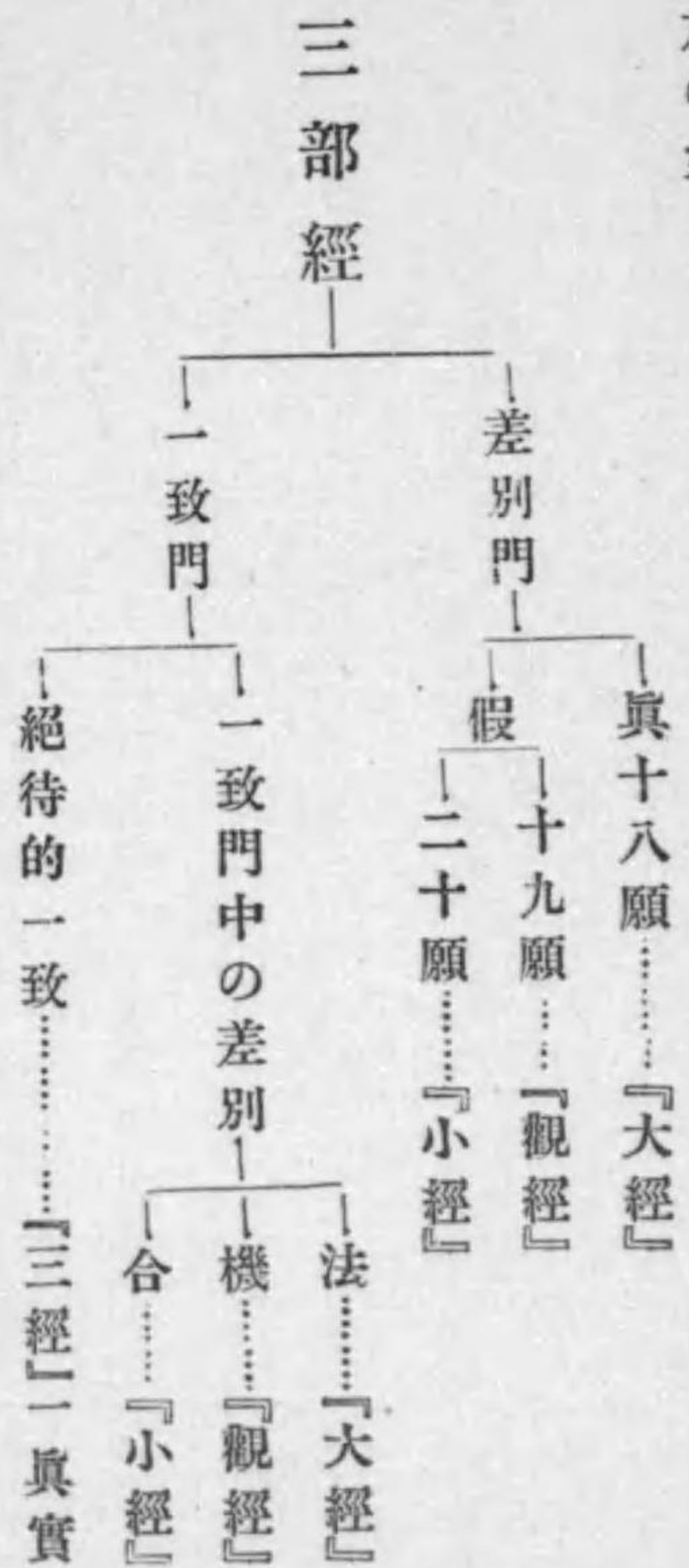
かゝる相違を來すもの詮する處願文既に信心行體を異にするものあるに依る第十八願は至心信樂欲生我國の信にして乃至十念の行なるも其行は次下述ぶる十九二十願の行と異り往生行にあらずして信後の報謝行なり。されば彼の如く

行信と次第せずして、此は信行と次第す。第十九願は發菩提心修諸功德の行にし
 て至心發願欲生我國の信なり。第二十願は聞我名號係念我國植諸徳本の行にし
 て至心回向欲生我國の行なり。即ち行信次第なり。行信各別なれば證果又各別
 なりとなすものは是れ差別點の主要なり。

遮莫這は『三部經』の當面より立論せるものにして未だ十全を得しものと稱
 すべからず。若し其れ裏面より觀察せんか『大經』は表裏なければ且らく措く

『觀經』は定散の諸行を説けども固く是れ目的にあらず。且らく諸行不堪の機
 情を示すべく暫用還廢の法にして要は弘願他力の妙法を顯すにあり。即ち阿難
 に是れを付囑して未來世一切衆生に流通せしめしもの所以あり。『小經』は少善
 根少福德を廢して多善根多福德を勸むるを以て自力念佛の嫌あるも然らず。實
 は本願名號を信受して金剛不壞の眞實信心を説き諸佛の護念證誠を示せし故又
 弘願開顯の法門と謂つべきなり。然り等しく一致の法門なりと雖『大經』は主
 として法の眞實を説き、『觀經』は機の眞實を顯はし、『小經』は機法合採して依

て以て眞實弘願の法を顯彰せり。是を以て或は是れを一致門中の差別と稱す即
 ち左の如し。



右の如く『三部經』は要眞弘又は機法合の關係交渉にして相依相俟つて大
 悲引接の用を辨するなり。若し弘願眞實教なればこそ『大經』のみあつて『觀
 經』『小經』の説教なくば定散自力の輩は終に弘願他力に入るを得ず。若し又
 『觀經』『小經』のみあつて『大經』の説教なくば聖道門より淨土門に入り要門
 より眞門に進むことを得べきも未だ以て佛願の生起本末を聞いて大悲を信樂す

ること難し。又何を以て『觀經』『小經』の隱意を反顯するを得んや。要するに觀小の二經是れを表面より見れば『三部經』永く差別門たるべく、又是れを裏面即ち隱意より見れば『三部經』一致ならざるはなし。法然上人滅後異義紛々裡にあつて眞假を判じ要眞弘を談じたまふ祖意知るべきなり。

第二編 七祖聖教の概説

第一章 淨土教史の概要

淨土教の歴史は印度に萌芽を發し支那に生育し日本に來り純熟せしものなり。印度の淨土教は大乗佛教の興起と共に發し馬鳴の『大乘起信論』に依つて提唱せらる。馬鳴は佛滅五六世紀交の人、憍薩羅國に生れ健陀羅國の迦膩色迦王に事へて興法利生に努力す。『起信論』は一心二門三大四信五行より成り、一心二門三大に於いて宇宙人生の理法を論じ四信五行に於いて其實踐法を説けり。然り而して其實踐門に於いて修行信心分を開き「如來に勝方便あり」と説いて淨土の信心を勸む。佛滅七世紀に龍樹菩薩あり、憍薩羅國に生れ外道を排撃して大乘

佛教を宣揚す。又國王沙多訶を説いて佛門に歸せしめ専ら精神界の統一を策す
 『十住毘婆娑論』『智度論』等を著して淨土教を勸む。當時又堅慧菩薩あり。
 『大乘究竟實性論』を著はして彌陀法を宣説す。佛滅九世紀に無着・世親の兄弟
 あり、健陀羅國布路沙城に生る。大乘頼耶緣起を主張し馬鳴の眞如緣起、龍樹の諸
 法皆空論と相俟ちて印度大乘教の三大變遷を劃す。無着は『攝大乘論』を著は
 し淨土教に論及する處あるも、由來彌勒崇拜系の人として知らる。世親に至つて
 は三經通申の『淨土論』を著はし、自他願生を勸む。以上五師の教系に就ては法
 相三論各異説を立つ。近く凝然の『淨土源流章』を看るべし。

二

支那の淨土教は佛教の傳來と共に古く、後漢の世既に淨土經典の譯出せらるゝ
 あり。東晋の世に經論の講學勃興すると共に淨土教にも新機運を齎らし信仰運
 動の興起を見るに至る。蓋し支那淨土教に三流の別あり。一に慧遠流。二に善

導流。三に慈愍流是れなり。慧遠流とは東晋の世慧遠法師が南方廬山に創めし
 白蓮社の念佛なり。慧遠は道安法師に仕へて聲譽あり。前秦建元九年道安五胡
 の亂に依り、其門下を解散するや慧遠流浪の餘廬山に來り、其の清閑を愛して終焉
 の地となし、大元十五年道俗一百二十三人と共に白蓮社を結び、無量壽佛の像前に
 蓮を栽へ齋を設け、誓を立て、西方の淨業を勸む。一世の碩學劉遺民、社同人を代
 表して「西方發願文」を奉ず。又白蓮社には道生・覺賢・慧永・慧持・雷次宗等十八賢
 人と稱する高士あり。その主張、教義に就ては文献の徴すべきもの乏しく、唯僅か
 に宗曉の『樂邦文類』に載せる慧遠の「念佛三昧詩序」劉遺民の「白蓮社誓文」
 等に依つて想見し得るのみ。蓋し阿彌陀佛は極樂淨土酬報の佛にして唯心の彌
 陀にあらず。その念佛は稱名にあらずして觀佛三昧なりしに似たり。是れ南方
 に流行せる老莊の思想と一致し偶々以つて高士逸人の意に投せしためならずん
 ばあらず。白蓮社の教系に就ては志盤の『佛祖統記』及び『樂邦文類』に互り
 左の異説あり。

『佛祖統記』の説

慧遠 — 善導

承遠

法照

少康

延壽

省常

『樂邦文類』の説

慧遠 — 善導

法照

少康

省常

宗頤

右兩説あるも、共に中央の正鶴を失す。されど又全く無價値と見るべからず。蓋し白蓮社は慧遠の入滅と共に廢滅に歸せしもの、如く併も慧遠の人格は後世永く求道者の憧憬せらるゝ處となり、往々教會の復興を策せられし事實あり。即ち右の系統は教義の傳承にあらずして、教會の復興運動に依つて意味せらるゝ系統なるに似たり。

三

善導流は魏の曇鸞大師に興り、陳の道綽禪師を経て、唐の善導大師に大成せられし流義也。曇鸞大師の居處に準し一に雁門流と稱せらるゝも大成者の功を推し

て善導流と稱す。曇鸞は初め四論の學者なりしが菩提流支に依つて『觀無量壽經』を授けられ、忽ち四論の講説を擱きて淨土に歸入す。菩提流支は世親の『十地論』紹介者にして、又『淨土論』を譯出せし人なり。曇鸞は此の『淨土論』を釋して『往生論註』二卷を著す。此に於て印度の淨土教は支那に直傳し系統最も明けし。魏の興和四年五月二十六日世壽六十七歳にして寂す。當時六朝の教學漸く勃興し、經論の研究盛んなり。即ち此間に於いて『十地論』の研究より地論宗興り、『涅槃經』の研究に依つて涅槃宗興り、『法華經』の研究に依つて天台宗興り、『攝大乘論』の傳譯に依つて攝論宗興る。特に『觀無量壽經』の如き學場一般に歡迎せられ、註疏相尋いて出づ。又『攝大乘論』の流布に依つて別時意識提唱せらるゝに至り、教學の大勢と是等諸宗諸師の淨土教に於ける誤解謬見とに餘義なくせられて淨土教の命運正に危きに至る。道綽禪師は即ち此際に出世せられし涅槃宗の學匠なり。曾て石壁玄中寺に詣り、曇鸞大師の碑文を見て感激措かず、涅槃の講説を捨て、淨土に歸す。『安樂集』を著はして從來淨土教にか

かりし誤解を一掃せらる。且つ破邪顯正の爲に『觀經』を講する二百遍に及びしと傳ふ。貞觀十九年四月二十七日世壽八十四歳にして玄中寺に寂す。禪師の門に善導大師あり。初め三論の明勝法師に師事して『維摩經』『法華經』を學習せしも難澁にして倦怠の色あり。即ち經藏に入つて有縁の經を探るに『觀無量壽經』を得たり。即ち同僚の妙開律師と共に是れを閱讀するに意義深遠にして領解するに由なし。偶道綽禪師の九品道場に在つて『觀經』を講せられつゝあるを聞き急遽その會下に參じて弟子となる。終南山の光明寺或は長安の悟眞寺に留錫して都鄙を遊化す。大師沾淡無慾主として平民傳道に従事せらるゝもの十年一日の如く蓋し他力信仰の下層社會に振作普及せしもの一に大師の功蹟に歸せずんばあらず。又『觀經四帖疏』等五部九卷を著はして破邪顯正に努めらる。唐の永隆二年三月十四日世壽六十九歳にして寂す。門下に懷感禪師あり。京師千福寺に住し『淨土群疑論』七卷を作る。尋いで後善導と呼はるゝ法照・少康あり。法照に『五會法事讚』の著あり少康に『新修往生傳』の著あり。善導

流の主張教義は茲に絮說するの要なし。その教義系統に就ては又異説あり。即ち左の如し。

『安樂集』の説

善提流支——慧寵法師——道場法師——曇鸞法師——大海禪師——法上法師

『佛祖統記』の説

善提流支——曇鸞大師——道綽禪師——善導大師——懷感禪師——法照禪師——少康法師

蓋し前記を稽ふるに善提流支と曇鸞法師と面授師資の間に慧寵道場の入れるは疑はしく特に彌勒崇拜者と目すべき法上法師を數へるは正鵠を失せるやの嫌あり。後説は上來所説の如く綿々傳承の跡明かにして信憑するに足れり。

四

慈愍流は慈愍三藏の西域より傳承せし一流なり。三藏名は慧日、義淨三藏の印度より歸來せるを聞き羨望に堪へず。唐の嗣聖十九年萊州を發し、海路船に乗じて崑崙・佛誓・獅子州を経て三年の後印度に入る。即ち聖蹟を巡拜し、梵本を探り、知識に參するもの十三年。更に陸路を経て還らんとし、雪山一帶の地を跋涉するもの四年、痛切に閻浮の苦難を嘗む。即ち天竺の三藏に質すに樂邦の所在、出離の要路を以てす。學者何れも勸むるに西方願生を以てせざるなし。三藏尋いで健陀羅國に到り、山中に觀音の靈告を蒙り、十八年の後唐の開元七年長安に歸る。玄宗勅して慈愍三藏の號を賜ふ。その主張教義はその著作『淨土慈悲集』及び『淨土文記』の現存せざれば是れを確むるに由なしと雖、その片言雙語は法照の『五會法事議』永明の『萬善同歸集』に引用せり。又元照律師の『芝園集』に載する『論慈愍三藏集書』及び『佛祖統記』第四十六に出づる記録に依つて揣摩し得る耳。蓋し慈愍流の教義は教律禪を併せ勤修するにありしものゝ如し。

以上三流あるも蘆山流は疾く消息を絶へ、善導・慈愍の二流は折角勃興せしと雖

華嚴密禪の興隆に妨げられしと、又唐末五代の亂等のため暫くにして消息の傳ふるなきに至れり。たゞ禪門の若干命脈を保ちしだけ禪淨融合の傾向を呈し來るあり。永明寺延壽の如き其代表者にして、『宗鏡錄』『萬善同歸集』等參看すべきなり。宋代に至り天台宗の復興すると共に天台智者大師一流の念佛興りしと雖、是れ又台淨融合に近く、寧ろ餘りに學解に失せしやの嫌あり。律宗の元照律師のみ若干善導大師を汲みし形迹あるも、要するに唐以後の淨土教は禪化或は天台化して眞面目を發揚するに至らず。明代雲棲大師株宏・藕益大師智旭に至つて台禪淨一致の教義となりしものゝ如し。

五

然るに三流中、獨り善導流のみ日本に傳はり、法然上人の淨土宗となる。是れより先き本邦疾くに聖德太子の西方願生あり。慧隱法師の無量壽經宮講あり。奈良朝に入つて、聖武天皇の朝法相に元興寺の智光あり。西方に歸入して『淨土論

註』五卷を著はす。禮光又篤く淨土を信仰す。又法相に行基菩薩あり淨土を信するご共に社會救濟事業に努力して信佛の餘徳を顯はす。尋いで智暎・善珠・昌海あり。智暎に『無量壽經私記』善珠に『無量壽經讚抄』及『同註字釋』昌海に『西方念佛集』阿彌陀懺過』等の著作あり淨業又篤し。平安朝に至つて新たに北嶺比叡山に傳教大師の天台宗興ると共に、四種三昧の念佛を移植し大師是れを慈覺大師に授く。慈覺即ち常行三昧堂を創し五臺山の念佛三昧法を修す。慈覺には別に『阿彌陀懺法』及び『常行三昧常行法』の著作あり。慈覺大師に尋いで相應・安然・延昌あり。延昌僧正の門より空也上人出づるに及び淨土教は平民的宗教となり又社會的に公德利益を施すもの夥し。蓋し淨土教の一進展なり。尋いで良源僧正慈惠あり。日本天台中興の位置に座す。又西方を願生して『九品往生義』『四十八願釋』等の著作あり。其下に覺運・源信の二明星あり。覺運は檀那流を開いて教相を發揮し源信は慧心流を開いて觀心を鼓吹す。源信は即ち慧心僧都にして實に眞宗七高僧の一人なり。身台宗の一要職を占むと雖深く淨土

教に歸入し發揮する處尠からず。其著『往生要集』は善導大師の教義を以て止觀念佛を解釋せるもの是れ我邦に善導大師の紹介せらるゝ始めにして又聽て法然上人の淨土宗興行ある前提なり。寛仁元年六月十日世壽七十六歳にして寂すこの間又南都系には三論に永觀・珍海・重譽等出づ。永觀律師は『往生十因』『往生講式』を著はし珍海は『決定往生集』『菩提心集』を作り重譽は『西方集』を著はして自他願生す。以上南都北領の淨土教ありと雖三論法相若くは天台に寓在して兼修せられしに過ぎず。依つて是れを寓宗時代と稱すべく偶良忍上人の如き別に融通念佛宗を開かるゝあるも教義に於て未だ獨立せず。専ら華嚴天台を本位とし淨土の『三部經』を參考して開立せし聖淨過渡の一宗教たるに過ぎず然り而して此の寓宗時代を脱し名實共に獨立の淨土教たらしめしものを法然上人の淨土宗なりとす。

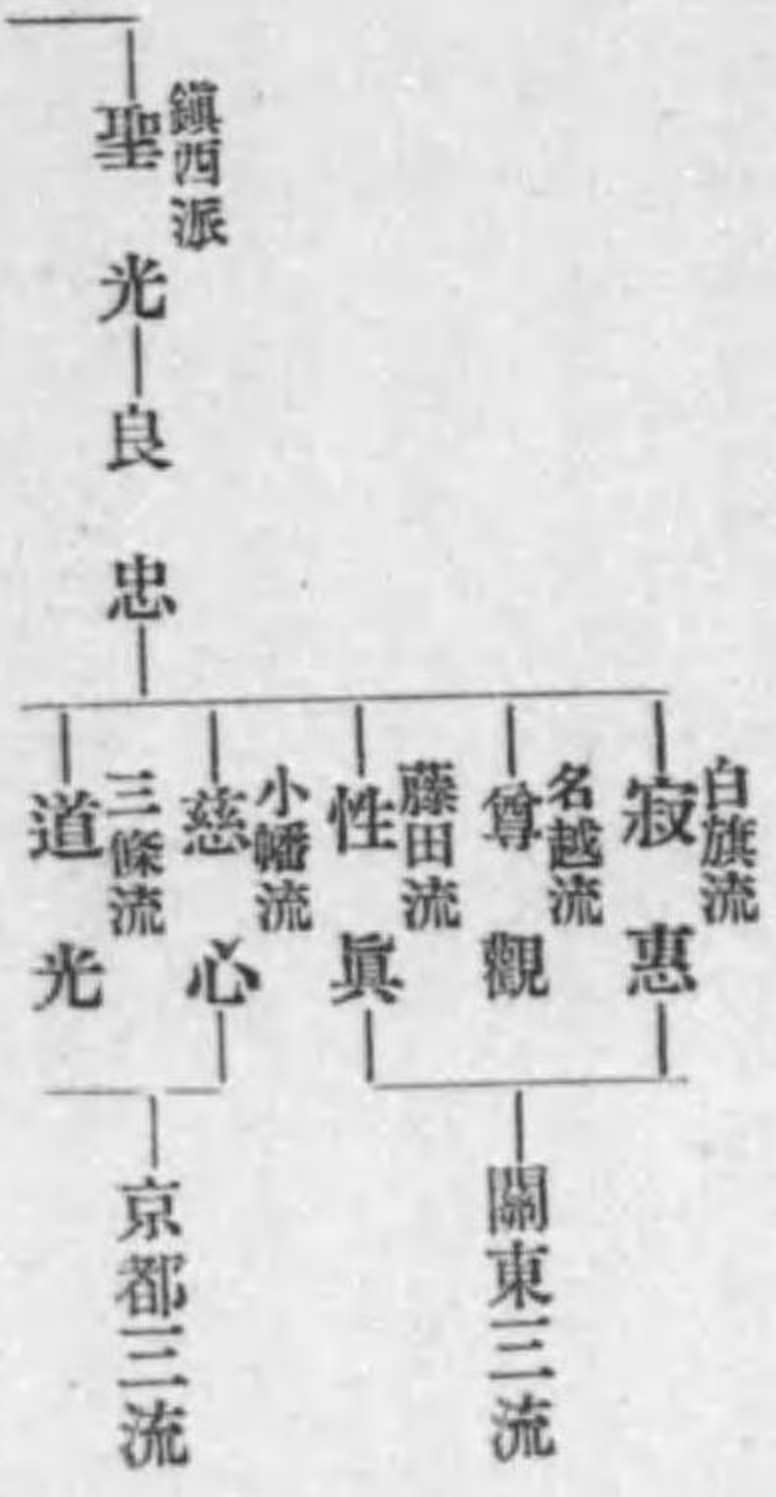
六

法然上人初め比叡山に在つて、慈眼房寂空の下源信僧都の『往生要集』を講讀せらるゝや、師範と所見を異にす。『往生要集』に於いて善導大師の教法に接せし以上天台止觀的の解釋は到底上人の志願を満足すべくもあらず。此に煩悶憂惱已まざりしものありし結果、黒谷報恩藏の參籠となり遂に『觀經散善義』の華文に接し、初めて淨土宗の開立となる。時に高倉天皇の承安五年四月なり。此に於いて乎轉じて淨土教の獨立運動となる。上人立教の意趣を宣言して云はく、「われ淨土宗を立つる心は凡夫の報土に生るゝことを示さんがためなり。もし天台に依れば凡夫淨土に生るゝことを許すに似たれども、淨土を判すること淺し、もし法相に依れば淨土を判すること深しと雖、凡夫の往生を許さず諸宗の所談異なりと雖、すべて凡夫報土に生るゝことを許さざるが故に善導の釋義に依つて淨土宗を立つる時、即ち凡夫報土に生るゝ事顯はるゝなり。こゝに人おほく誹謗していはく、かならず宗義を立せずとも念佛往生を勸むべし。今宗義を立つる事はただこれ勝他の爲なるべし。吾等凡夫生るゝ事を得ば應身應土なりとも足ぬべし。

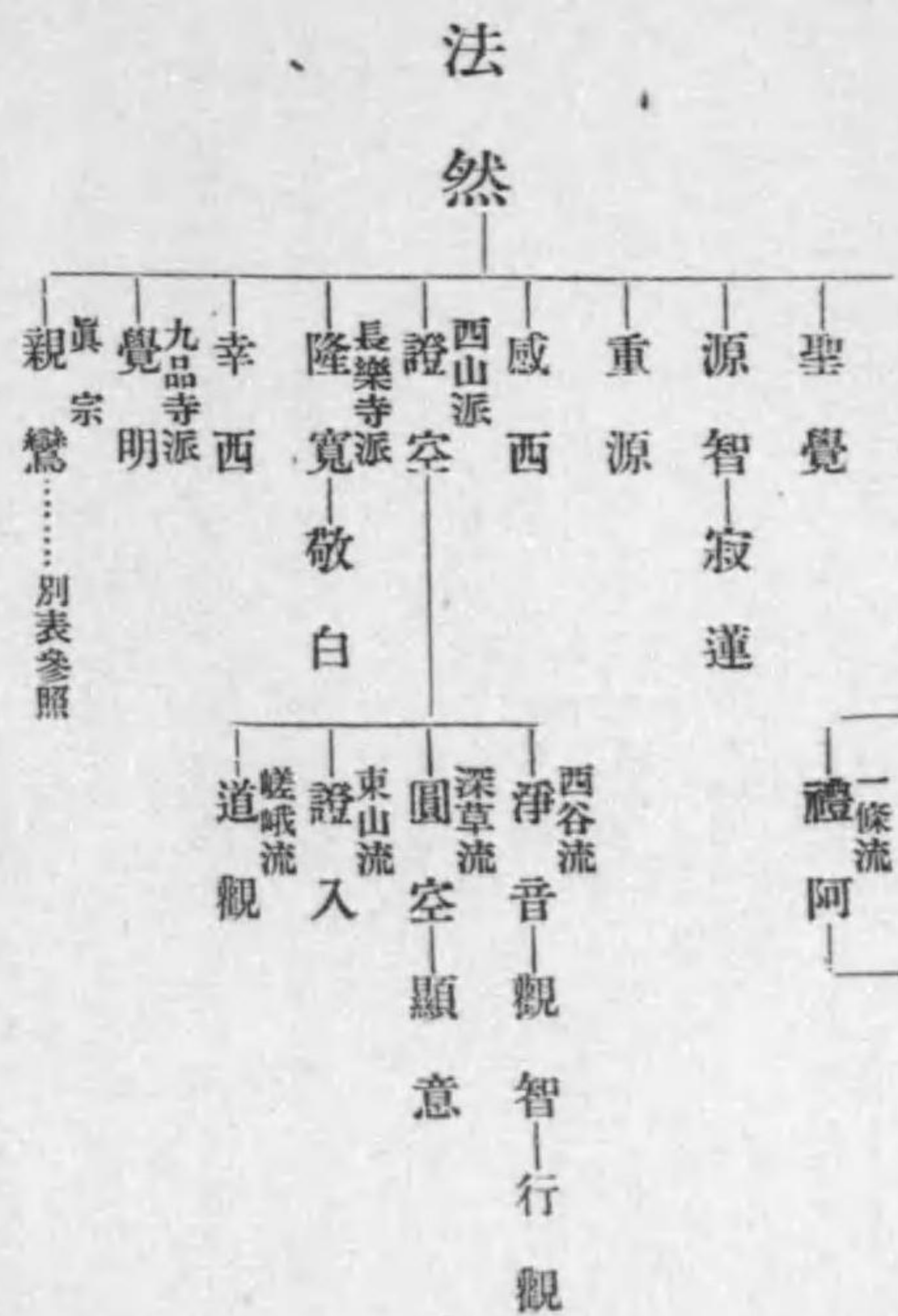
何ぞ強ちに報身報土の義を立つるやと。この義一往ことはりなるに似たれども再往をいへばその義を知らざるが故なり。もし別の宗を立せずば凡夫報土に生する義もかくれ本願の不思議もあらはれがたきなり。然れば善導和尚の釋義にまかせて、かく報身報土の義を立す。これまたく勝他のためにあらずとぞ。建元九年檀越九條兼實公の請に依り『選擇本願念佛集』を著作す。實に淨土立教の根本聖典たり。當時叡岳天台の學佛道場として榮ゆるあり、南都佛教又復興の氣運に際し來れり。此の際に當つて上人の教法主張が教界社會を通じ領解せらるゝに至りしは大原談義に始まる。即ち文治二年秋、比叡山延曆寺座主顯眞主催の下に、南北の碩學を會同す。參集せるもの三百餘人と註せらるゝ中、比叡山の頭目たる顯眞座主を初め、東塔竹林房靜嚴法印、安居院聖覺法印、南都教學の領袖たる笠置の解脱房貞慶、東大寺大勸進俊乘房重源、三井寺長吏公胤、光明山の明遍等蓋し其雄なるもの殆んど當代佛教の俊傑を網羅せり。その結果、南都側を除く殆んど上人の教法に服し、殊に比叡山の如き今や座主以下多く上人の弟子となれり。善

慧房證空・勢觀房源智・聖光房辨長・覺明房長西・長樂寺隆寛・成覺房幸西・安居院聖覺・善信房親鸞等その最もなるものとす。南都側は流石に新氣運に充し事とて容易に膝を上人の前に屈せず。笠置山の解脫上人・梅尾山の明慧上人等即ち是れ。されば上人立教の反動として見るべき二事件あり。即ち内は上人門弟の多く天台出身なりし結果習俗容易に脱せず動もすれば宗義安心の上に台教の臭味を用いんとするあり。是れ黒谷門下の異義紛々門流の分裂せし所以なり。外は歴史上空前の事とて浄土教の獨立到底承認する處とならず上人入滅の前後に互つて解脫上人の彈劾明惠上人の抗議ありし所以なり。蓋し浄土教の對外難は多く上人の謂ゆる正明浄土教と傍明浄土教との衝突より來れるものゝ如し。是れを道練善導大師の時代に見るも又法然上人の當時に見るも皆然らざるなし。正明を以て傍明を見るの可なるも傍明を以て正明を見んは即ち未だし。偏見誤解の興る固より其所なり。然り而して黒谷門下の分裂は應て浄土眞宗を生み對外難をして對内難に轉せしめし淵因なりとす。

黒谷門下の異義として數ふべきもの多種ありと雖二類往生を主張せる聖光の鎮西派一類往生を主張せる善慧の西山派一念義を鼓吹せる幸西の一流諸行本願義を主張せる覺明の九品寺流諸行非本願義を主張せる隆寛の長樂寺流等を最とす。就中鎮西・西山の二派最も顯はる。鎮西派は九州善導寺より起つて勢觀房源智の主宰せる洛東知恩寺の一派を併合し弟子良忠を得て鎌倉に光明寺を開き、その門流に關東の三流京都の三流を生じて基礎漸く堅し。西山派は洛西善峰寺に起つて又四派を開き、淨音の西谷流隆信の深草流并び榮ゆるに至れり。右黒谷一門の流派を表示するに左の如し。



浄土教史の概要



第二章 七祖選取の標準

親鸞聖人は淨土眞宗を開立せらるゝに當り、七祖を選取せられしも古來印度支那及び日本に於いて淨土教を興隆せられしもの鈔からず。印度に馬鳴菩薩あり

『大乘起信論』を著はし、卷末修行信心分に於いて西方願生を勸む。又堅慧菩薩あり『大乘究竟實性論』を著はして西方を願生す。支那に蘆山の慧遠法師あり白蓮社を開いて道俗と共に念佛を修し、蘆山流の一派を開く。又天台智者大師あり『摩訶止觀』『觀無量壽佛經疏』『十疑論』等を著はして西方の往生を願ふ。又迦才法師あり『淨土論』を著はして西方往生を勸む。又懷感禪師あり。善導大師に師事して『群疑論』を著はして淨業を修す。又元曉法師あり『遊心安樂道』『阿彌陀經疏』等を著はして往生を勸む。又慈愍三藏あり。遠く印度に渡つて彌陀法を傳へ、歸來『淨土慈悲集』を作つて慈愍流の一派を開かるゝあり。其他慈恩・法照・少康・元照律師等あり。何れも書を作つて西方を勸む。若し其れ日本に來つては聖德太子既に西方を願生せらるゝあり。奈良朝三論に智光・禮光あり。智光に『淨土論註』の著あり。法相に行基及び昌海あり。昌海は『西方念佛集』を著はし共に念佛を勸む。尋いて平安朝に入り三論に永觀・珍海あり。永觀は『往生十因』『往生講式』を著はし、珍海は『決定往生集』『菩提心集』を作つて西方

七祖選取の標準

九十三

を勧め鎌倉時代にかけて法相に良遍・明遍あり。良遍は『念佛往生決心記』『善導大意』を著はして西方往生を願へり。其他挙げ来れば枚舉に遑あらず。されど選んで以て淨土の祖師に數へざりしは蓋し我祖深慮の存するところなり。抑も淨土の祖師に推すには左の三要件を具せざるべからざればなり。

一 弘願眞宗義を弘通すべき著書の存すべき事。

二 宗義の發揮あるべき事。

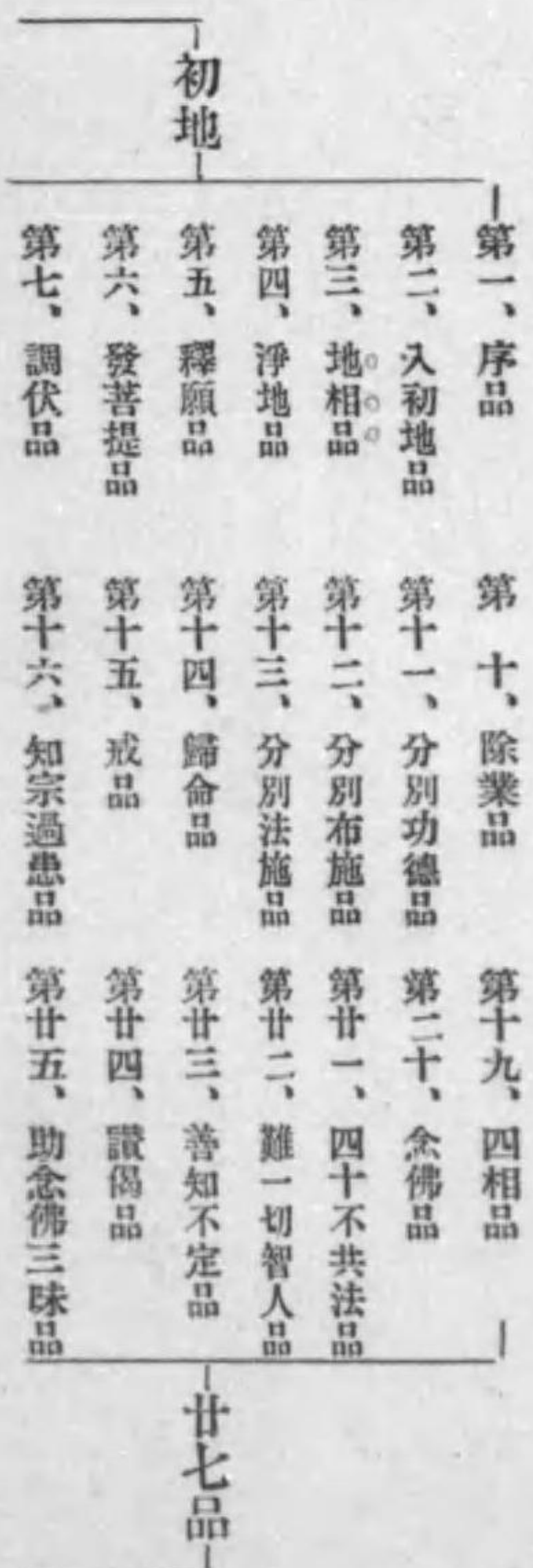
三 安心起行の純一なるべき事。

翻て以上列擧せし淨土の人師を見るに偶著書の存するあるも或は宗義の發揮を缺き若くは安心起行の純一に於て缺くる處あり。然り而して如上三要件を具備するものに至つては多く得て求むべからざるなり。此に於て七祖選取の慧眼益讚仰すべく七祖の眞價又知るべきなり。即ち龍樹は『易行品』を作つて淨土を勧め難行易行の教判を立て、宗義の眞髓を發揮す。又「人能く是の佛の無量力功德を念せは即時必定に入る是の故に我れ常に念す」と説いて信仰の純一を

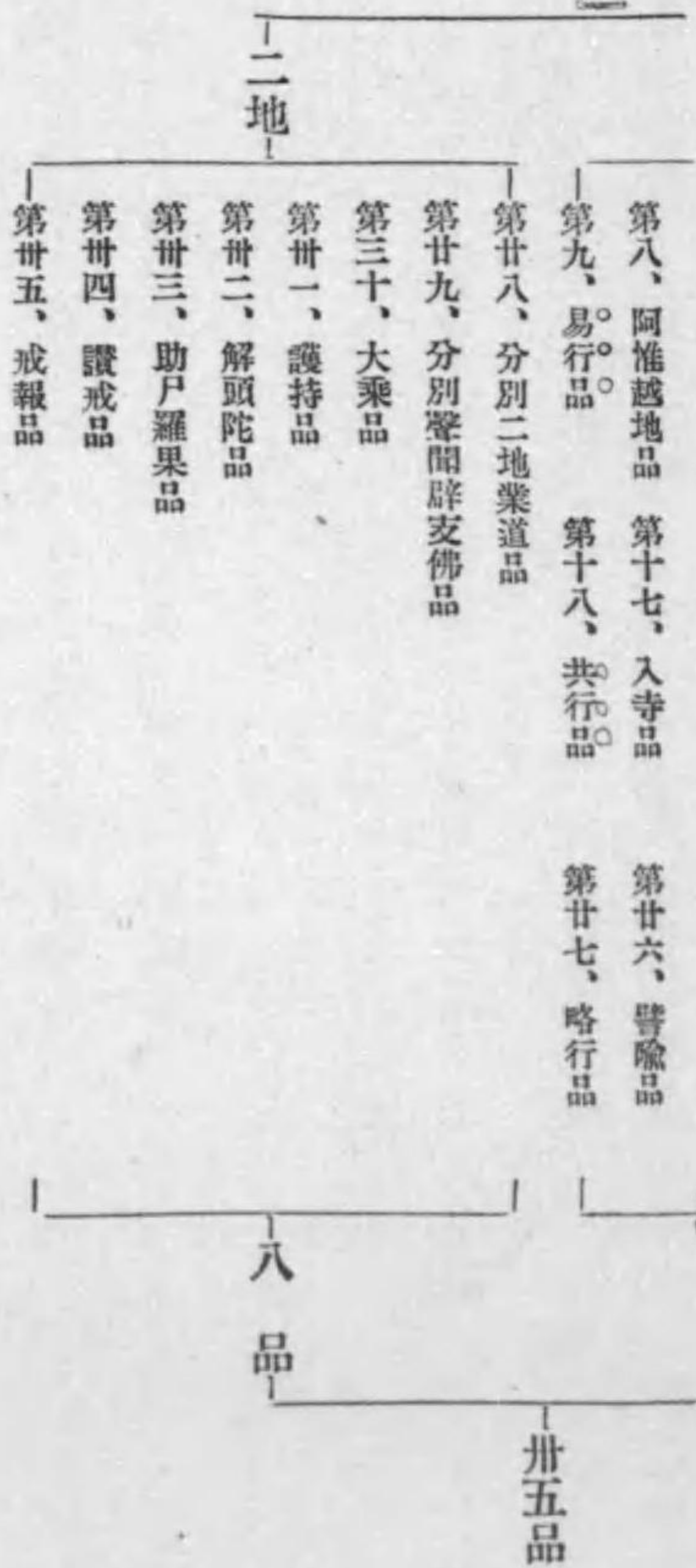
表白せり。世親は『淨土論』を作り一心五念の法門を發揮し「世尊我一心に盡十方無礙光如來に歸命し安樂國に願生せん」と云へり。曇鸞は『往生論註』『讚阿彌陀佛偈』を作り往相還相回向の他力による義を宣揚し如實修行相應の信念を述べり。道綽禪師は『安樂集』を著はし聖道淨土の教判を設けて宗義を顯揚して念佛諸行を褒貶せり。善導大師は五部九卷を撰して頓漸二教正雜二行の判を施設し要門を捨て弘願の一法を勧めり。源信僧都は『往生要集』を作りて他力本願を勧め報化二土を判じて報土往生を願生し「往生之業念佛爲本」と云へり。法然上人は『選擇集』を作つて選擇本願念佛の眞義を發揮し偏へに西方往生を願生せらる。著書宗義安心の確實なるもの七祖を措いて他なし。我祖の是れを選取し依つて以て立教開宗の基礎を確立し「三國の祖師各一宗を興行す愚禿勸むるところ更に私なし」と宣ひ教權主義を絶叫せられしもの所以あり。

第三章 十住毘婆娑論と十二禮

龍樹菩薩の『易行品』を概観するに先づ『十住毘婆娑論』の性質を一瞥すべき要あり。『十住毘婆娑論』は『華嚴經』の十地品を釋せるものにして十七卷三十五品より成り、東晋の安帝元興八年鳩摩羅什譯にかゝる。されど現存せる者は初地、二地に止まり、三地以下は當初より傳らず。十地は即ち大乘の菩薩が初地より十地に至る修行の歷程を明せるものなり。初地釋二十七品、二地釋八品あり。十地釋を此に十住と云ふは菩薩の因果五十二位即ち十信、十住等の十住釋にあらず。『十地論』と同意義の十住なり。元來地に生成住持の四義あるを以て、十地を一に十住と呼べり。今初地、二地の内容を示すに左の如し。



『十住毘婆娑論』



右表に見る如く『易行品』は即ち初地釋の第九品に當る。淨土教を説きしもの外に地相品共行品等あり。さて『易行品』一部は由序と正説とより成る。由序には開卷「問曰是阿惟越致菩薩」以下にして即ち「阿惟越致に至るものは諸の難行を行して久ふして乃ち得べし。若し諸佛の所説にして易行道あり疾く阿惟越致に至る方便あらば願くは是れを説け」と云へり。正説とは「佛法有無量

門如世間道有難有易陸路步行則苦水道乘船則樂菩薩道亦如是」以下にしてこの中自ら四章あり。初めに難易の二道を判別し後に易行道の解説をなす。然り而して廣く易行の法門を説く中十方十佛章に於いて初めに十方十佛の易行を説き更に阿彌陀佛等諸佛諸菩薩の易行を明せり。後者に於て彌陀易行と諸佛易行とを比對し「阿彌陀佛本願如是若人念我稱名自歸即入必定得阿耨多羅三藐三菩提是故應憶念」と云へり。かくて阿彌陀佛の本願即ち四十八願の中第十八願の中第十八念佛往生の願を宣揚し偈を説いて佛徳を讃仰す。即ち左の如し。



この難行易行の釋は龍樹の一代佛教に對する教判として且つ淨土教義に對する一創見として最も重要なものゝ一に屬す。然り而して諸佛易行と彌陀易行

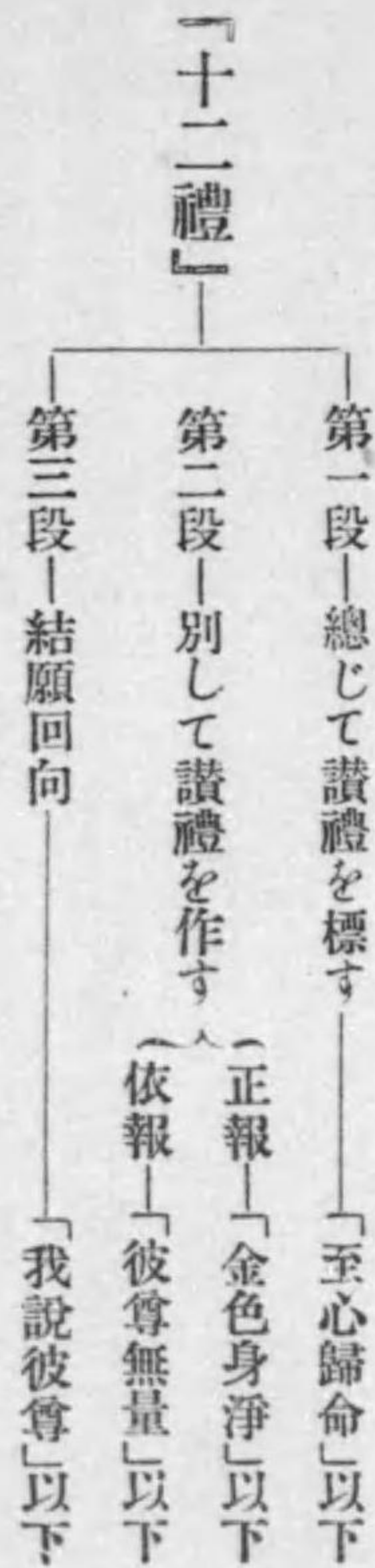
との相違に至つては種々あるべしと雖その主要なる點は諸佛易行の初地不退に止まるに反して彌陀易行の往生成佛なる如き且つ後者に稱名不退の本願あつて龍樹自身の回向發願ある如きは獨り彌陀易行の勝徳を示すのみならず龍樹の本意此にある事を示すものに外ならず。然るに彌陀章の如き百七佛章と餘佛章との中間に在り別に簡別廢立の文字なきを以て動もすれば今章の獨尊たるを許さず。法然上人の如き現に「傍明往生論」に數へられし嫌われば看る者深く留意すべきなり。

さて「易行品」一部の要旨を顯はせる彌陀章は正しく「無量壽經」を承けしものなること炳然たり。「阿彌陀佛の本願」と云ひ「念我稱名」と云ひ「無量壽經」以外に見るべからず。即ち龍樹は「華嚴經」の釋に於いて「無量壽經」の意味を詮顯したるものなるべく是れ當時に於いて最も得策なる方法たりしものと思はる。當時は有無の邪見到る處に瀾漫し簡易直截なる彌陀法の如き容易に發表し得べくもあらず。されば「華嚴經」十地品に寄せて彌陀法を紹介し併せて自己

の信仰を表白するをもつて得策となす。因みに『華嚴經』の淨土教義は世親の『淨土論』並に堅慧の『寶性論』とも多少の關係あれば一言すべし。『華嚴經』は廣大深遠の法門なりと雖要約すれば信解行證の四に盡く中別して遊心法界の旨を明せる證を以て至要となす。入法界品の一品即ち是れなり。入法界品は年少の求道沙門善財童子が出離得脱を求むべく文殊菩薩に始まり、逐次五十三の善知識を歴詢し普賢菩薩に終れり。普賢は善財童子に誨ゆるに「願我臨欲命終時除一功諸障礙面見彼佛阿彌陀即得往生安樂刹我既往生彼國已現前成就此大願」と西方願生を勸め自己も又願生せんと云へり。『華嚴經』の主要たる入法界品に於いて彌陀法を説くものは是れ一經の歸趣又彌陀法を出でざることを意味せずんばあらず。かゝる適切なる『華嚴經』を捕へて即ち彌陀法を宣説するは教界内外に互り誠に適切有利なるものありしや論なし。

『十住毘婆娑論』の外淨土教を説きしもの『智度論』あり『十二禮偈』あり。『智度論』は東晋安帝義熙元年鳩摩羅什の譯にして一百卷あり。『十二禮』の名

は支那の佛書目録等に其目を見ず。また譯者たる禪那曇多三藏の事蹟も僧傳に記する處なし。されば動もすれば本書の著者に就ては疑なしとせず。『眞宗教典志』には隋の闍那曇多三藏にはあらざるかと云へり。闍那曇多三藏の傳は『續高僧傳』第二卷に出づ。さて『十二禮』は内題下に「別譯龍樹菩薩讚禮」とあれば或は『易行品』の彌陀章の偈文を別譯したるにあらざるかと云ふ説あるも彼此の間大に意義を異にするものあり遽かに是非すべからず。一部三段より成る。第一段は總じて讚禮を標し第二段は別して讚禮を作し彌陀の依正二報の功德を禮拜し讚嘆す。第三段は結願回向なり即ち左の如し。



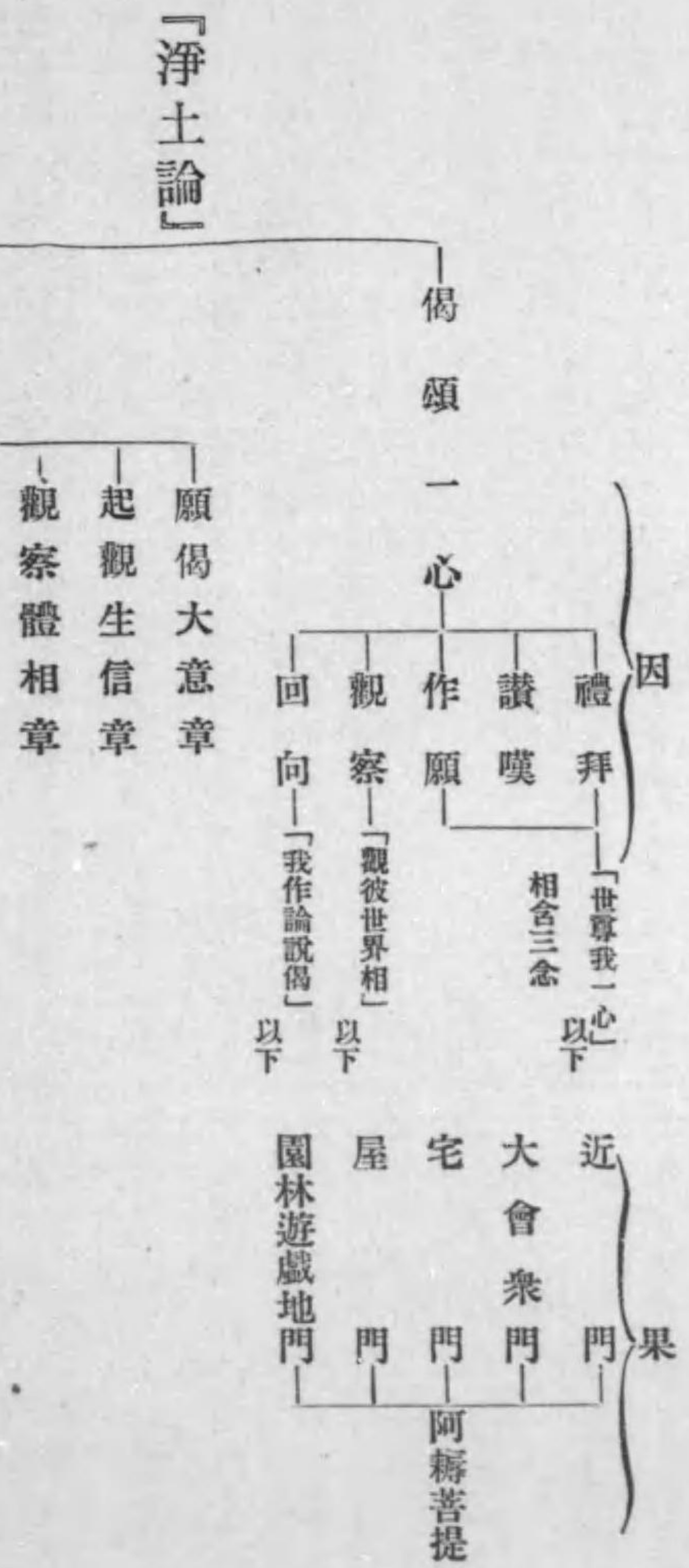
第四章 淨土論

「淨土論」は一に「無量壽經優婆塞持舍願生偈」と云ふ。世親菩薩の著にして北魏永安二年菩提流支の譯に成り。古來三經通申の論として重要せらる。一部始終偈頌と長行とより成る。一論の大意は廣大無礙の一心を顯すにある中偈頌は先づ一心歸命てふ著者自督の安心を述べ三部修多羅に依つて西方願生の偈を作る所以を説き「觀彼世界相」より以下極樂國土の依正二報の莊嚴を讚嘆し又「我作論說偈」以下發願廻向の旨を明せり。而して「世尊我一心歸命盡十方無碍光如來願生安樂國」の四句に於いて自ら禮拜讚嘆作願の三念を含む。「我依修多羅眞實功德相說願偈總持與佛教相應」の四句は承上起下の文なり。「觀彼世界相」以下は觀察を説き「我作論說偈願見彌陀佛普共諸衆生願生安樂國」の四句に於いて回向を述べ。即ち一心の安心に自ら五念の起行ある所以にして是れを一心所具の五念と云ふ。然り而して觀察門即ち「觀彼世界相」以下の二十行に於いて極樂淨土の依正二報の莊嚴を明す中細別するに二十九種莊嚴あり。依報十七種と正報十二種即佛八種菩薩四種是なり。かゝる殊勝の淨土を嘆へ依て以て一

心歸命の所以を述べ「故我願生彼國阿彌陀佛國」と云へり。

長行は總じて十章あり。第一願偈大意章は願生偈の大綱を述べし處にして淨土の依正莊嚴を觀し往生淨土の信心を明す。即ち「觀彼安樂世界」は淨土の依報十七種の莊嚴を觀じ「見阿彌陀佛」は同じく正報の莊嚴を觀す。茲に觀又は見と云ふは如來の本願力を心に浮べ見る信心を指す。第二起觀生信心章は一心の安心より顯はるゝ起行の五念を指すものにして「云何觀云何生信心」と云へるもの正しく其の出據なり。即ち願偈大意章の觀見を承けて「云何觀」と標し「願生安樂」を承けて「云何生信心」と云ひしなり。第三觀察體相章は所觀の三種莊嚴を詳説し。第四淨入願心章は其三種莊嚴の元と法藏菩薩の願心より生ぜること明し五念門中別して觀察を明す。第五善巧攝化第六離菩提第七願菩提第八名義攝對の四章は利他回向の相を述べ。即ち五念門中別して回向を明す。第九願事成就章は淨土に願生する事業の成就と云へる意味にして第二起觀生信心より第八名義攝對章までに明す處の五念行を指す。然り而して其成就する所以

は正しく一心歸命に在り。この一心歸命の信心に依つて五念行あり。茲に初めて往生の業事成辨するなり。第十利行満足章は業事成辨すべき因の五念が果に至つて成就するを明す。謂ゆる果とは無上菩提の證なれども是れを演繹すれば五功德となる。即ち五念の因に依つて得る五功德の果なり。是れを圖示するに左の如し。



右の如く『淨土論』一部偈頌長行を通じて是れを要するに一心・五念・五功德の七字に結歸すべし。而して一心五念は因にして五功德は果なり。又一心五念の中、一心は安心にして五念は起行後續なり。一心の安心が躋て三業に顯はるゝを五念と名く。而して此の一心五念の淵源を尋ぬるに正しく『無量壽經』の十八願文に出づ。即ち三心十念と云へる三心を堅に合すれば一心歸命となり又十念を横に開けば五念となる。されば一心安心五念報謝の理炳然たり。この一心五念の因に依つて五功德即ち歸すれば無上菩提の證を得べし。五功德とは即ち近

門大會衆門宅門屋門園林遊戯地門是れなり。されば偈頌は一心を主とし、長行は五念五功德を旨とすれども、歸する處は行者歸命の一心に由來せざるなし。是れを『淨土論』の梗概となす。印度にあつては嚮きに馬鳴の『起信論』あり、龍樹の『易行品』あり、共に淨土を勸むと雖、著書の一部に於いて論述せしに過ぎず。未だ世親の如く單行本として著述せしものあるを見ず。是れ『淨土論』の特徴として見るべきなり。

世親菩薩は『俱舍論』『唯識論』『十地論』等の著者として、印度佛敎史上馬鳴・龍樹と共に敎界の偉傑たり。その敎理は支那に兩三回に互り譯出せられたり。即ち『十地論』は北魏の菩提流支に依り、『攝大乘論釋』は陳の眞諦に依り、『俱舍論』及び『唯識論』は唐の玄奘に依り傳譯せらる。時恰も隋唐敎學の最も盛なりし時代に當り、忽ち地論宗攝論宗俱舍宗唯識法相宗となつて普及せり。然るに『十地論』『俱舍論』は且らく措く『攝大乘論釋』『唯識論』の著者としての世親と『淨土論』著者としての世親との間には思想上動もすれば矛盾撞着を免れず。

是れ支那淨土敎史上紛亂を見し所以なり。されど世親の往生思想に就ては『淨土論』の内題「無量壽經優婆提舍願生偈」てふ文字並に「世尊我一心歸命盡十方無碍光如來」の文、又「故我願生彼阿彌陀佛國普共諸衆生往生安樂國」等の文字是れを證して餘りあり。世親豈に自己を欺かんや。(十三、十二、ニモリ、モ)

第五章 往生論註と讚彌陀偈

『往生論註』は曇鸞大師の正しく世親菩薩を傳承せる淨土法門なり。是れ蘆山の慧遠法師慈愍三藏の印度との間に於ける史實極めて明瞭を缺けるものあるに比し大に特筆せざるべからざるものに屬す。『往生論註』を解説するに當り、一言せざるべからざるは著者曇鸞大師の態度なり。世親菩薩は大乘有宗の人にして、頼耶緣起の主唱者なり。然るに曇鸞大師は四論の講説を擱きて本願他力に歸すと雖、その學轍は正しく大乘空宗の先達にして諸法皆空を唱説せる龍樹菩薩の後繼者なり。空宗と有宗とは絶對に相容れざるものあり。曇鸞大師の『淨土論』

を註釋する豈に容易ならんや。然るに幸にも本師龍樹は西方願生者なり。依つて以て指南を仰がんには「謹案龍樹菩薩十住毘婆娑」と標し又『讚阿彌陀偈』には「本師龍樹摩訶薩」と讚して自己の立場を明白にせらる。されば『往生論註』の一部は「易行品」を以て『淨土論』を解釋せしものと謂つべきなり。即ち先づ『易行品』に依りて難易二道を釋し易行道の下「信佛因緣願生淨土」を以て易行の體を定め、「無量壽經優婆塞蓋上行之極致不退之風航者也」を以て易行の旨を示さる。又「觀佛本願力」を解するに散心口稱の念佛を説ける『易行品』彌陀章の文を以てせらるゝ如き即ち是れなり。

さて『往生論註』上下二卷あり。上卷に於いて『淨土論』の偈頌を註し下卷に於いて長行を釋す。即ち上卷には偈頌二十九種の莊嚴を釋して「佛本所以起此莊嚴清淨功德」と標し如來淨土の因果一として法藏菩薩の願力所成ならざるなきを顯はし。下卷には一心歸命の安心より表はるゝ五念起行を説き其第五の廻向門に於いて往相と還相との二廻向ある事を示しこの二種廻向の佛力他力に由

る旨を述べて「然覈求其本阿彌陀如來爲增上緣」と云へり。而して佛力他力を開顯するに第十八、第十一、第二十二の三願を依用す。第十八願は往生の因にして信と行なり。第十一願は其の信と行との因に依つて往生する順次の證果なり。この信行因果即ち往相なり、第二十二願は自ら佛果を證得せしより起す慈悲の妙用にして即ち還相なり、二者共に本願力回向なる深義を説いて「後學者聞他力可乘當生信心勿自局分也」と云へり。

『讚阿彌陀佛偈』は其名の示すが如く一部始終阿彌陀佛の徳を讚嘆せり。就中二あり。一には『無量壽經』に依つて讚嘆し二には龍樹菩薩を擧げて別嘆す。總じて一百九十五行の偈文あるも主として彌陀の依正二報の莊嚴を讚嘆す。然り而して「本師龍樹摩訶薩」等と標して別嘆する所以は釋尊滅後印度に於ける淨土門の先達にして且つ自己の所屬たる空宗の祖師たりし關係より平生豫ねて私淑せしを以てなり。今龍樹を嘆するも要は彌陀の依正莊嚴を讚嘆するに歸す。是れ『讚阿彌陀偈』と題せし所以なり。又鸞師には別に安樂淨土に就て三界攝

不の要義を問對せし『略論安樂淨土義』と稱する著作あり。尤も是に就いて元曉は『遊心安樂道』に羅什の作なるべしと云ひ、安樂律院の光謙も偽作なるべしと云へるも容易に是非すべからざるが如し。

第六章 安樂集

『安樂集』の性質に就ては古來疑義あり。或は觀經釋義の一部分なりと云ひ或は玄義釋なりとも云へり。著者道綽禪師時代の人なりと思はるゝ迦才は其『淨土論』に「近代有綽禪師撰安樂集一卷雖廣引衆經略申道理其文義參雜章品混淆後之讀之者亦躊躇未決今乃搜檢群籍修引道理勤爲九章令文義區分品目殊位使覽之者宛如掌中耳」と主張し本願寺派の先哲道粹又『安樂集正錯錄』を著はして「綽師生平以講觀經爲業至老不倦豈無採其綱要而備之講科者耶但自以爲免苑冊子而未出示之師歿後門人輯綴遺文章草成卷流落人間故有錯簡」と評し共に『安樂集』の不合理なるを論證し殊に道粹師の如き禪師の觀經講述を後門人の筆録

せしものなれば固より完全を期すべからず。されど訂正宜しきを得ば稍完全に近きものを得べしとて、自己先づ是れを試む。又石泉僧叙は『三帖和讃觀海編』に『安樂集』を以て『觀經』の玄義釋とし他に文義釋のありしならんと云へり。文義釋の存在せしや否やは且らく措くも『安樂集』を以て『觀經』の玄義釋なりと云へるは異論なき處なり。蓋し『觀無量壽經』は隋唐教學の盛なりし際諸宗の間に愛玩せられ淨影寺の慧遠天台智者大師嘉祥寺の吉藏等何れも疏を製して講述す。されど由來聖道門側の作品なれば淨土門の見解と相容れず。加ふるに陳の眞諦三藏攝論宗を開くに至つて『觀經』の十念往生を以て唯願無行の別時意となすあり。嚮きに魏の曇鸞大師に依つて隆興せられし淨土門は根底より動搖を來し命運將に危きに至れり。『安樂集』は此際に當つて出來し著作なればその『觀經』との關係又知るべきなり。但し禪師は從容迫らざる態度を以て『觀經』に據り傍ら諸經に準じて最も婉曲に解釋せらる。されば釋義の施設概ね通佛敎の義に準せしを以て動もすれば弘願他力義たるや疑はしきの嫌あり。是れ

準通立別の釋義として、禪師慧眼の存する處なり。

さて『安樂集』上下二卷總して十二大門より成る。第一大門は『觀經』の教興宗旨を明かし、第二大門は淨土往生の因たる菩提心を明かし、異見邪執を排して念佛を勸む。三番の料簡ある中、第二番は破邪にして即ち九番の破會あり。禪師の最も心血を注がれし處即ち左の如し。

- 第一 破妄計大乘無相意見偏執
- 第二 會通菩薩愛見大悲
- 第三 破擊心外無法
- 第四 破願生穢國不願往生淨土
- 第五 破若生淨土多喜著樂
- 第六 破求生淨土非是小乘
- 第七 破求生兜率勸不歸淨土
- 第八 會通若求生十方淨土不如歸西

第九 料簡別時之意

第三大門は難易二道を説き、難行の此土入證に對して、易行の彼土往生を明かし、聖淨二門の教判を立て、『大集經』『大經』『觀經』『小經』に依りて一代佛教に二門の通塞ある事を示し、第四大門は淨土門中萬行と念佛との優劣を簡擇して念佛三昧の要を明し、第五大門は淨土願生者の修行相を明し、第六大門は願取西方爲凡の教意を示し、第七大門は執相拘礙と無相脫縛とを對比し、偏に西方に歸すべきを勸め、第八大門は所説の經及び能説の佛に就いて、西方勸歸の旨を明かし、第九大門は苦樂善惡壽命長短の對比に依つて修入の益を示し、第十大門は十方諸佛等皆西方勸歸の旨を述べ、第十一大門は修入の勝縁を明かし、第十二大門は『十往生經』を引いて西方往生を勸め、上來の所叙を結成せり。是れを要するに第一大門は『觀經』の名に依つて一經の玄義を明かし、第二大門以下は觀經の要義を釋し、第十二大門に於いて總勸す。

就中破邪顯正に互つて本集一部の要義を略述せんに、破邪方面は前に云へる九

番破會なり。第一大乘無相の計以下は三論等の主張より來りしものなるべく系統明瞭を缺く第四第五番は彼の慧布禪師一味の徒に依つて主張せられし「方土雖淨非吾所願若使十二劫蓮華中受樂何如三塗極苦處救衆生也」の類なるべし。第七番は兜率上生の思想にして支那に於ける彌勒教は西晉時代より續々譯出せらる。即ち竺法護譯の『彌勒成佛經』一卷羅什譯の『彌勒下生經』『彌勒大成佛經』各一卷菩提流支の『彌勒菩薩所問經論』九卷等の譯出あり。是れを章疏にしては天台智者大師の『彌勒成佛經疏』五卷『彌勒上生經疏』一卷嘉祥大師の『彌勒經遊意』一卷等あり。されど未だ外難として一部の勢力を占むるに至らず現に天台大師の如き西方願生者たりし形迹あり。嘉祥又『觀經疏』に於いて兩者の優劣を論じ西方往生のために氣焰を吐けり。その西方往生と對立して外難となるに至りしは攝論宗法相宗の勃興に始まりしものゝ如し。第八番は十方隨願往生の思想なり。この思想の淵源は『佛說灌頂隨願往生十方淨土經』にあるものゝ如く西晉の懷帝永嘉年中帛尸梨三藏の譯にかゝる。彼の魏の孝文

帝が曇鸞大師に對し「十方佛國淨土なり何に依つてか西にある」と借問せられしを見れば當時此の説の既に一部の主張として存在せしや疑ひなし。第九番は別時意論なり。こは『大乘阿毘達磨論』中の攝大乘品の別行本なる『攝大乘論』より來る。印度にあつて既に世親・無性の釋論あり。支那にあつては北魏の普泰元年佛陀扇多の譯に尋いで陳の天嘉四年眞諦の譯出づるに及んで攝論宗開かれ門弟の註疏研究勃興せしと共に猛烈なる勢を以て傳播せり。該論に別時意を説いて『無量壽經』に説くが如しと云ふに至つて淨土教の危機旦夕に迫りし概あり。道綽禪師の會通最も妥當を極め謂ゆる準通立例の釋軌を以つて能く是れを解決せらる。

又顯正的方面に就いて集一部の要旨を見るに先づ一代佛教に對して聖道淨土の教判を創見せられしこと是なり。由來諸師の觀經釋に誤解ある一に淨土義の特殊なるを知らざるに職由せずんばあらず。されば聖淨二門の教判は對外策として最も有力にして且つ淨土門の本領を發揮するに必要なりとす。聖道門は難

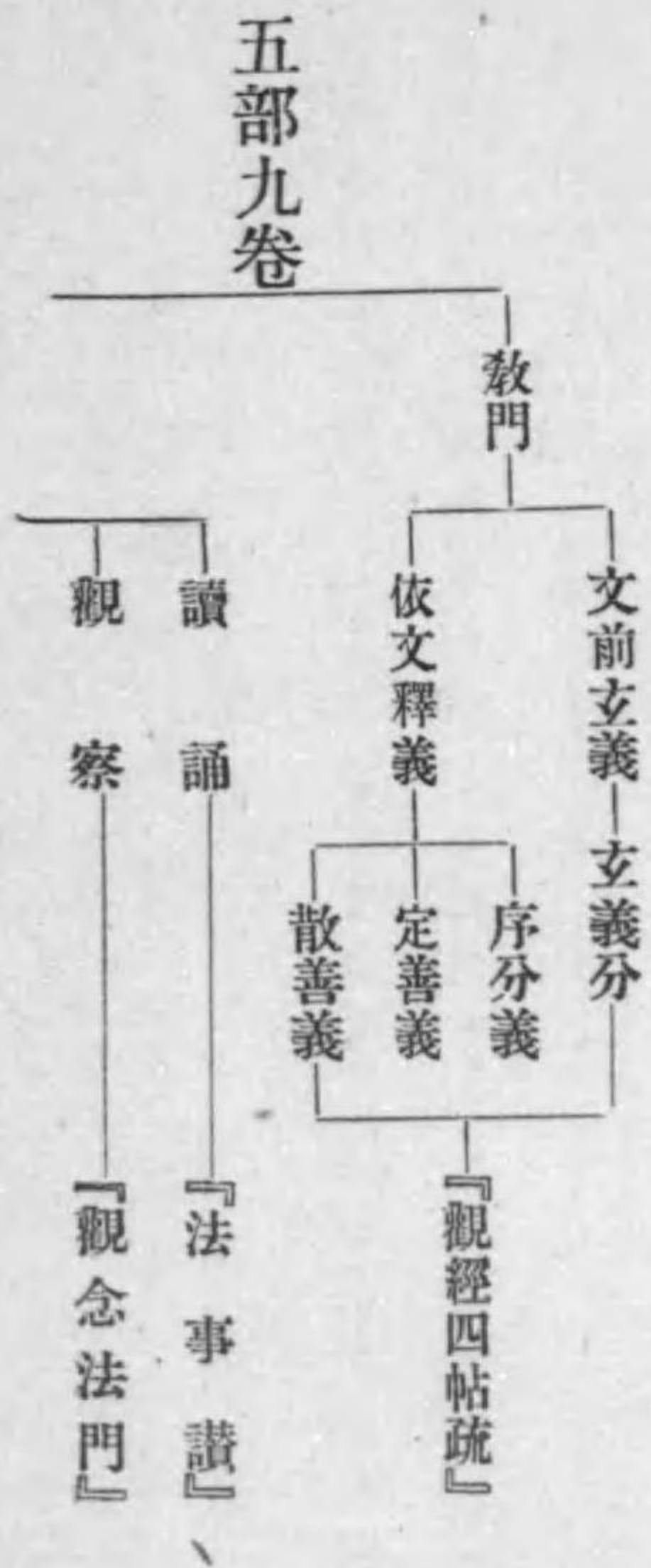
行にして末法の今日證果を開くこと難し。何となれば釋尊の出世に後るゝこと遠く且つ理深く解微なるに由る。即ち『大集月藏經』に「若欲於斯進趣勝果難階唯
有淨土一門可以情恠趣入」と云へる文を引いて、末代の衆生は聖道の修行成し難く唯往生淨土の一門のみ通入すべきを尅論せらる。蓋し禪師の時代は正像の二
時既に過ぎて末法濁世に入れり。末法濁世に入ては縦し衆生發心修行するも機
既に虛假雜毒なれば一人も佛果に達するものあらじ。幸に唯淨土一門のみあつ
て末法濁世の時暴風駛雨の如き起惡造罪の身にして涅槃の證果を得るなり。嚮
きに龍樹の難易二道判ありと雖固と是れ菩薩の修行門に約せしものなれば彼土
此土に通じ分齋得て明瞭ならず。今道練出でゝ時機と利益との兩面より一代佛
教を判じ聖淨二門を立てたまふ功勳又大なりと謂ふべし。然り而して淨土門に
は如何なる行法を以て往生の業因となすやと云ふに諸善萬行を棄てゝ念佛一行
に歸すべく如實の信心を勧めたまふものは是れ『安樂集』一部の梗概なりとす。

第七章 五部九卷

善導大師の著述として傳へらるゝもの尠からざるも眞偽の疑はしきものなきに
あらず。左に是れを一括して列擧すべし。

- 『觀經四帖疏』 四卷
- 『法事讚』 二卷
- 『觀念法門』 一卷
- 『往生禮讚』 一卷
- 『般舟讚』 一卷
- 『彌陀經義』 百卷
- 『經路修行偈』 一卷
- 『臨終要訣』 一卷
- 『大乘布薩法』 一卷

就中『觀經四帖疏』『法事讚』『觀念法門』『往生禮讚』『般舟讚』を部帙卷數の上より五部九卷と稱し『七祖聖教』に收めらる。『彌陀經義』の事は定善義に云へるを見れば眞選として往時存在せしものなるべく『念佛鏡』は道鏡なるものとの合著と稱せらるゝも署名に善道とあり。且つ内容も善導大師の著作としては疑はしき嫌あり。餘地は片篇にして『樂邦文類』に收めらる。五部九卷には教門と行門とあり。即ち『四帖疏』は教門に屬し、餘他の四部は行門に屬せり。又前者は安心にして、後者は起行なり。その性質と併せて表示するに左の如し。



「行門」— 禮 拜

讚嘆供養

「往生禮讚」

「般舟讚」

『觀經四帖疏』はその名の如く玄義分序分義定善義散善義各一卷より成る。玄義分は『觀經』の玄談にして序題門釋名門宗旨門說人門定散門和會門得忍門の七門より成る。第一序題門は未來世一切凡夫のために韋提希の致請に依り、他力教の興起を述べ、二尊二教の密意を説き、第二釋名門は『觀經』の題目を解し、第三宗旨門は『觀經』に觀佛三昧と念佛三昧との兩宗あることを述べ、第四說人門は『觀經』は佛の自説なる事を叙し、第五定散門は定善致請散善自開の旨を明かし、第六和會門は六科を分別し、前四科は淨影寺慧遠等の諸師が『觀經』の九品を判して大乘聖人なりと云へるを破り、第五科は別時意を會通し、第六科は二乘種不生の難を解決し、第七得忍門は韋提希の得益分齊を判して畢る。凡そ『觀經』一部にかゝる古今の疑難を楷定して餘蘊なし。序分義は一經の文科を五門に分ち逐次解説す。序分の中に二序七縁と三序六縁との別あり。二序とは證信序と發

起序となり。六縁とは發起序中の七科即ち化前序を外にして禁父縁・禁母縁・厭苦縁・欣淨縁・散善顯行縁・定善示觀縁是れなり。三序六縁とは化前序を前二序に加へて三序を數ふ。化前序は即ち一代諸教を擧げて『觀經』の前方便とし發起序は阿闍世太子の逆害を指す等既に是れを云へり。

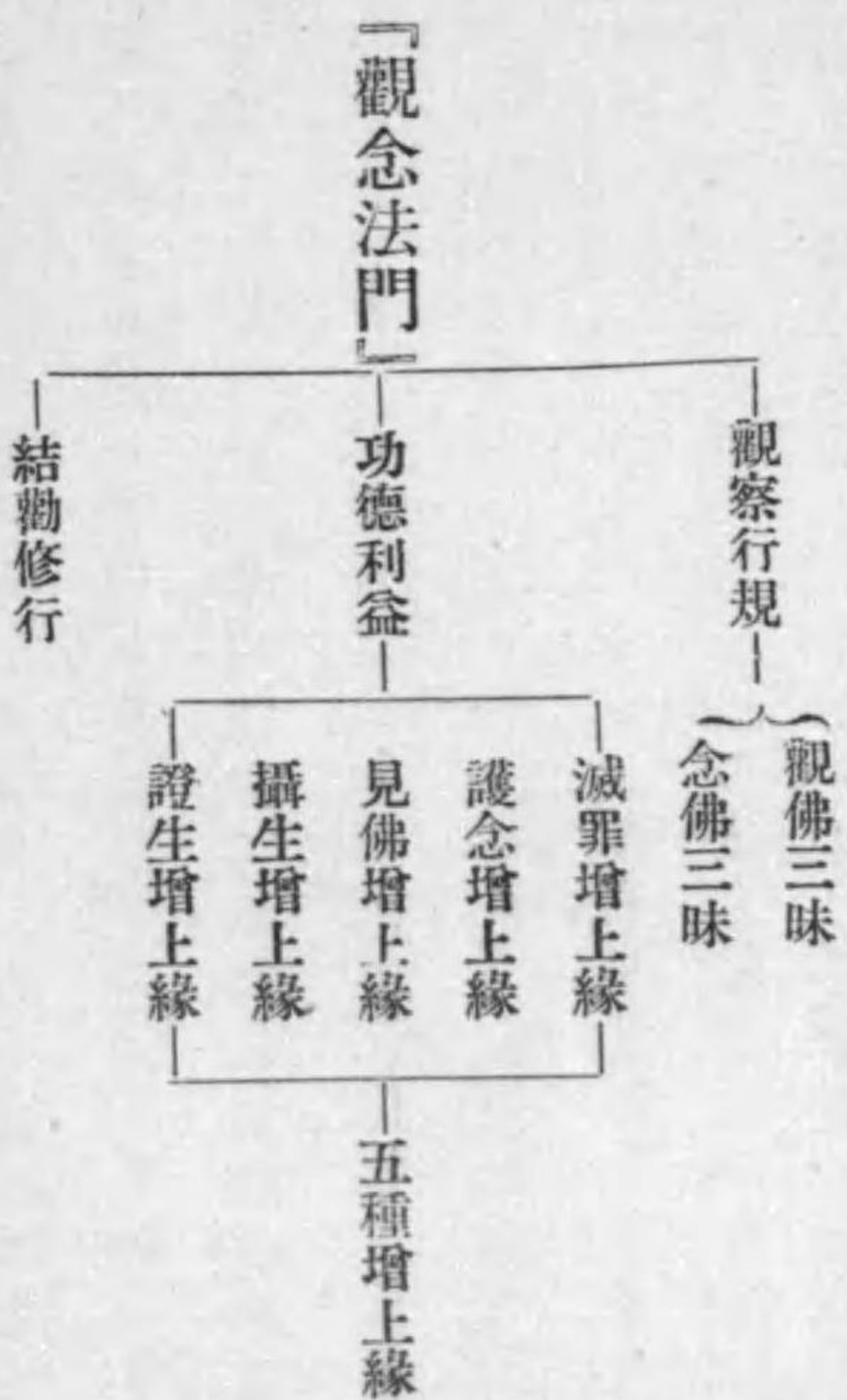
定善義は正宗分中の定善十三觀を解説す。嚮きに『觀無量壽經』の下に説きしが如し。散善義は同じく正宗分中の散善九品往生を解説し併せて得益流通者闍の三分を解釋す。散善九品の内容又嚮きに説くが如し。由來『四帖疏』は教門即ち教理解釋の全體にして善導大師の慧眼達識疑つて此に存すと雖別して玄義分は對外的施設の法門として見るべきなり。我が淨土教にかゝる疑難は嚮きに道綽禪師に依つて會通せられしも進通立別の釋は動もすれば當時に徹底せざりしやの憾みあり。加之攝論宗の勢力尙ほ失墜せざるものあり。是れ重ねて善導大師の古今楷定ありし所以なり。

餘地の四部を『法事讚』『觀念法門』『往生禮讚』『般舟讚』と次第するは是れ善

導大師の發揮にかゝる五正行即ち讀誦・觀察・禮拜・讚嘆・供養の順序に依る。獨り稱名を缺けるは五部九卷に通じ又『四帖疏』の中心思想の一心專念彌陀名號に存する故なり。

『法事讚』は具さに轉經行道願往生淨土法事讚又は安樂行道轉經願往生淨土法事讚と稱し略して西方淨土法事讚と云ふ。一部二卷あり。上卷には前方便を明かし下卷には正しく轉經を明す。即ち『阿彌陀經』を轉經讀誦して別時法事の行儀作法を示す。謂ゆる讀誦正行なり。下卷にあつては一經を十七節に分ち一節を終る毎に「願往生願往生」と稱して偈頌を述べり。

『觀念法門』は具さに「觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門」と云ふ。まづ『觀經』に依つて觀佛三昧の法を明かし『般舟經』に依つて念佛三昧の法を明かし更に淨土の『三部經』並に『般舟經』『淨土三昧經』の六部往生經に依つて念佛三昧の利益並に六種増上縁の義を明す。即ち本書一部觀察の行規と觀察に依つて得べき功德利益を明せるを以て觀察正行なり。その内容組織左の如し。



『往生禮讚』は具さに「勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讚偈」と云ふ。一部分つて三となす。一に總して要義を叙し、二に正しく禮讚を明かし、三に勝益を勸む。即ち晝夜六時に禮拜する日課の勤式作法を明すを以て禮拜正行なり。先づ「第一に謹んで『大經』の釋迦及び十方諸佛の彌陀十二光名を讚嘆して稱禮念すれば定んで彼國に生せんと勸むるに依り、十九拜日没の時に當つ

て禮す」と説いて日没禮讚を述べ。第二に「謹んで『大經』に依り要文を採集し以て禮讚偈となし、廿四拜初夜の時に當つて禮す」と説いて初夜禮讚を述べ。第三に「謹んで龍樹菩薩の『願往生禮讚偈』に依り、十六拜中夜の時に當つて禮す」と説いて中夜禮讚を述べ。第四に「謹んで天親菩薩の『願往生禮讚偈』に依り、二十拜後夜の時に當つて禮す」と説いて後夜禮讚を述べ。第五に「謹んで彦琮法師の『願往生禮讚偈』に依り、二十一拜晨朝の時に當つて禮す」と説いて晨朝禮讚を述べ。第六に「謹んで沙門善導の『願往生禮讚偈』十六觀に依つて作り、二十拜午時に當つて禮す」と説いて日中禮讚を述べ。是れを表示するに左の如し。



—日中禮讚—『觀無量壽經』

—三、結勸ニ勝益—

善導大師は『觀無量壽經』本位の生涯なりしだけ嚮きに『四帖疏』を講說せられしと共に今又『往生禮讚』に於いて『觀無量壽經』を禮讚せられしなり。『般舟讚』又具さに「依觀經等明般舟三昧行道往生讚」と云ふ。専ら『大經』『觀經』に依つて極樂國土の三種莊嚴及び九品往生を讚嘆せらる。即ち讚嘆供養正行なり。一部を由序・正讚・結勸に分別せられ、正讚の下右の教相を詳述す。

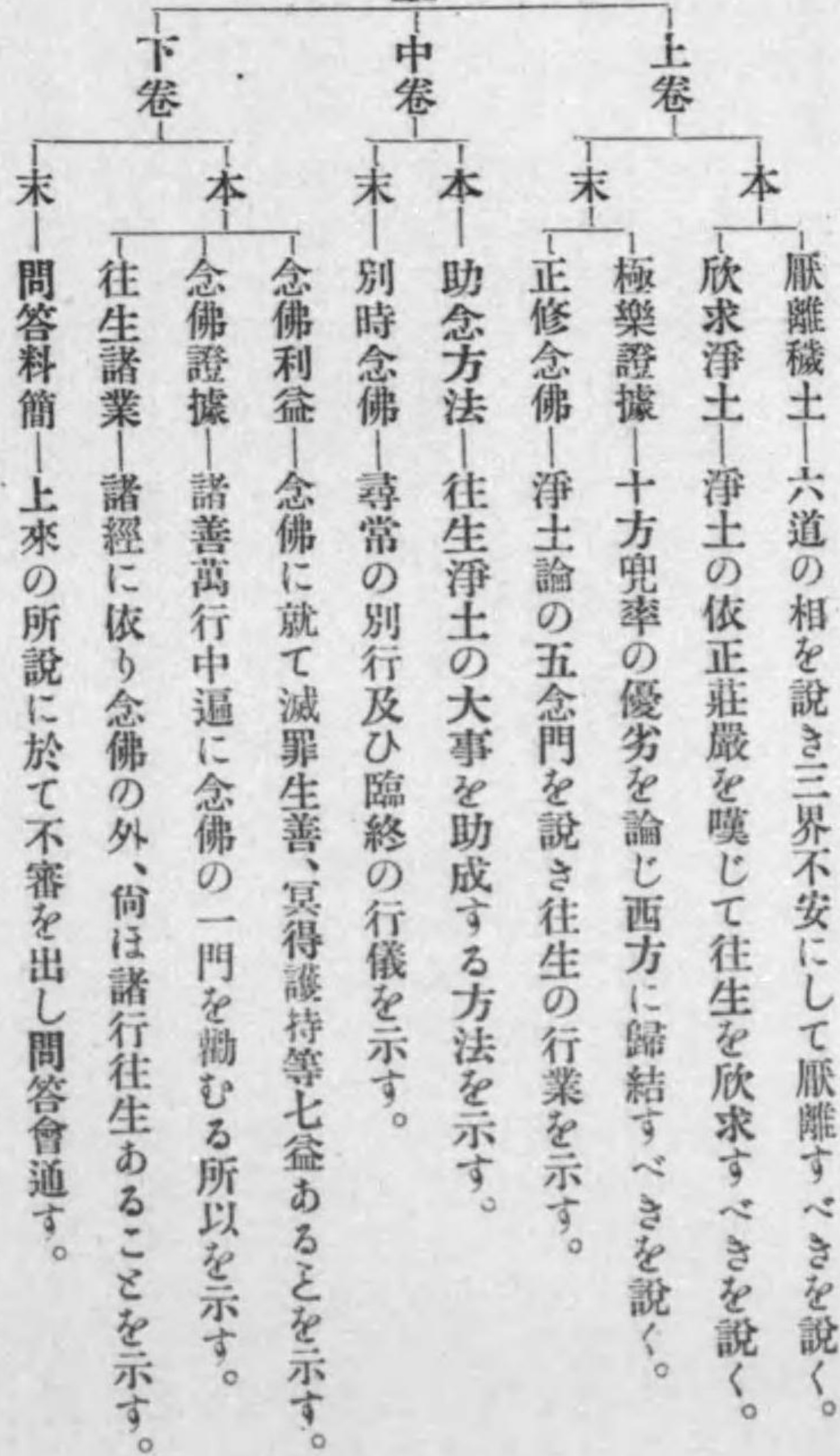
第八章 往生要集

源信僧部の淨土教義に關する著述として「阿彌陀觀心集」「觀心往生論」「觀心略要集」等あれども『往生要集』を以て最もなりとす。是等の著作は天台教義に通曉せるにあらずんば得て解し難し。『阿彌陀觀心集』は阿彌陀の三字を三諦三身三惑に配して一切の諸法盡く此の三字に攝盡すべきを説き『觀心往生論』は一心三觀一念三千を以て四土不二の淨土三身即一の阿彌陀佛を觀すべしとな

す。源信の淨土教義は天台の觀法に立脚して念佛を説明せし觀あり。されば法然上人が「餘宗の人淨土に其志あらんには先づ『往生要集』を以て是れを教ゆべし」と宣ひ自身も又是れを先達として淨土門に入られしが如く餘宗に准通せるものあるだけ宗典としては聊か難解の嫌なきにあらず。法然上人の特に本集註釋に意を用ひられし誠に成以あり。さり乍ら是れを右擧げし餘部に比較せば實際的なる萬々なり。依つて以て源信の淨土教義に於ける代表的著作として見るべき也。

さて『往生要集』は圓融天皇永觀二年十二月の起稿にかゝり翌年即ち寛和元年四月脱稿す。その間實に前後六ヶ月を費せり。本集の成るや當時僧都は其一部を親交ありし大宋國に贈る。台州の周文德その厚意を謝し直ちに是れを天台の國清寺に寄贈せし事跋文に見ゆ。一部三卷なるも本末あるを以つて合して六卷となる。一部始終往生極樂に關する經論を集め往生の要一に念佛にある事を述ぶ。總して十門あり左の如し。

『往生要集』



『往生要集』は天台に立脚して淨土門を解釋せしものなれば頗る難解なり。されば法然上人は曾て師範寂空との間に異論を戦はせらるゝあり。寂空の觀念主義を立するに反し上人は是れを稱名主義の聖教なりと骨張せられし事『勅修御傳』に見ゆ。後學宜しく「予『往生要集』を先達として淨土門に入るなり」

と云はれし法然上人の指南に俟つべきなり。上人が特に『往生要集』の註解に意を用ひられしこと所以ありと謂つべし。

法然上人に『往生要集大綱』『往生要集略料簡』『往生要集證要』の著作あり。就中『往生要集略料簡』には廣・略・要の三義を立て、集一部を解説せり。廣とは本集一部に序・正・流通の三分を立つる中正宗分に十門を分別し初め三門に於いて修行の方便を説き、次の六門に於いて往生の業因を説く。六門の中初め五門は又念佛を説き、後の一門は念佛に對して諸行を説けり。されば往生の業因は念佛のみにあらず。諸行も同じく業因なりと示すを以て廣の義とす。略とは第五助念方法門に方行供具・修行相貌・對治懈怠・止惡修善・懺悔衆罪・對治魔事・總結要行の七事ある中總結要行に七法あり。即ち護三業と菩提心と深心と至誠心と常と念佛と隨願とを往生の要行とす。今要集十門あれども初め三門は修行の方便にして往生の要行にあらざれば取らず。又後の諸門中第四の正修念佛門と第五の助念方法門とは正しく往生の要行なれども餘門は然らざれば取らず正修念佛と助念方

法ごとに就き正修念佛門に五念門を明せる中禮拜・讚嘆・回向門は又要行にあらざれば取らず。作願と觀察とは要行なれば今作願門を取つて大菩提心とし觀察門を取つて念佛とす。次に助念方法の中修行相貌と止惡修善の二法を取つて要行とし修行相貌に三心四修あれども四修中の無間修を要行とすれば是れを取つて常とし三心を取つて深心・至誠心・隨願の三とす。又止惡修善に就き持戒不犯等の方法ある中止惡を取つて要門とし是れを護三業とす。この護三業と菩提心と深心と至誠心と常と念佛と隨願の七法に就き略料簡に「總結要行とは即ち此集の肝心決定往生の要法なり。學者更に之れを思擇して其要と非なることを識れ」と云へり。是れを略の義とす。要とは稱名念佛の一行なり。正修念佛門に「若し相好を観するに堪へざるもの有らば一心に稱念すべし」の文又念佛證據門に「一切の善業各利益ありて往生を得何故に唯だ念佛の一行を勸むるや答ふ今念佛を勸むるも是れ餘の種々妙行を遮するにあらず云云等の文の如き一として歸趣を稱名念佛に措かざるなし。是れを要の義とす。然り而して稱名念佛の一行を修

するに専修と名け然らざるものを雜修と稱し此の專雜の得失を因として報化二士の果を辨立せしもの實に源信僧都の教義上に於ける發揮なりとす。

第九章 選擇本願念佛集

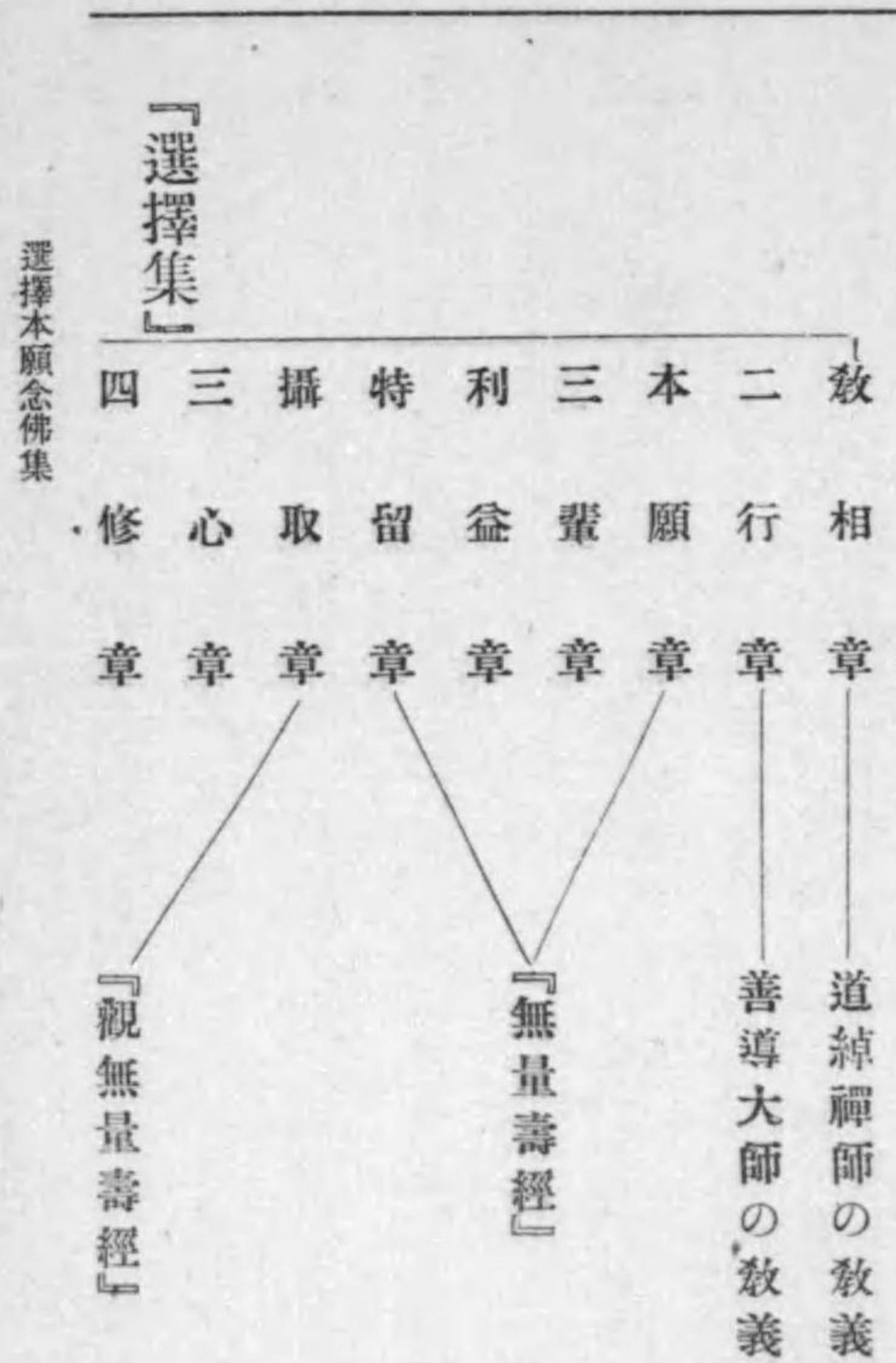
法念上人源空の著作又少からざるも立教開宗の根本聖典としては『選擇集』の外なし。後白河天皇の建久九年三月十六日關白九條兼實公の請に依つて製作せらる。堯惠の『選擇集私集鈔』並に我が覺如宗主の『拾遺古德傳』には元久元年七十二歳の作とあるも疑はし。

上人本集を製作せらるゝに當り人を簡ひて座右に就かしめ眞觀先づ法門の義を談じ證空經釋の要文を引き安樂筆を執りしと傳ふるも執筆者は安樂房遵西一人に限らざりしものゝ如く眞觀房感西も又その一人なりしに似たり。親本は現に京都寺町蘆山寺に秘藏せらる。

『選擇集』具さに『選擇本願念佛集』と云ふ。一部二卷十六章より成る。第一

教相章に於ては道綽禪師に依り、聖淨二門の教相を判じ、第二二行章に於ては善導大師に依り、正雜二行の得失を判じ、專修專念の宗義を彰はし、選擇本願念佛の意義を闡明す。第三本願章以下の十四章は廣く淨土の三部經に就いて選擇本願及び其の利益を明す。即ち第三本願章に於ては淨土往生の行は選擇本願念佛にあるを説き、第四三輩章に於ては念佛往生の機に就いて三輩の別あるを示し、第五念佛利益章に於ては念佛の利益を明かし、第六特留章に於ては念佛の一行のみを末代に留めたまふことを示す。以上總て『無量壽經』に依る。第七攝取章に於ては彌陀の光明は念佛の衆生を攝取したまふを説き、第八三心章に於ては念佛の行者に至誠心・深心・回向發願心の三心を具すべきを示し、第九四修章に於ては念佛行者の起行に恭敬・無餘修・無間修・長時修の四修あるを明かし、第十化讚章に於ては彌陀の化佛が念佛の行者を讚嘆すべきを示し、第十一讚嘆章に於ては釋尊が餘行に對し念佛の一法を讚嘆せらるゝを明かし、第十二付屬章に於ては釋尊が念佛の一法のみを阿難に付屬せられしを説けり。以上總べて『觀無量壽經』に依る。第

十三、善根章に於ては少善根福德の因縁を以て淨土に往生するを得ず、往生の行は多善根多福德の念佛にあるを説き、第十四證誠章に於ては十方の諸佛が念佛の行者を讚嘆せるを示し、第十五護念章に於ては十方諸佛の念佛行者を護念せらるゝを明かし、第十六付屬章に於ては釋尊が舍利弗に對し名號を付屬せられし因縁を明す。以上總して『阿彌陀經』に依る。是れを圖示するに左の如し。



選擇本願念佛集

付	護	證	善	付	讚	化
屬	念	誠	根	屬	嘆	讚
章	章	章	章	章	章	章

『阿彌陀經』

『選擇集』は「偏依善導一師」と云へるが如く専ら善導大師の『觀經疏』を受けられしものなり。即ち善導一代の功勳たる雜行を捨て、正行に歸せしむるにあり。盡し選擇とは取捨の義にして又廢立を意味す。廢立とは教に就けば聖道を捨て、淨土に歸するを云ひ、行に就けば雜行を捨て、正行に歸するを云ふ。第一教相章は教の廢立を明かし、第二、三行章は行の廢立を示し、以て本集一部の大綱を詮表す。第三本願章以下は右の證權を『三經』に求められしものに外ならず。

題は一部の總票なり。選擇本願念佛の意義又一部の要旨を示して餘りあり。蓋し嚮きに道綽禪師聖淨二門の判を立て、捨聖歸淨の範を示せしと雖淨土門中又要門あり。禪師の意固より弘願念佛にあるべきも、動もすれば誤解を招くの恐れなしとせず。殊に念佛の如き既に諸師所立の念佛あるに於てをや。されば善導大師出で、淨土の念佛は自性清淨の唯識法身觀にあらず。彌陀本願の念佛なることを顯彰せられし所以なり。然るに本願の念佛と云ふも、尙ほ疑なきを得じ。地藏の本願あり、藥師の本願あつて動もすれば諸佛の本願に亂するの嫌あり。此に於いて上人更に選擇攝取の本願念佛なることを宣明せられ、簡非的に立教の意趣を闡明せられしものなり。

『選擇集』の成るや淨土教の獨立を非として起ちしものを三井園城寺の長吏公胤僧正なりとす。『淨土決疑鈔』三卷の著是なり。又入寂の翌年即ち建曆二年十一月、尾の明惠上人『選擇集中推邪輪』三卷を著はし、翌三年六月又『推邪輪莊嚴記』一卷を作つて『選擇集』の所立を破す。尋いで文應元年七月日蓮上人立

『正安國論』並に『守護國家論』一卷を作つて破斥するところあり。是れ等に就ては淨土宗内にあつて各辨駁書あり。枚擧するに遑あらず。淨土立教史の一部として後學の研究すべき問題なり。

第十章 差別點と一致點

七祖は親鸞聖人に依つて「三國の祖師各一宗を興行す、愚禿すゝむるところ更に私なし」と云はれし如く、始終同一轍に出で、其間差別なしと雖、併も其の時代と境遇とに依り、又若干法門の施設に左右なかるべからず。是れ七祖一轍の外に差別門を語る所以なり。

先づ最初に注意すべきは『淨土三部經』に對する据り是れなり。龍樹・世親・曇鸞の三師は『大經』据りにして道綽・善導・源信・法然の四師は『觀經』据りなりしに似たり。蓋し是れ主として對外的關係の有無に職由せずんばあらず。全然異宗教に對しては佛教として弘願法を提唱するも差支なしと雖、等しく佛教として、

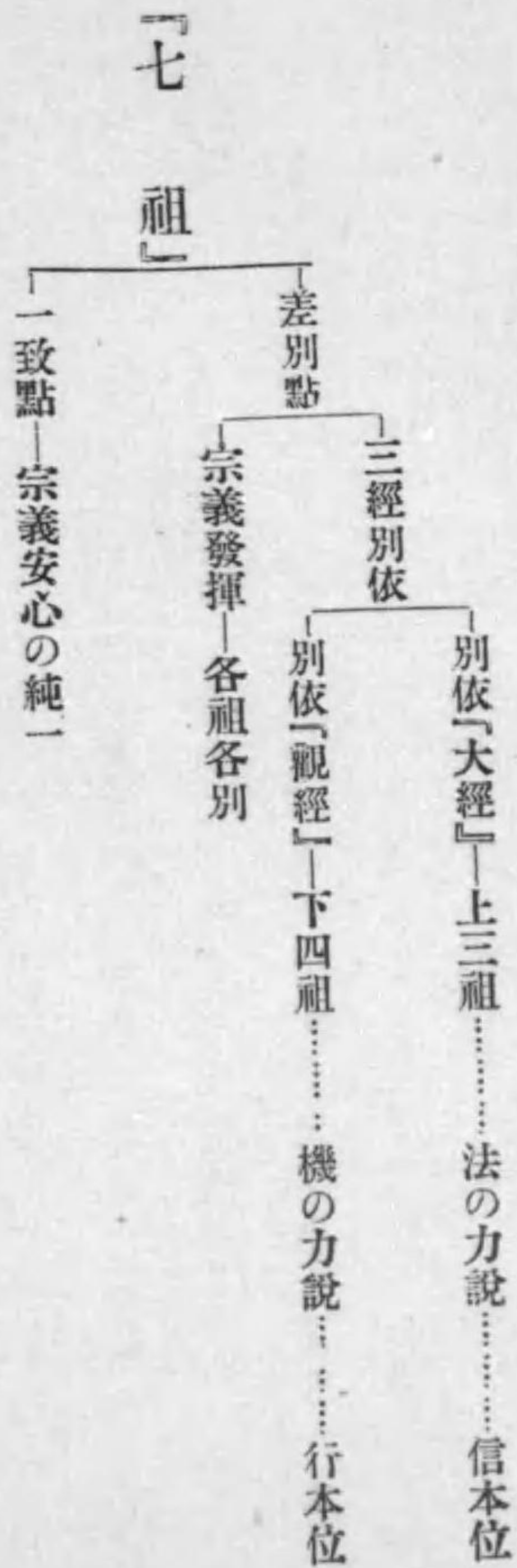
外聖道に對する場合は要門より弘願に轉入せしむるてふ要あり。上三祖は前者に屬し、下四祖は後者に屬すべきなり。即ち龍樹の時代は聖淨對立の世にあらず。外道跋扈して有無の邪見紛々たりし時なり。かゝる世に佛教内部に設けられたる衆生誘引法の如きは又要なし。寧ろ露堂々として弘願法の特色を發揮するに加かず。是れ龍樹の『華嚴經』に寄せしと雖、その弘願法の説明に至つては『大經』に依りし所以なり。世親に於ける場合も又是れと異ならず。曇鸞の時代も又淨土門内の對抗なし。漢土既に蘆山の念佛ありと雖、固より慧遠の一生と始終して又何等影響の認むべきなし。六朝の教學は將に起らんとして未だ到らず。内外無事にして殊に世親の『淨土論』を解釋せられし關係もあり、即ち『大經』に依憑して興法せられし所以なり。道綽は六朝の釋家何れも『觀經』を釋して謬見あり、即ち彼等を引いて弘願に轉入せしむるの必要上、『觀經』本位にて始終せられしなり。善導に於ける場合又同じ。源信は身天台にあつて深く弘願法を信じ、他を勸化すべき境遇に在れば又『觀經』に依らるゝの便利なるに加かず。

法然の時代は南都北嶺既に若干淨土教の機運を催ふせし際なり。淨土教を獨立せしむべき時代なり。弘願法を徹底せしむべき時代なり。漸を以つて進まざるべからざる時代なり。是れを以つて『觀經』本位に据り三願轉入の如き形式を要せしなり。是れ即ち時代と境遇の關係に依り三經扱ひに左右ありし所以なり。上三祖と下四祖と既に三經に對する据りを異にせる以上その經の教ゆるごころに依り機法何れかに偏重を見るべきは自然の理なり。即ち『大經』は法の眞實を旨とせるだけ上三祖は法實の開闢に努められ、『觀經』は機の眞實を旨とせるだけ下四祖は機實の徹底に努められし觀あり。蓋し機法は一體なり。固より各別にあらずと雖併も又時代の關係に依り兩者その一を特に力説する要あり。『大經』を以て進むべき時代は機より法を主とすべき事情あり。又『觀經』を以て進むべき時代は法より機を先きとすべき理由ありしこと論なし。殊に道綽の時代は正像の二時既に去つて末法の時機に入り謂ゆる時は末代機は下根の世となりしなり。即ち上三祖の法も下四祖の機も各据り經典より來りし施設に外なら

す。

又『大經』の單一弘願法なるに比し『觀經』の誘引法を主とすれば行々相對の法門なり。換言すれば『大經』は直接法にして『觀經』は間接對外法なり。従つて『大經』は信を以て本位とし『觀經』は行を以て本位とす。是れ又移して上三祖の信を以て起ち。下四祖の對外的施設上行を以て始終せられし所以なり。

若し其れ教相そのものに就ては別に宗義の發揮あり。又時代との關係上自己の宗教的識見に依れるものに屬す。即ち龍樹の難易二道世親の一心歸命曇鸞の往還廻向道綽の聖淨二門善導の正雜二行源信の報化二土法然の選擇本願等謂ゆる嚮きに云へる七祖選取の一要件に屬するものは是れなり。又一致點は改めて云ふを須ひず。同じく七祖選取の一要件に屬する宗意安心の純一是れなり。即ち依つて以つて眞宗の祖師と尊崇し相承する所以にして即ち前に云へるが如し。上來の所説を左に表示すべし。



第三編 宗典章鈔の概説

第一章 眞宗史の概要

眞宗具さに浄土眞宗と云ふ。親鸞聖人の黒谷法然上人門下より出で、別立開創せられしものにかゝる。即ち黒谷一門の異議邪執に簡別して眞假分別の大斧を揮ひ、餘他を浄土假宗と判じて、浄土眞宗を開立せられたり。是れ區々たる排他的聲聞の沙汰にあらずして、眞に宗教的識見の問題なりとす。聖人は日野有範の子。初め叡岳天台の學徒として、前後二十年定心を凝らすと、雖識浪頻りに動き未だ出離得脱の志願を満足する能はず。即ち著聞の神佛に祈願を凝らしつゝありし際、會聖覺法印に邂逅して法然上人を紹介せられ、直に其室に投じて弟子となりし

る。時に年二十九歳。承元元年二月三十五歳師範上人の罪に座し、越後國府へ遠流の事あり。國府に留まる五年。建曆元年十一月三十九歳勅免あり。即ち京都に歸り師範上人に謁せんと欲して偶上人の圓寂を聞知す。仍て歩を關東に轉じ常陸の稻田に在る十年。その間元仁元年『教行信證文類』を撰し一宗を開闢せらる。遠近の道俗群をなし化を蒙るもの多し。謂ゆる二十四輩六老僧の如き皆當時の入門者なりしに似たり。特に眞佛房西念佛善性房入西房明法房唯圓房了海顯智性信房等最も名あり。嘉祿二年聖人下野の高田に一字を創し專修寺と稱す。後ち是れを高弟眞佛房に付囑し尋いで顯智に傳ふ。是れ現時伊勢の一身田に在る眞宗高田派專修寺の前身なり。稻田以來下間に在る三年相模の國府津に四年倉田に三年通じて二十有五年を關東に送り貞永元年六十歳の頃京都に向け發足せらる。途次暫く江州木邊に逗留して化導あり。嘉禎元年四月一字を建立す。弟子性信善性又有縁の地として屢々巡錫す。四條天皇特に天神護法錦織之寺の勅額を賜ふ。是れ現時木邊派錦織寺の起源なり。旅程三年を費し漸く歸京

せらる。上人京都に留錫せらるると雖扶風馮翊處々に移住せられ席温ならず。或は著書に或は傳道に晩年を捧ぐ。當時流罪以前の居所たりし月輪殿花園の屋敷を山科に移して一字を建立せらる。後是れを眞佛房に付囑す。順德天皇興隆正法寺の勅額を賜ふ。略して興正寺と稱す。元應二年六月寺基を京都澁谷に移し寺號を改めて佛光寺と云ふ。是れ現時眞宗佛光寺派の前身なり。この時に當つて關東は頗る多事に傾けり。即ち長子慈信房善鸞の聖人より秘密の相傳を受けたりと稱して邪説を傳ふるあり。又宗意安心を誤解せる結果門弟子輩にして不行狀の廉尠からず。延いて念佛停止の沙汰にも及べる事あり。加之新たに日蓮宗の勃興して念佛無間を絶叫するあり。關東京都間の來往頗る頻繁を加へ聖人の消息飛ぶが如きものあり。詳しくは『末燈鈔』『御消息集』等見るべし。聖人の京都時代約三十年間は斯かる多忙の裡に消光せられつゝ併も『教行信證』を除く餘地の著書を製作せらるゝ如き綽々として餘裕あり。且つ努力し且つ讃仰の裡に弘長二年十一月二十八日寂せらる。世壽九十歳なり。

親鸞聖人に四男二女あり。室は玉日姫一人なりしか別に三善爲教の女なるも
 の後室としてありしか將た又此の兩者は同人異名にして聖人越後に流罪の後假
 りに三善爲教の女と稱して關東に下りしものなりしかは史上の疑問に屬す。兎
 に角玉日姫は薙髮して慧信尼と稱し、獨り稻田に止つて聖人の門弟子を統御し法
 義の弘通を助けられしと傳へらる。聖人の示寂に後るゝ一年弘長三年九月二十
 八日七十九歳にして寂す。長男範意、二男善鸞、三男印信、四男道性、長女昌姫、二女嵯
 峨姫、三女彌女と在はす中宗門の歴史に關係あるは慈信房善鸞と彌女の二人なり
 善鸞は聖人の子として長男範意の早世せられし後は當然衣鉢を繼ぐべき人なれ
 ども誤つて邪道に陥り、神子巫女の群に投じて法義を惑亂せしを以て聖人より勘
 當あり。されど善鸞は眞宗教會史には不朽の効績を有す。一たび宗祖の遺跡を
 巡錫せらるゝや、越前山元の郷に足を留め子の淨如に至り一字を建立し道性又此

處に留つて勸化に盡す。是れ現時眞宗山元派證誠寺の由來なり。因みに云ふ。
 道性の息如覺は鯖江に誠照寺を開き、眞宗誠照寺派の端を開く。又大町に如導あ
 り、專照寺を開き現時福井にある中野專照寺派の起源をなす。彌女は初め日野廣
 綱に嫁し覺惠一に宗惠と云ふを生む。程なく廣綱死亡しければ小野宮禪念に再
 嫁し唯善を生む。然るに禪念又歿しければ彌女は薙髮して尼となり、法名覺信と
 稱す。夙に父聖人の勸化を蒙り信法殊に篤し。宗祖滅後子女皆故あつて繼職
 するを得ず。覺信尼即ち覺惠を立てんとしたるも、嚮きに青蓮院に仕へて又自由
 を許さず。されば善鸞の子如信上人なるもの當年三十五歳に在し幼より宗祖の
 膝下に在つて勸化を蒙り信法の念又篤きを以て推して寺務となす。時に弘安三
 年十一月なり。如信上人寺務を領すと雖も多く覺惠に委して身は奥州白河大綱
 の郷に在つて教化に従事す。毎歳十一月には必ず京都に上つて聖人の正忌を營
 むを例とせり。後寺務を從姪即ち覺惠の子宗昭に譲る。覺如上人は是れなり。覺
 如幼にして俱舍唯識天台を學習して令名あり。弘安九年如信上人に謁し親しく

宗義の要訣を受け、又正應元年宗祖常隨の弟子たりし唯圓房の上洛に際し就いて宗義の蘊奥を究む。然り而して其寺務を領するや内唯善の非望を抑へ外各宗林立の間に在つて能く其の不出世の英才を發揮して宗門の基礎を確立せらる。蓋し上人の事業として數ふべきもの三あり。即ち祖傳の撰述と二十四輩の選定及び對外上の宗義發揮是れなり。永仁二年宗祖の三十三回忌に當り『報恩講式』一卷を作り翌年又『親鸞傳繪』二卷を著はす。祖徳の讃仰は上人の偉徳文章と相俟ちて歸依感激に與つて力あり、遺弟の念力を増長せし事跡しとせず。又二十四輩は上人前後二回關東に下り、大綱に如信上人の忌辰を營まれし際、各地に異見の徒あり。動もすれば宗祖の門弟と稱し、宗意安心を惑亂せるものあり。上人即ち門弟二十四人を選び是れを正統正義と定め、依て以て異義邪執を防ぐ。若し其れ對外上の宗義發揮に至つては、會々上人の博學知見を證するものと謂ふべく、蓋し上人の時代は日蓮宗の勃興し、淨土宗又良忠門下英才を得て、宗運大に振起せし際に在り。即ち日蓮宗に對しては『口傳鈔』の開出三身章の如き「出世元意」

の如き何れも其の應酬と見るべく、淨土宗に對しては一に眞宗義の特徵たる聞信一念平生業成の義を力説せらる。又宗義の蘊奥を盡せる西山義の如きは是れを應用し眞宗義の發揮に資して用意怠らず。『願々鈔』に於ける機法一體の如き即ち是れ。何れも上人の嘗て西山鎮西義を研究せられし餘澤ならずんばあらず。その他宗門内部にあつては『口傳鈔』を作つて三代相傳の宗義口訣を顯し、また『改邪鈔』を作つて異義邪執を破斥せられし等効績の炳として千古没すべからざるものあり。上人の高弟に乘專なるものあり。上人を援けて偉功あり。丹波六人部の人初め法眼清範と稱し、禪觀を修せしも後上人の教化を蒙りて弟子となる。郷里に一字を建立し、程經て是れを京都出雲路に移す。毫攝寺と云ふ。後又是れを越前清水頭に移轉す。現今眞宗出雲路派毫攝寺の起源是れなり。乘專又『最須敬重繪詞』を著はして師範上人を傳し師恩に酬ゆ。

三

覺如上人に三子あり。存覺從覺及び一女子是れなり。存覺上人は父に劣らざる學哲なれども恰も善鸞の親鸞聖人に於けるが如く一種の異義者として屢々父の勘當を蒙むる。その此處に至りし所以は學問中毒に基いせしものゝ如し。蓋し上人幼時南都に遊學して興福寺東大寺に性相を習學し北嶺及び三井寺に天台を修め更に阿日房彰空に就いて西山義を究められし如き前半生を他宗他門の學に委す。されば宗意安心を解する動もすれば餘りに通途に偏し妥當を缺くの嫌なしとせず。元享元年三十三歳の時父覺如上人と法義を論じて所見を異にし父子の義絶を見る。されど其の宗義の對外的施設に至つては斷じて他の追從を許さず。内部の教權統一に於てこそ多少の罪過は免れざるべきも外部に對しては効績の没すべからざるものあり。例へば『決智鈔』の製作の如き自ら備後に出陣して日蓮宗の徒と論戰せしものに基因す。是れがため流石の父上人も激賞措かず一時父子の和解なりしとさへ傳へらる。併し折角の學才を懐き乍ら法燈を繼ぐに至らず恰も親鸞聖人の如信上人に於けるが如く今も又覺如上人の孫にし

て存覺上人の弟從覺上人の子なる善如上人俊玄に傳はりしも是非なし。

存覺上人の父上人に斥げらるゝや去つて佛光寺錦織寺に依る。蓋し佛光寺の明光了源及び錦織寺の愚拙等は豫ねて上人に歸依淺からず。極力父子の和親を計り懇情最も努む。特に愚拙の如き法嗣慈空の没するや上人の子綱嚴を請うて嗣子となす。錦織寺慈觀是れなり。上人宗内に容れられざりしと雖その生命は寧ろ他宗他門の間に在り。又法器と謂つべし。上人頗る著作に富む。就中『教行信證六要鈔』『破邪顯正鈔』『決智鈔』及び祖徳を讃仰せる宗祖『嘆徳文』等最も顯はる。後節參看すべし。

さて善如上人より綽如巧如存如上人に至る約一百年間は謂ゆる宗門の暗黒時代にして何等特筆すべき事項なし。この間は禪宗のみ獨り盛んにして佛敎界の大勢は京都鎌倉の五山僧侶に依つて代表せられしに似たり。禪門の盛んなりしだけ矢張り影響を受けしものか『御一代開書』に云へるが如く善如上人綽如上人の時代は威儀修飾を本とせし傾向あり、是れ蓋し宗祖の惡人正機を誤解して

本願にはこり人事を閑却せんとする風潮の反動とも見るべき歟。この衰退せる宗門を救済して光輝を放たしめしものは本願寺八代の宗主蓮如上上人なりとす。蓮如上人の出世は實に旱天に豪雨を得しが如き希望を放てり。

四

蓮如上人の本願寺々務を領せられしは存如上人遷化の時即ち長祿元年四十三歳の時にして正しく宗祖滅後一百九十一年に當る。上人十五歳にして宗門再興の願望を起し教學の研鑽を怠らず。又弟子金森道西を得て導化四方に遍し。文安四年五月東國を遊化し寶徳元年春北國を行化し宗祖の遺跡を巡拜す。寛正元年六月道西の請に依り『正信偈大意』を著はし又消息數通を裁し初めて文書傳道の端を開く。其文章流暢にして剗切人心の機微に觸るゝこと多大にして宗意安心の傳播に資せしもの又大なり。又『領解文』を作つて宗義の證權をなし是れを門徒に讀誦せしめ依て以て宗義惑亂の辨解に備へり。寛正八年正月叡山の

僧徒等上人勸化の興隆を嫉視し大谷の殿堂を破壊す。上人難を大津に避く。是より上人又一定の居處なく應仁の亂興つて京師大に亂るゝや江州堅田に假寓せらる。應仁二年寺務を長子順如上人に委す。蓋し上人宗政の煩を避け布教に専らならんがためなり。是れより河内北國に遊化し三年四月越前吉崎に一字を創し暫く居を留めて奥州北陸の道俗を勸化す。五年三月初夕の勤行として従來の『六時禮讚』を改めて『正信偈和讃』と定めらる。是れ蓋し上人の布教主義より案出せられしものにして信仰普及の一策たりしに似たり。文明六年八月加賀の國守富樫政親故あつて吉崎を攻む。上人即ち海路若州を経て攝津に赴き又河内紀伊大和を巡錫し近畿に及ぶ。是より先き文明元年佛光寺の經豪その寺を弟經譽に譲つて上人に歸參し名を蓮教と改め興正寺を再興す。此の因縁を以て興正寺は永く本願寺末寺たりしが近く明治十九年獨立して別一派を形成するに至る。文明十五年五月法嗣順如上人父に先き立ちて寂す。上人再び法席を繼ぎ第八子實如上人光兼法嗣となる。延徳元年寺務を實如上人に譲り隱退せられしも

道俗勸化に努力せらるゝこと尙は昨の如し。明應二年木邊錦織寺の勝慧上人その徒弟若干を率ひて上人に歸參せらる。是れより錦織寺稍衰運の傾向ありしと傳ふ。越へて明應八年三月二十五日八十歳にして遷化あり。その生涯は頗る多事に互れり。少くとも宗義上に於いて上人の主張と最も關係ある淨土宗には中興の名師と呼ばるる了譽上人聖岡あり。東京小石川に傳通院を創して是に居るその資に曾譽上人聖聰あり。東京芝に増上寺を興して兩々相俟ち關東淨土宗の根本道場として興法に努む。然り而して其主張にかゝる無信單稱の安心は眞宗義に抵觸するところ多く是れ上人に至つて「たすけ玉へ」とは彌陀を信する意味なりと云ふ眞宗獨得の解釋を施されし所以なり。又西山義と混亂せるものと思はるゝ十劫秘事不拜秘事の如きその他一益法門善知識たのみ施物たのみ等の如きあり。蓮師即ち直接若くは文書を以て是れ等の異義を糺訂し又應仁の亂世にありて能く民衆の歸向を導き國家神道に對する道義を振作せられし等偉功没すべからず。管に宗門の革新のみならず國民道德上の一大恩人と謂つべきなり。

り。近く「御文章」「御一代聞書」等披見すべし。

五

蓮如上人の後實如上人光兼繼職し證如上人を経て第十一代顯如上人光佐に至る。當時織田信長京師に入つて足利義昭を奉じ朝倉義景武田信玄毛利元就等と覇を争ふや顯如是等の徒と結托して信長と交戦す。蓋し信長の嚮きに家康と事を共にせし時その士酒井政親等屢參州佐崎の上宮寺を襲うて糧食を強奪せし事あり。顯如上人は是れより大に含む處ありしに似たり。然るに信長の軍利あらず惡戦最も努む。信長遂に正親町天皇に哀奏して勅に依り辛く和を講ずるを得たり。世に石山戦争なるものは是れなり。顯如の長子光壽是れを喜ばす。窃かに再舉を企つ。顯如勅に背くを怒つて弟光昭に繼職せしむるの意あり。母如春尼又窃かに光昭を愛す。此に於いて對外の問題は對内に轉じ自ら繼職の争となる。時に豊臣秀吉天正十九年を以て七條堀河の地十萬餘歩を寄せて本願寺を移建せ

しむ。此歳顯如上人寂す。尋いて豊臣氏亡び徳川家康起つて天下を一統す。是れより嚮き關ヶ原の役起るや家康光壽に負ふ處あり。繼職の争を聞くや光壽を援くべきは固より其所なり。されど又石山戦争の事實に依つて本願寺の勢力の偉大なるに恐るゝ處なしとせず。此處に於て人情と政策の兩面より本願寺分裂の計を立つ。即ち新たに烏丸に地を寄せて一字を建立す。大谷派本願寺是れなり。爾來三百有餘年を経て今日に至りし歴史は且らく是れを略す。上來所説の血統系譜を叙する事左の如し。



第二章 宗祖撰述概観

宗祖親鸞聖人には立教開宗の聖典たる『教行信證』以下種々の著作あり。今著作年代を追ひ左に是れを列挙すべし

『教行信證』

『淨土和讃』

『高僧和讃』

『唯信鈔文意』

宗祖撰述概観

眞宗教典綱要

『淨土文類聚鈔』

『愚禿鈔』

『尊號眞像銘文』

『三經往生文類』

『入出二門偈』

『往還回向文類』

『一念多念證文』

『正像末和讃』

『自然法爾章』

右の中『教行信證』のみ常州稻田留錫時代の著作にして他は委く晩年京都時代の選述にかゝる。而して『唯信鈔文意』『尊號眞像銘文』『三經往生文類』『一念多念證文』は收めて『眞宗法要』にあり。この外滅後その書簡を編纂したるもの又兩三種あり。即ち左の如し

『末燈鈔』

『御消息集』

左に少しく是れを解説すべし

一。教行信證

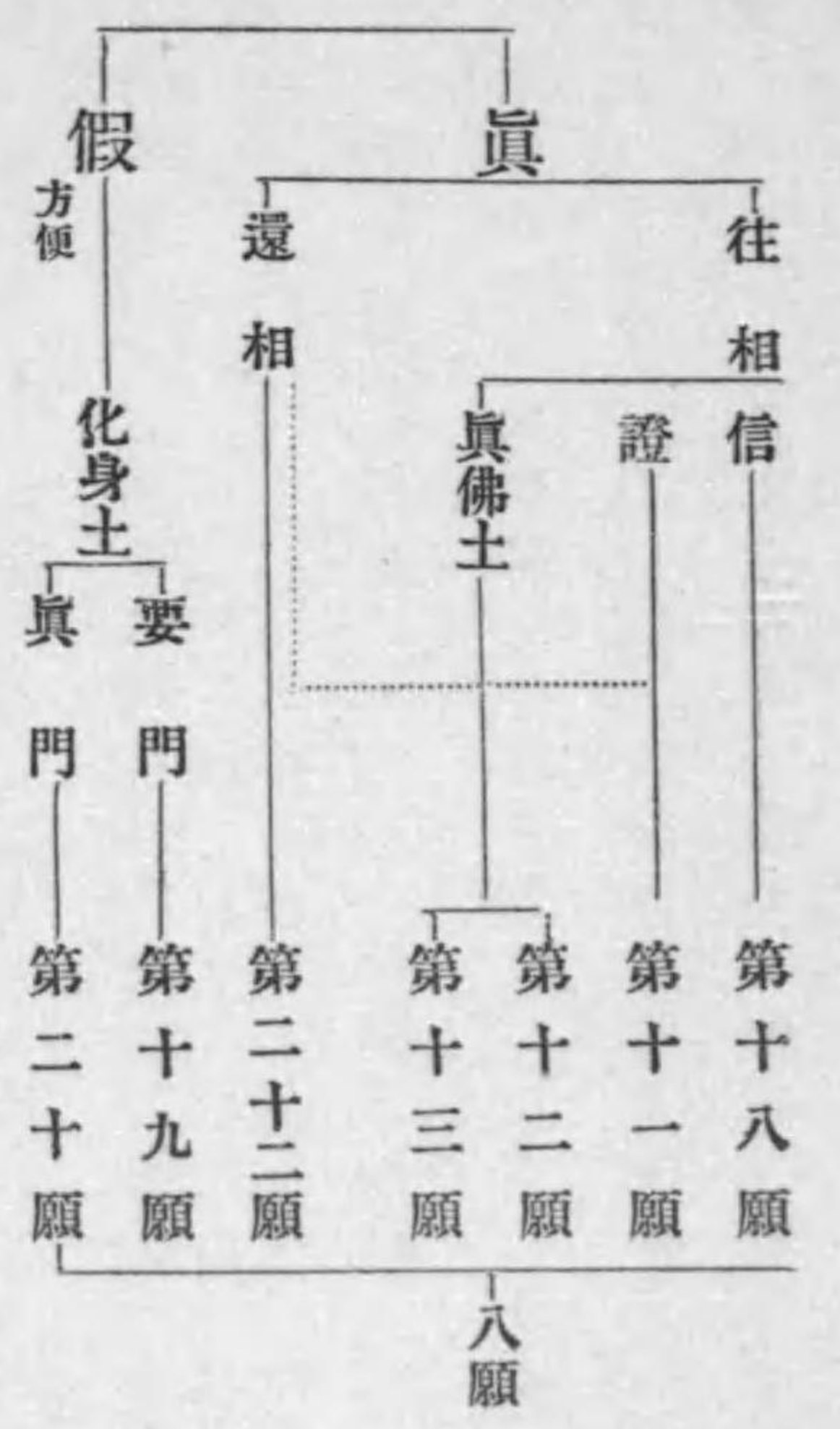
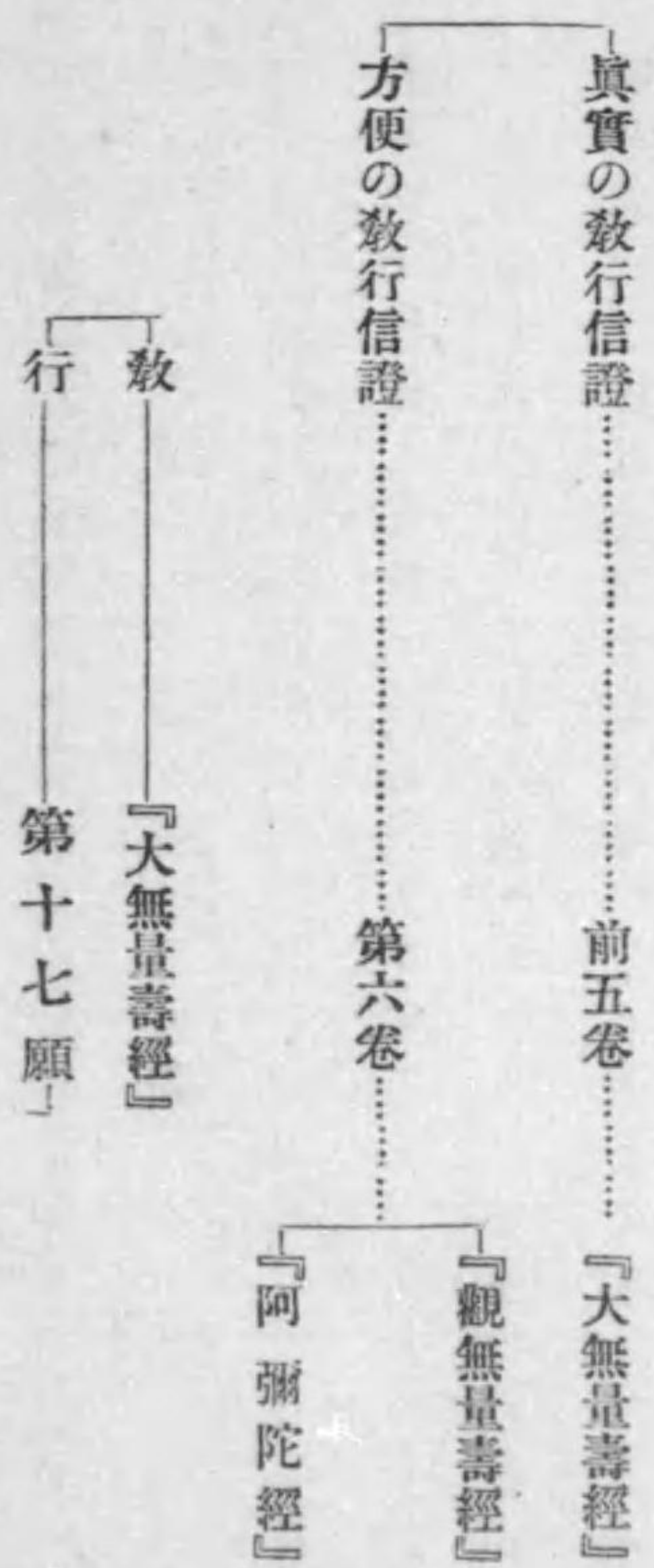
『教行信證』は具さに「顯淨土眞實教行證文類」と云ふ。或は略して『教行信證文類』『教行信證』『淨土文類』又は『廣文類』『廣本』『本典』『御本書』とも稱す。六卷あるも第三と第六とを本末に分ては合して八卷となる。宗祖五十二歳元仁元年常陸稻田に於ける著作にして一宗開立の根本聖典たり。然るに本書の著作年時に就ては二三の異説あり。高田専修寺傳に依れば安貞二年五十六歳の作なりと云ひ木邊錦織寺傳に依れば嘉禎三年六十五歳の作なりと云へり。蓋し聖人の著作には概ね再三の訂正或は淨書ありしものゝ如く元仁元年作は聖人自ら本書に云へる處なれば恐らく起稿年時なるべく他二説は訂正若くは淨書年時

を指せるものに似たり。されば随て原本も一種ならず。最初の草稿本は東京淺草の報恩寺に藏せられ、浄書本の一種は本派本願寺と高田派専修寺とに藏せらる。現時宗祖の眞筆本は右の三種に限れるものゝ如し。

本書一部六軸二卷に分たる。教行信證・眞佛土・化身土卷是れなり。製作の由序は主として自信教人信の上より佛恩報謝の餘に出でしこと勿論なるべしと雖、跋文を熟讀すれば又師範法然上人の『選擇集』を註釋せらるゝ祖意なることを知る。加之又題號の眞實(前五卷)方便(第六卷)の文字の案配より見れば浄土門の方便的法門に簡んで眞實の法門を鼓吹し給ふに在るを知らずんばならず。廣く六十餘部の經論釋より外典に及び依て以て内浄土の異流に對し外聖道及び外道に對し邪正眞假を判別して眞實の教行信證を顯はす。然り而して化身土は方便を擧げて簡別せしものなれば眞實義を示せるは前五卷なり。又眞佛土は證果を明せるものなれば證卷に攝すべく、一宗建立の範疇四法を出でざれば『教行信證』と呼ぶ所以なり。併し六軸を通じ各内題を附せるは又所明の異なるに由る。即ち

第一卷は「顯浄土眞實教文類」と稱し眞實教を明して「大無量壽經是なり」とある如く釋尊出世の本懐として説き給へる彌陀の本願即ち衆生往生の要路なり。第二卷は「顯浄土眞實行文類」と稱し眞實行を明して諸佛稱名の願より出でたる浄土眞實の大行即ち南無阿彌陀佛の名號なりと云へり。此の名號は願行具足機法一體萬徳圓備の嘉號にして衆生聞信すれば往生の行を満足するを以て行と名く。第三卷は「顯浄土眞實信文類」と稱し信を明して至心信樂の願より出でたる大信にして往生の正因なり。是れ前の大行を信する信なり。第四卷は「顯浄土眞實證文類」と稱し證を明して上の行信の因に依て得る無上涅槃即ち必至滅度の願に酬ゆる證果なり。第五卷は「顯浄土眞佛土文類」と稱し眞佛土を明して光明壽命無量の願に酬報したる報佛報土なり。即ち佛正覺の本體衆生往生の境界なり。第六卷は「顯浄土方便化身土文類」と稱し専ら化身土を明す。化身とは『觀經』の眞身觀にして化土とは『觀經』の浄土『大經』の疑城胎宮及び『菩薩處胎經』の懈慢界なり。正しく自力疑心の行者の至る處なり。即ち此

の方便に簡非して眞實に歸せしむるを以て製作の一由となす。
 更に教義の組織を概観するに開卷劈頭に「謹案淨土眞宗有二種回向一者往相
 二者還相就往相廻向有眞實教行信證」とありて教卷・行卷・信卷・證卷と次第し證
 卷の中程にて還相廻向を説き眞佛土卷は證卷を開き化土卷は別に方便の教行信
 證を列せり。今是れを一部の眞實方便より成れると又「淨土眞宗に二種の廻向
 あり往相の廻向に就いて眞實の教行信證あり」と云へるを經及び願に配當する
 に左の如し。



要するに『三經』八願を基礎として往還二廻向即ち眞實の教・行・信・證と方便の
 教・行・信・證とを解説開明し、這を説明すべく三朝淨土の七祖は勿論餘宗餘門の先哲
 その他論語の如き外典に至るまで六十餘種の典籍に就き縦横自在に是れを織り
 成して本書一部を製作せられしなり。

若し其れ『教行信證』一部の歸趣を云へば絶對他力を高潮せらるゝに外なら
 ず。即ち總序の初めに『三經』の意を約めて『三經』の歸趣の他力救済にある

ことを示し又「謹んで浄土眞宗を案ずるに二種の廻向あり」の文に依つて想見せらるゝなり。殊に廻向てふ文字は宗祖にあつて他力の異名に行使せられ其の廻向を往還に分ち更に四法に分たれしが『教行信證』一部の組織なれば組織上より見るも唯一絶對の他力を開闡せられしこと知るに難からず。されば後學斷じて冷靜なる批評眼を以て見るべからず。他くまで祖意の存するところを知り祖師の信仰内容の秩序的組織的發表書なるに徹倒し敬虔なる態度を以て拜讀讃誦すべきなり。

本書の公刊せられしは後世徳川時代に始まる。即ち最初の開板は寛永十三年の春の刊行になり世に寛永本と稱す。天保十一年大谷派本願寺是れを校訂して改刻依用す。寛永本より十年後の正保三年春の刊行になりしものを正保本と稱す。更に十一年後明暦三年冬の刊行になりしものを明暦本と稱す。安永五年本派本願寺の有に歸し校訂して藏版となる。天明暦本より十六年後即ち寛文十三年秋の刊行になりしものを寛永本と稱す。稍後れて天保十四年夏の刊行になり

し佛光寺本。近く大正元年の刊行になりし専修寺本あり。即ち大谷派本願寺の寛永本。本派本願寺の明暦本及び佛光寺本専修寺本の四本が現時眞宗各本山の藏版として流布しつゝあり。

二。浄土和讃

『浄土和讃』一卷は寶治二年七十六歳の著作なり。和讃製作の意は世人に領解し易からしむべく和語を以て佛徳を讃嘆したまふに在り。今は即ち浄土の依報莊嚴を和讃するの意なり。建章二首は『三帖和讃』即ち浄土高僧正像末和讃三百餘首の大綱を提唱せられしものにして初首は他力信心の得を挙げ次首は自力疑惑の失を示す。讚彌陀偈四十八首は曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』の意を和譯して浄土の依正功徳を讃嘆せしものなり。大經讚二十二首は『無量壽經』の大意を讀し、觀經讚九首は『觀無量壽經』の大意を讀し、小經讚五首は『阿彌陀經』の大意を讀す。又諸經讚九首は『華嚴經』『涅槃經』等の意に依り、現世利益讚十五

首は『金光明經』『般若經』『仁王經』等の意に依り、現世利益は求めずとも法徳の自然として得べき事を示す。勢至讃八首は『首楞嚴經』の意に依り、大勢至菩薩の徳を讃し、依て以て上來讃嘆する處の阿彌陀佛の光明名號及び利益は、常に十劫以來に止まらず。往昔恒河沙劫の古より利益を施したまふ彌陀念佛三昧の徳なる事を示さる。以上七項百十六首あり。

三。高僧和讃

『高僧和讃』一卷は製作の年時「淨土和讃」に同じ。眞宗七高僧の人格及び教義を讃嘆せられしものにかゝる。龍樹讃・天親讃各十首、曇鸞讃三十四首、道綽讃七首、善導讃二十六首、源信讃十首、源空讃二十首外に、卷尾二首を添ゆ。合して百十九首あり。

四。唯信鈔文意

『唯信鈔文意』一卷は、建長二年十月七十八歳の著作なり。或は云ふ、正嘉元年八月

月の作なり。今且らく前説に依る。聖覺法印の『唯信鈔』に引用せる經釋の文意を解釋せられしものなり。聖覺法印は宗祖と黒谷門下の同僚にして、實に宗祖を法然上人に紹介せられし先達なり。されば殊に聖覺法印と相善く其の『唯信鈔』の如きも尊重淺からず、有縁の同朋に推奨せられしこと、『末燈鈔』に云へるが如し。自身又寛喜二年仲夏下旬是れを筆寫して座右に所持したまふ。『唯信鈔』は安居院聖覺法印の承久三年八月四日の製作にかゝり、諸經の文に依り専ら淨土に歸すべきを勸め、信心名號の必然的關係を説き、且つ四箇の疑團を釋す。即ち臨終念佛と尋常念佛の問題、彌陀願力と先世罪業との關係、十念往生と宿善無宿善の關係、信心決定後稱名念佛の問題、是れなり。

五。淨土文類聚鈔

『淨土文類聚鈔』一卷は、建長四年三月八十歳の著作なり。或は建長七年七月と正嘉元年六月との異説あれども、恐らく教行信證と同じく筆稿清書の相違なるべ

し。『教行信證』六軸の肝要を抜抄し彼と異つて今は方便を略し、教相を略し單に眞實安心のみを開示す。故に又略文類の稱あり。即ち前半には眞實の四法を説き後半には三心一心の問答を載す。

六。愚 禿 鈔

『愚禿鈔』二卷は一に『二卷鈔』と云ふ。建長五年八十一歳の起草にかゝり翌々七年七月二十七日清書の功を畢る。上卷には權實眞假の教判を立て、二雙四重の名目を辯立し下卷には善導大師の三心釋を解説して自力他力の分際を闡明す。蓋し『愚禿鈔』の名は開卷劈頭の文字「聞賢者信顯愚禿心賢者心内賢外愚也愚禿心内愚外賢也」と云へるに由る。然り而して二雙四重の教判は聖人の佛敎觀にして、又淨土眞宗の位置を語るもの最も緊要となす。二雙とは頓教漸教にして正しく善導大師を承け、四重とは二雙各別に有する難行道聖道門易行道淨土門にして、龍樹菩薩及び道綽禪師を傳承し、是れを支那宋朝の擇法法師の教判なる

豎横超出に配せしものにして即ち左の如し。



教判は一代佛敎に於ける一宗の位置を語るものにして、全く宗祖その人の慧眼卓識に俟つ。頓教は頓に證果を得べき教法にして、漸教は是れに反し漸次に證果を得べき教法なり。豎とは自力修行の意にして、横とは他力進趣の意なり。又超とは速かに般涅槃に至るを云ひ、出とは漸々階級を進みて涅槃を證すべきを云ふ依て以て眞宗の價值と位置とを知るべきなり。

七。尊號眞像銘文

『尊號眞像銘文』二卷は建長七年六月八十三歳の著作なり。尊號の銘文と眞像

の銘文と十六個を擧げて註釋し、就中第六・七・十五・十六の四文は善導大師・法然上人聖覺法師の眞像銘文にして餘は彌陀尊號の銘文なり。尊號銘文は宗祖の當時本尊として奉安せられし九字十字の幅面天地に記されたる經論釋の要文にして、又眞像銘文は右諸祖の眞像幅面の上に記されたる釋文なり。宗祖即ち愚凡の輩をして領解易からしむべく解釋せられしものなり。

八。三經往生文類

『三經往生文類』一卷は建長七年八月八十三歳の著作なり。或は康元二年三月八十五歳の作とも傳へらる。前者を建長本と云ひ後者を康元本と稱し居れり。内容に多少の具略出沒あり。蓋し例に依つて前者は草稿本なるべく後者は清書本なるべし。『淨土文類聚鈔』と同じく『教行信證』の抜抄本なれども彼れの如く漢文にあらざると又方便教をも加へ詳しく眞假廢立を説きしを異とす。殊に三願・三經・三機・三往生の法相を詳述せし如き三經差別門の意を闡明して餘蘊なし。

九。入出二門偈

『入出二門偈』一卷は或は往還偈と云ふ。建長八年八十四歳の著作なり。七言百四十八句より成る。入出とは自力々他の意にして『淨土論』及び『論註』に明せる五念五功德門の中前四門は自力の因果なれば入門と云ひ同じく第五門は利他の因果なれば出門と稱す。即ち初め八十八句は『淨土論』に依つて入出二門の相を説き次二十句は『論註』を承けて他利々他の深義を述べ入出共に他力廻向なる所以を明し最後の四十句は道綽・善導大師に依つて相承せられたるを示し其解釋を掲ぐ。

十。往還回向文類

『往還回向文類』一卷は康元々々年八十四歳の著作なり。『無量壽經』の第十七・十八・二十一・二十二の四願文と唐譯『如來會』の十一願文とを引いて往相廻向・還相廻

向とも願力回向なることを示さる。

十一。一念多念證文

『一念多念證文』一卷は正嘉元年八十五歳の著作なり。隆寛律師の『一念多念分別事』に説ける一念多念の證文を解釋す。蓋し宗祖の晩年に當り一念往生・多念往生の論議盛んにして門徒の輩取捨に迷ひしこと『御消息集』に見るが如し宗祖即ち一念をひがごとく思ふまじき事多念をひがごとく思ふまじき事との二項を擧げて念佛往生と深く信すべき旨論されたり。

隆寛律師は凝然の『淨土源流章』並に舜昌の『勅修御傳』等に依れば多念義の主張者として黒谷より破門せられし如く傳へらるゝも『一念多念分別事』を見るに毫も其の形迹なし。蓋し律師の弟子敬日等の異義に陥りしものを誤つて律師に嫁せしものにあらざる歟。律師は宗祖と共に黒谷門下の僚友にして『一念多念分別事』は常に宗祖の尊重せられし處建長七年四月二十三日書寫せられ

し事跋文に見ゆ。又門弟子に是れを推獎せられし事も『御消息集』等に出づ。又決して多念義の主張者にあらざるなり。

十二。正像末和讃

『正像末和讃』一卷は康元々々年八十五歳の起草にかゝり翌年を以て功を畢る正像末讃五十八首疑惑讃二十三首太子讃十一首述懷讃十六首善光寺讃五首通計百十五首より成る。後人別に法語一章讃二首を附録す。され本和讃は其名の示すが如く正像末讃を以て本體とす。蓋し佛涅槃後は正像末の三時を経て佛法衰運に傾き末法濁世は獨り彌陀本願のみ興隆すべしと説き釋迦教彌陀教を對立し釋迦教は聖道の法なれば龍宮に隠れて又現せずと雖彌陀教は淨土の法なれば獨り五濁惡時惡世界に於いて光輝を放つ。然り而して釋迦も又彌陀教に對しては時機相應の法なりとして推獎讃仰せらる。疑惑讃は佛智不思議を疑ふの罪を誠めて信心を勧め太子讃は時機相應の在家生活を營み眞宗の先達をせられし聖徳

太子の恩徳を讃嘆せられしなり。述懐讚は『正像末和讚』に「正像の二時は終りにき、如來の遺弟悲泣せよ」と云へる餘意を承けて末法彌陀の弘願に遇ふと雖尙ほ眞實の心なく清淨の心なく無懺無愧にて一生を終るを歎き、佛恩の廣大なるを感激したまへる文字なり。自然法爾章は後人の附加になるだけ製作の年代又遅く文應元年八十八歳の筆にして實に宗祖最後の文章なりとす。

十三。末燈鈔

『末燈鈔』一卷は宗祖七十九歳以後諸處の門人等に遺はされし書簡集にして十二章を收む。正慶二年四月從覺上人慈俊の宗祖滅後七十七年に編集せられしものなり。その章目左の如し。

- 一、有念無念の釋
- 二、答笠間念佛者
- 三、與性信書

- 四、與眞佛書
- 五、自然法爾の釋
- 六、與乘信書
- 七、與淨信書
- 八、五說等の釋
- 九、報教名書
- 十、復淨信書
- 十一、答有人書
- 十二、答眞佛書
- 十三、答慶信書附慶信同書
- 十四、與有人書
- 十五、答隨信書
- 十六、與有人書

十七 以下は法語と見ゆ。

何れも門弟子の質疑に答へられしものにして宗意安心の研究上缺くべからざるものに屬す。

十四 御消息集

『御消息集』一卷は覺如上人の編集せられしものにかゝる。體裁等總て『末燈鈔』に同じ。二本あり。一本には十九章を收め二本には十一章を收む。蓋し十章本は『末燈鈔』と重複せるものあるを以て八章を除きしものなり。今は十章本を取つて『眞宗法要』に收めり。その章目左の如し。

- 一、與有人書
- 二、答性信書
- 三、答教忍書
- 四、與念佛衆書

五 答慈信書三首

六 同

七 同

八 與眞佛書

九 與性信書

十 答唯信書

十一 答慶西書

右の外宗祖の撰述として世に傳はるもの尠からざるも多くは眞僞未決のものに屬す。今先啓の『淨土眞宗聖教目錄』に依つて左に列記すべし。

『諸經要文』

安順二年五十六歳の作

『磯長夢想記』

建久某年九月の作

『六角堂夢想記』

建仁元年四月の作

『南無言辭集』

建長七年の作

宗祖撰述概観

『三經大意』一卷

『二十一個條提』

貞永元年八月の作

『淨土二教門圖』

『西方指南鈔』

康元二年の作

『迎接曼陀羅由來』

『帖外和讃』

『血脈文集』一卷

覺如上人の編集

この外なほ片々たる著作として知らるゝものあるも右の如き事情なれば是れを略す。

第三章 歎異鈔

『歎異鈔』の著者に就ては古來異説あり。或は如信上人の作なりと云ひ或は常陸川田の唯圓大徳の作なりと云ひ或は又覺如上人の編になりしものとも傳へら

る。今且らく如信上人の著作と云ふを以て穩當とす。一部十八章より成り、前半九章は宗祖聖人の物語を記述し後半九章は異見邪執を擧げて信を勧め、疑を滅しむ前者は顯正的にして後者は破邪的なり。本鈔の序に「竊に愚案を廻して粗ば古今を勘ふるに先師口傳の眞信に異なることを歎き後學相續の疑惑有ることを思ふ」と題意を説明せるを見れば一部の要後者に存するを知る。即ち第十章は異見邪執を擧ぐるに就ての來由を述べて宗祖歸洛後豫て勸化を蒙りし關東の門徒中に異義者を出だせし事を云へり。第十一章は誓願を信じて念佛するか名號を信じて念佛するかの疑問なり。第十二章は愚癡無智の輩が念佛するを卑みて一往は學問も必要なりと云へる異見なり。第十三章は彌陀の本願不思議なりとて惡を畏れざるは本願ほこりにして後生叶ふべからずと云ふ異義なり。第十四章は念佛を策勵して自己の罪業を消滅すべしと云ふ邪執なり。第十五章は煩惱具足の身を以て證を開くと云ふことあるべからずと云ふ異見なり。第十六章は信心の行者惡事をなし又は口論をなすときは必ず廻心すべしと云ふ異見なり。第

十七章は念佛の行者極樂に生るゝと云ふも尙ほ邊地の往生にして聽て又地獄に墜つべしと云ふ邪執なり。第十八章は施入物の多少に依つて大佛小佛を見ることが云ふ異見なり。眞宗初期の異義研究書として本書の如きは最も重要なものゝ一に屬す。

第四章 覺如上人撰述概観

覺如上人は眞宗再興の明星にして又歴代宗主中稀に見る學匠なり。著書又多し。何れも博學能文の跡を窺ふに足る。今撰述年代を追うて左に列記すべし。

『報恩講式』

『親鸞傳繪』

『拾遺古德傳』

『敬白文』

『執持鈔』

『教行信證大意』

『口傳鈔』

『改邪鈔』

『本願鈔』

『願々鈔』

『最要鈔』

一。報恩講式

『報恩講式』一卷は永仁二年二十五歳の著作なり。由來講式は諸宗の古德に依つて行はれし法事勤行の儀式なり。弘法大師の『舍利講式』の如き、源信僧都の『六道講式』の如き、永觀律師の『往生講式』の如き、解脱上人の『誓願講式』の如き、明惠上人の『涅槃講式』の如き、即ち是れ。今又是れと同じく報恩謝徳として祖師の徳を讃する報恩講式にして本宗に講式あるの始めなり。即ち毎年の御正

忌に拜讀するを例とす。一部三段より成り、一に眞宗興行の徳を嘆じ、二に本願相應の徳を嘆じ、三に在世滅後の徳を叙す。

二。御傳鈔

「御傳鈔」二卷は具さに「本願寺聖人親鸞傳繪」と云ふ。永仁三年二十六歳の著作なり。信州康樂寺の淨賀繪を作り別行す。淨賀は西佛房の子なり。蓋し傳繪とを別行したるは在覺上人の時代より初まりしものゝ如し。一部始終十五段より成る。即ち上卷八段下卷七段ありその内容左の如し。

出家學道
吉水入室
六角靈告
蓮位夢想

上卷

選擇授受
信行分座
信心辨異
入西寫眞
師資遷謫
稻田興法
山伏歸依
箱根參籠
熊野現異
入滅西歸
廟堂建立

下卷

本鈔に就ては別に異本「善信聖人親鸞傳繪」二卷あるも多く異ならず。上卷六段下段八段即ち十四段より成れると蓮位夢想と入西寫眞の二段を缺き、建曆歸京

覺如上人撰述概観

百七十九

鎌倉校經及び伊勢詞鹿島詞參詣の三段を添へるを異にするのみ。

三。拾遺古德傳

「拾遺古德傳」九卷は正安三年三十二歳の著作なり。鹿島の門徒長井道信なるもの上京して上人に謁し元祖法然上人の傳記編纂を懇請せしに依り製作せらる。一部七十二段より成り一代の行實事跡網羅して餘さず。文辭婉麗を極め淨土他流の諸傳と雖も其右に出づるなし。淨土他流の手に成りし黒谷傳多く我祖を忌みて記述するものなし。蓋し兩者の關係固より疑ふべきにあらざるも由來非僧非俗を標榜し肉食妻帯を取行せられし我祖の如きは當時目するに僧となさず。或は一種の異端者と見做されしやも知るべからず。是れを以て黒谷門下に數へず。従つて傳料に其名を見ざる所以なり。本書の如きは此失を補ひ黒谷傳の十全なるものとして見るべきなり。

四。敬白文

「敬白文」一卷は文保三年四月五十歳の著作なり。極樂の三尊菩薩聖衆及び三國七高僧別して善導大師・法然上人及び宗祖聖人に敬白せらるゝ文にして敬虔感激の文字を以て充さる。

五。執持鈔

「執持鈔」一卷は嘉暦元年九月五十七歳飛彈の願智房永承なるものゝ需めに應じて執筆せらる。永承は禪門の徒なり。即ち禪徒の懇請に應じて大谷相承の法語を祖述せられしものなり。

六。教行信證大意

「教行信證大意」一卷又「四法大意」と云ふ。嘉暦三年十一月二十八日五十